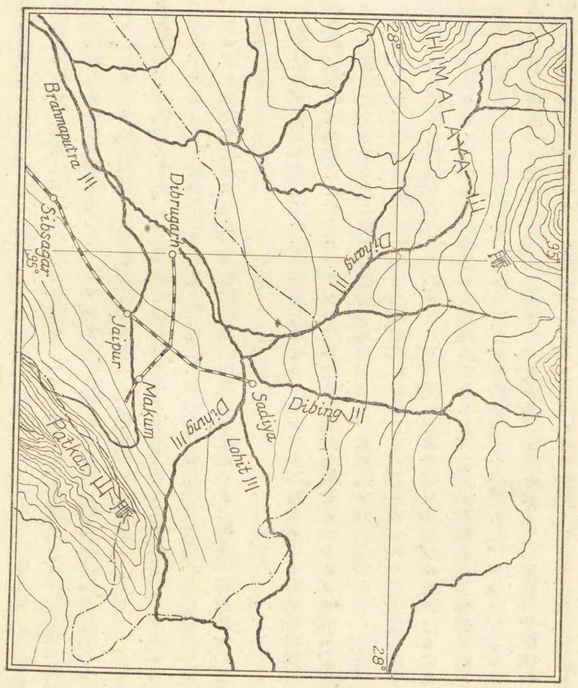
シッキム・ヒマラヤの特徴は上に云ふが如く峻嶺と深谷なり。谷澗は必しも狭深ならざれ共、これを俯瞰せば脚底に一條の銀蛇を見るが如し。次に大觀は雲海なり。ダージリン近郊の山頂よりベンガル平原を望めば、旭日未だ出でざる時はベンガル平原を望むべしと雖も、日の出づるに從ひ徐々と白雲は平原より騰り遂に一大雲海を生ず。この景觀は臺灣阿里山に於ても望み得べしと雖も、到底規模小にしてベンガル平野の雲海を望むが如き大觀に非らず。

アッサムの極東北隅

第三にはアッサムの極東北隅なり。此の地形は全然前の兩者の形と異にして全く平川なり。この地方の特徴は深く陸地の中に在るに拘はらずその高度低く、而も平川をなすによりベンガル灣より北に面して折れ、更に一千二百キロメートルを隔てゝ猶その高度は一百四十メートルを出でず。デブルガル（Dibrugarh）は百二十三メートルなり。この上流のサデア（Sadiya）は百三十八メートルなり。是れ揚子江、イラワヂと共にプラマプトラも同樣の緩流をなす所以なり。而してサデアの附近は三水合流せり。プラマプトラの本流はヒマラヤの峽間を破り、北より來り最西を流る。是の附近にてはデハン（Dihang）と云ひ、同じく北より來りサデアの西にてデハンに合す。次はロヒト（Lohit）にして、東より來りサデアの南側を過ぎ上の兩川と合す。この三川の合流點は殆ど相接し、サデアの西南にあり。別にデヒン（Diling）なる河あり。これは南東ビルマの境上山脈より出で、上のロヒト、サデアの南にて合す。故に三川と云ふも實は四川と云ひて可なり。而してその水流は必しもデハン卽ちサンプを以て大なりとなさず。この地方は相當の多雨帶にして、特に北より東に延び、四千メートルの高山脈は十分にベンガル灣より來れる雨雲を捕捉し得るを以て、その降水區域は延長せざるも水量は寡雨帶の長距離より大なり。

サンプは實に長距離にして、東經八十二度の邊より發し、ヒマラヤの後方を繞り、是の地に至るまで既に一千六百キロメートル以上を經過せり。皆少雨帶にして、ヒマラヤの峻嶺に遮られ雨雲の此の流域に達するもの少なし。故に大量の雨を瀉下するはヒマラヤを横斷せる峽間に於て卸て大なり。他の兩川は僅々二、三百キロに過ぎず、その流域よりせば僅少なりと雖も、支流の多きと、降雨地域を通過するにより水量極めて大なり。故に久しくその孰れを以てチベットのサンプ川の下流なるやを斷じ得ざりしなり。最近に去來幾多の探檢測量の結果は最西のデハンを以てその後身なりとし、プラマプトラの本流となせり。是の附近は高山北又東を圍めりと雖も、印度第一の濃雲の地にして雪山の賞觀に便ならず。

プラマプトラの航運はデブルガルを以て普通の終點となせりと。デブルガルはこの附近を領せるラキムプル縣（Lakhimpur）の首府が如し。寧ろ三川合流以下の地點を可となせりと。デブルガルはこの附近を領せるラキムプル縣（Lakhimpur）の首府なるを以てなり。この縣治はアッサム東北隅を管轄せるものにして、この地方は石炭、石油の重要産地なり。石炭はベンガル、ビハル、オリッサ、中央印度等の大炭田に比すべからざるも、石油はビルマに次ぎ印度有數の油井なり。故に平川なると共に鐵道は縱横に開通しこれが便利をなせり。然れども舟運も亦デブルガルより大に用ひられ、唯ブラマプトラは揚子江、イラワヂに比するに往古より人烟稀少なりし爲、之れが馭御をなさず野馬の感あり。揚子江、イラワヂは二千年來人の用をなせるものなり。航路も定まり舟楫の便は十分なるも、プラマプトラは平川の中を下り水路錯雜し淺深一ならず。概ね大河は河身廣ければ水淺く、水路多ければ水多く溯し易し。故に揚子江の如き、安慶の前後の如き冬季の淺洲を生ず。プラマプトラはデブルガルよりベンガル灣に入るまで水路の整備せらるゝ處なし。



アッサム東北隅地形

他日印度の水利は大禹を待たざるも、この改修を断行せばアッサムの豊富は決してベンガルの下に位するものに非ら

この平川より直ちに支那の四川に通ぜんとするは、何人にても地圖を披けば是を考へざるなし。今日蔣軍も皇軍のビルマ占領と共に彼等の輸送路の消滅を告げ、是れを以て代へんと欲せり。事必しも不可能に非らず。然れども極めて困難なり。特に西部に於て甚し。所謂サルウィン、メコン、金沙江の三川幷流の域は北緯三十度以北にはやゝ平易なれ共、その以南は困難なり。今この平川の北境たる北緯二十八度の線より三十度に至るには、少なくとも五千メートルに近き高嶺を超えざるべからず。更に三十二度の線まで北上せば兩三の四千メートルの高嶺有るもやゝ易し。これより東行すれば所々兩三の高嶺を踰ゆるも、急峻なら寸十分に車道を通ずべし。唯平川より直ちに五千メートルに至るの間は、海上より富士山頂に上るより更に一千メートルを加ふるを以て容易の業に非らず。然れども將來に於ては大東亞建設の上よりも絶對に踏査設計をなさゞるべからず。決して蔣軍にのみ委かし此れが無謀を笑ふべからず。

カッチのラン

第四はカッチ（Kutch 又は Cutch）のラン（Ram）なり。カッチのランは西部印度に於ける奇形の現象にして、海にして海に非らず、沙漠にして沙漠に非らず。雨期にして雨あらばランは水中に入り、乾涸せば沙漠と變ず。ランとは此附近にて沼澤の義なり。

帝國海軍水路部發行の印度西岸水路誌（三二乃至三四及三三〇頁）に之を記述せり。今抄錄するに、カッチの最顯著なる地形はラン卽ち鹽の沙漠にして、此國の北側及東側に沿ひ延亙す。北ランは東西の長さ約一百六十浬、幅八十浬、

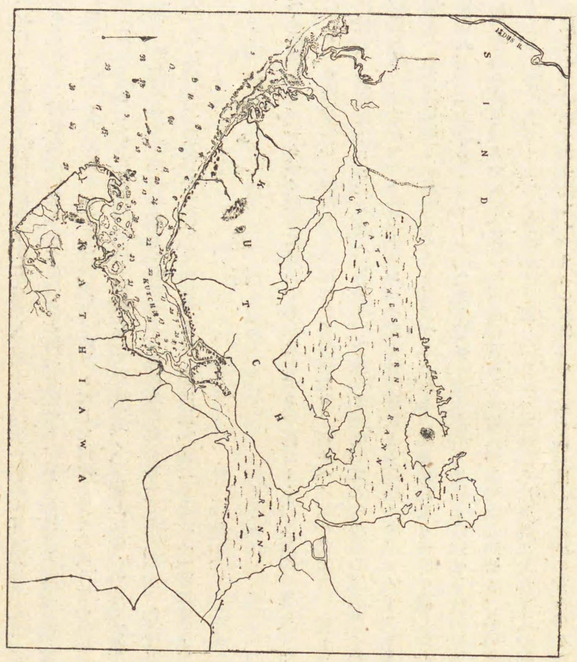
推定面積約七千平方浬に達す。東ランは東西の長さ約七十浬、廣袤約二千平方浬あり。（合計せば九千平方浬なり。）土壤は鹽分を含有して暗色を呈す。而して日光之に作用する爲に土質概ね凝固す。沙漠は殊にランの東部にては往々全面鹽にて被はれ、夏陽映射して輝々たる純白色を呈し、眼目を眩惑せしめ且蜃氣樓を現出すること多し。植物は若干の小島の上に雜艸及二、三の矮小挫折せる灌木を見るのみにして、之を除けば全く艸木生育の徴なし。然れども野驢及羚羊は沙漠上を徘徊し食餌を漁れり。南西信風季には高潮に際し海水ラン中に浸入して、深さ〇・三乃至〇・六メートルに及ぶ。東ランは著しく浸蝕作用を蒙れり。即ち海は遙に東方へ擴がり、以前水上に現れたる乾燥地も既に短艇を達着し得るに至れり。

又曰く（二三〇頁）、ランなる語は沼澤を意味し、カッチなる語は沖積層を意味す。十一月より二月に至る間の北東信風季には、ハンスタル（Hansthal）川口上流十五浬にあるジャンギ（Jangi）の東方なるランは干涸し人及駱駝の通行に堪ふるも、表面の細沙は北東風に煽られ旅人をして眼目を開き得ざらしむ。偏西風中は風の爲め驅逐せる海水東方幾十浬に達し、ランは一大内海を現じ、全く歩行する能はずと云へり。

是に依るにランの形狀は概ね想像するに難からず。不肖も五印度を周遍せりと雖も未だランに至らず、不肖の門下も此地域に達せず。蓋し特殊の地形を研究する以外に必要なきを以て、恐くは邦人にても此地に至りし人は稀有なるべし。

ランの今日の狀況に至れる以前は西ランは河川の注入を蒙りしが如し。サー・トマス・ホルデッチ（印度、一三八―三九頁）はヘイグ將軍（Haig）の言を引用し、インヅス或はサトレジ等の河川の昔時この中に流入せしが如しと云ひ、恐くはインヅスよりも、サトレジ又は其他の河川がラジュプタナに今日消滅せるも昔時に流下しランに注入せしなら

（水路部海圖三一〇一號に依る）



カッチのラン

特殊區域地形

ん。元來このパンジャブ一帶の河川は沙を下すこと多く、數十年以後には河身は平原より高く、終に淤塞して別道を開くに至るは疑を容れず。故に汎濫の終るやその以前と河身を變ぜり。（以上意譯）と云ふ。蓋し眞なるべし。支那河北、河南黃河の變轉を見るも亦此說を信ずる憑證たり。西ランにして河水を受くれば今日の如き事なかるべく、東ランもカムベイ灣（Cambay）より水路を通ぜば又海灣として存在すべく、決して今日の如く陸にして陸に非らず、海にして海に非らず、沙漠にして沙漠に非らざるが如き不可解の地域は存在せざるならん。如此き不可解の存在を悠々幾百年、而も九千平方哩（三萬六百平方粁）を抱擁するは、印度は大國なりと云ふ一言に盡くるのみ。

ボムベイ近傍

第五はボムベイ近傍なり。ボムベイ近傍は奇異の形狀をなせり。西ガート山は東側に聳え、西はアラビヤ海に臨み海水深く陸地に入り、島嶼棊布し、他に見る事稀れなる形勝なり。ボムベイは小島なり。而してサルセット島（Salsette）の南端に位し、東側にトロンベイ島（Trombay）を竝べり。而してこの小島の東側卽ち內側は所謂ボムベイ港にして埠頭、船渠を築く。サルセット島及トロンベイ島とは築堤により連絡せり。サルセットも亦島なれども、この東側は海水の灣入せるを以て明了に島なることを知るべしと雖も、北側は島なりや否や斷じ難し。現在はゴルバンダル（Ghorbandar）一名バッセイン・クリーク（Bassein creek）と名くる海水の通ぜる河川にて大陸と遮斷せらる。この鹹水河は島の東側を繞り、タナ（Thana）の市邑の前面より灣入せる海水と通ぜり。このタナの稍北方にウルハス（Ulhas）と名くる小河、西ガート山より來れり。而してウルハスは直ちに海灣に入らず之の鹹水河に入れり。故に往昔はウルハスは今の鹹水河を河身としバッセインに流下せしならん。而してタナの前面の小水道は人工か天然か知らざるも、狹小の水道なりしも海灣の潮汐の滿干の差多きを以て遂に漸次擴大せしならんと信ず。現在は再び之に架橋して又大陸と接續せり。

ボムベイ灣內には上の兩島の外エレファンタ（Elephanta）及ブッチャ（Butcher）等の小島あり。一般にこの附近は島と大陸の區分不明了なるもの甚だ多し。是れ潮汐の大なる爲め潮流の急なると、浸水、乾涸と兩ながら存するを以てなり。大潮昇四・二メートル、小潮昇三・二メートルなり。必しも潮汐の差大なりと云ふべからざるも、各陸地の水路は概ね漏斗狀をなせるを以て、沙洲の淤塞せる區域は漸次擴大せらるゝと共に一方は又浸蝕せらるゝ區域も少なからず。加ふるに西ガート山より急降下せる諸水流は相當大量の沙土を海中に流下せり。是れ亦灣內を淺淤せしむるに便を與ふ。

地形よりせばボムベイ灣は實に良港なれ共、事實は水路錯綜して決して容易に入出すべからず。十メートル以上の深水道は極めて少なく、埠頭の如きも深吃水の大船は高潮に依らざれば入港すべからず。最近ボムベイ島の最盡頭にコラバ（Kolaba）と名くる地あり、この西方にバックベイ（Backbay）と名くる灣あり、是に築港をなさんと計畫せり。是れによるに、その大部分を埋立て市街地を作らんとするにあり。而して北東側に新築港をなす案にして、相當大計畫なれ共、灣內は水極めて淺くして、埋築は容易なれども浚渫は工大なりと知るべし。ボムベイ對岸の大陸は海水の灣入せるもの手掌の五指を見るが如しと雖も、皆淺水にして其用をなさず。加ふるに之に達すべき灣內すら既に淺水なり。

ボムベイの繁榮は商港として重要なり。何故に今日までこの大海灣に適當なる根本計畫をなさざりしや疑なき能はず。恐くは大潮小潮の昇騰四メートルに達するを恃み、吃水八メートルの汽船を埠頭に着せしむるに足るより放任し

圖近附イベムボ

（水路部海圖2901號に依る）

荏苒今日に至りしならん。人口の急速增加と共にボムベイ島内には人を容るゝの地なく、遂にバックベイの修築を計畫せしならんも、共に姑息の二字の下に容るを免れず。强て將來の大計畫を以てせば、トロンベイ島よりブッチャ島に至るの間に大埋築と大浚渫をなすに非ざれば到底大印度西部の港灣たらしむべからず。都市も亦サルセット島上ヴェハル湖（Vehar）邊等を住宅地となさば、三百餘萬の人口を容るゝも決して狹隘迫塞を感ぜざるべし。サルセット及エレファンタ島には石窟寺あり、西ガート山は皆奇形の峯頂を有し、旅人の目を慰さましむもの少からず。

ボムベイは一般に氣候は良好なり。周年是に住居する人も亦甚しき困難を云はず。マラバル海岸長しと雖もボムベイ以外に良港なし。近時英國海軍は此地を以て軍港に兼用すと雖も全く防禦に適せず、加ふるに海面狹隘にして殆ど其用をなさず。

印度南端

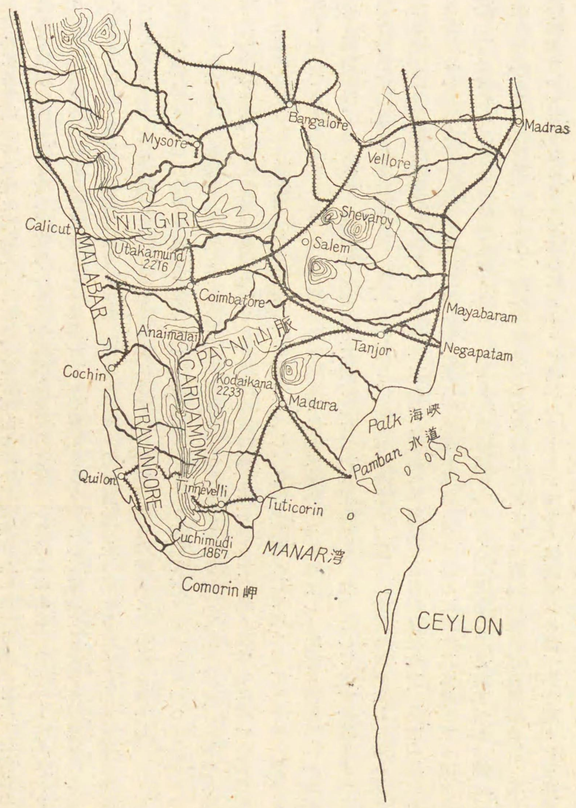
第六は印度の南端なり。總論の下に概略を記せり，今その特異性のみを記すべし。その最も特異なるは山岳なり。總論の下にこの附近の山脈につき少しく之を記せるも、今詳言せば二箇に分つべし。一はニルギリ（Nilgiri）なり。二はアナイマライ（Anaimalai）——別名カルダモン山（Cardamon）——なり。共にその形を一にすと雖も、甲は山塊にして乙は山脈なり。甲は鐵道にて上に達す。この鐵道は齒條にて上下す。急勾配なるを以てなり。勾配は千分四十八（十二分一）なり。この鐵道は極めて好風景にして、不肖も曾遊の地なりとす。酷だ阿里山鐵道に類し、高度も亦相同じ。山下より山上まで三十六キロに過ぎず。風光は阿里山より遙に勝れり。鐵道に對せる絶壁も亦塔山より更に

大なり。頂上も亦阿里山より遙に大にして、ウタカムンド（Ootakamund）は山間の盆地にして巧に之に道路を通じ、一隅を塞ぎ湖沼を作り、住居に便をなせり。市街は平穏なる好風景なれども、一たび外方の突角に出づれば斷崖一千數百メートルを削り、人をして驚かしむるに足る。晴天の時は遙に印度洋上を望むべし。道路も十數キロメートルは概ね小起伏にて皆自動車を通ぜり。南海第一にして、敢てヒマラヤを羨まずと云ふ。蓋しヒマラヤは高山を望むにあり、ニルギリは平原を望むにあり。一は寄峭山にあり、一は脚下に在り。人その欲する所に從へば可なり。然れどもヒマラヤの避暑地（カシュミルを除く）は皆山谷にして馬背より狹し。鞍を擬するの地に乏し。ニルギリは猫額なりと雖も平原なり、徜徉するに車行も亦難しとせず。若夫れ奇峭を欲せずば山上に閑居すべし。然れば溫帶の田園に住むが如き感あり。ニルとは藍色の義なり。此山はストロビランテス（Strobilanthes）の植物多く、藍花を開くを以て名あり。カルダモン山とはカルドモンを野生せるより名く。カルドモンとは Elettario Cardamomum にして香料植物なり。和名は小荳蔻と名く。此附近には野生せるも、他に栽培する時は概ね成功せざるが如し。

この山脈は東方に支脈を出す。その北東支脈をパルニ山（Palni）と名く。コダイカナル（Kodaikanal）と名くる地に天文臺あり。ウタカムンドと高度は同じきも、雲量やゝ少きを以て天象觀測に便なるを利となせり。不肖は未だ踏査せず。地域はウタカムンドより小なるが如く、避暑地として使用せらるゝも未だ及ばざるが如し。然れ共屹立して峭壁千仞の點は同一なり。この次の南支は北支の如く高大ならず、概ね一千三百メートル前後なるが如し。別に避暑地となせる事を聞かず。而してコモリン岬の上にはクチムデ（Cuchimudi）と名くる峻峯南海を俯瞰せり。峯頂は一千八百六十七メートルなり。玄奘三藏の大唐西域記に依るに、秣剌耶山東有布呾落迦山山徑危險巖谷欹傾山頂有池池側有石天宮觀自在菩薩往來遊舍の語あり。不肖この文により此附近を探らんと欲したるも、今に至るまで之を果さ

印度南部地形

特殊區域地形



す。本邦及支那に於ては觀音菩薩を南海大士と云ひ、又普陀山と云ひ、南海岩上に坐せる圖像をなすは皆この文に基けり。本邦にては紀州那智山を擬し、支那にては舟山列島及廈門を擬するは皆是に由る。チベットのグライラマの宮殿はポタラと名くるも亦是に由る。グライラマは觀音大士の變化せるものとして尊崇せるよりその宮殿にこの名を附せり。この文より推定するに、秣剌耶はマラヤにしてカルダモン山を指し、その東なる文字よりせば北支か南支か孰れかを指せるものなり。文より推すに恐くはパルニ山に非ずやと信ず。他日の踏査を待ち斷じ得べし。

この山脈の西側はコチン（Cochin）及トラヴァンコール（Travancore）にして、コチンはボムベイ以南コモリン岬に至るマラバル海岸唯一の港灣なり。決して良港と云ふに當らずと雖も他に無きを以て是を用ひ、山脈の東南側は沃野なり。特に棉作に適す。この地域は高溫乾燥せるも西部印度の如く甚しからず。恐くは將來は第一の棉作地たるべし。エヂプト及海島種の如き高級棉は十分栽培の成功を期すべし。これが港灣としてはチュチコリン（Tuticorin）あり。この港も決して良港に非ざるも、マナル灣内之を除きては他に築港すべき地なし。此港も稍前面に小島礁脈等あり、故に之を利用せば、ボムベイと幷馳するが如き大港は望むべからざれども、地方としては十分利用すべき港なりとす。此港の特色は雨日少なきに在り。一箇年間の雨日は三十日に過ぎず、三百三十五日は雨なし。是れ港として極めて有利なる條件なり。港の設備完全なりと雖も海洋大汽船を覆ふべき家屋なるもの存在せず、降雨の時は全く荷役を中止するの外なし。特に南洋の豪雨は一たび船艙に注入せば救ふべからず。然るに三十日に過ぎざる雨日ならば、港の設備にして完全ならば荷役の時間を要すること少なく入出速に、小港にして大港の用を爲すべし。鐵道はこの大平原の中央を西北より東に横斷、シーロン島に入れり。この事は上に記せり。若夫れ他日荷物輻輳せば、北方より來れる多量の物はチュチコリンに下さず直ちにシーロン島に入りトリンコマリに達せしめば、幾千萬トンも容易に呑吐すべく、港灣として天然の形狀は他に比類なき良港なり。

次に此の平野は到處印度教の大寺院多し。最古の建築ならざるも十分見るべし。カルダモン山はカルドモンの野生を栽培に變ずるの外、恐くはその東面は將來カカオの如き十分産せしむべき地勢なり。此の植物は無風溫暖を第一條件とす。ニルギリはキナ栽培に成功せり。カルドモンも亦恐くは栽培せば成功すべし。珈琲は不成功ならざるも必しも成功と云はず。是れ多濕に過ぐるを以てなり。寧ろ遙か東北方のセヴェロイ山（Shevaroi）を良好とす。乾濕適當なるを以てなり。ヘヴェアゴムも低地に於てはニルギリ、カルダモン兩ながら適す。印度に於ては純熱帶栽培物は此の兩山の地に乾濕と高低を考へ行はゞ可なり。猶その及ばざるはシーロン島を利用すべしと信ず。從來は未だ十分に利用せられず。

シーロン島

第七にシーロン島を再び詳述す。シーロンの山脈は既に記述せり。今は先づ海岸を記し、次に內陸に及ぶべし。

海岸は北部より中部に及び、北緯七度以北はその海岸に鹹水の沼を有するを特徴とす。中部沿海は十浬前後の淺水を隔てゝ深水なり。而して北部は、東岸は徐々淺水面を增加し、ペドロ角（シーロン北端）の邊にては三十浬に及べり。西岸はパルク海峽（Palk）は上に記せるが如く全く淺水にして、アダムス橋と名くる礁脈以南のマナル海に於ても北部は三十浬、南に從ひてその間隔を漸減し、コロンボの前面にては十五浬とす。是の以外は極めて深水なり。東岸一帶は北東風に、西岸は南西風に暴露し、深海に生ぜる巨浪は海底の激淺するより波浪は海底の泥沙を動かし、波浪の方向に一致せる水中沙堤を作るに至る。この沙堤に妨げられ自然に波浪はその形を變じ、この堤上を通過せる後

は又第二の沙堤を作る。是の形は水上波浪の形の如し。而してこの沙堤の漸次隆起し、再び波浪を起す能はざるに至らば、その外方と陸地との間の凹所は鹹水沼として殘留す。この原則によりシーロン北中部の兩側に鹹水沼多し。然れども南岸に至らば風浪の方向必しも兩側の如く明かならず。故に七度以南にこれを缺けり。臺灣西岸の如きも此例に由る。

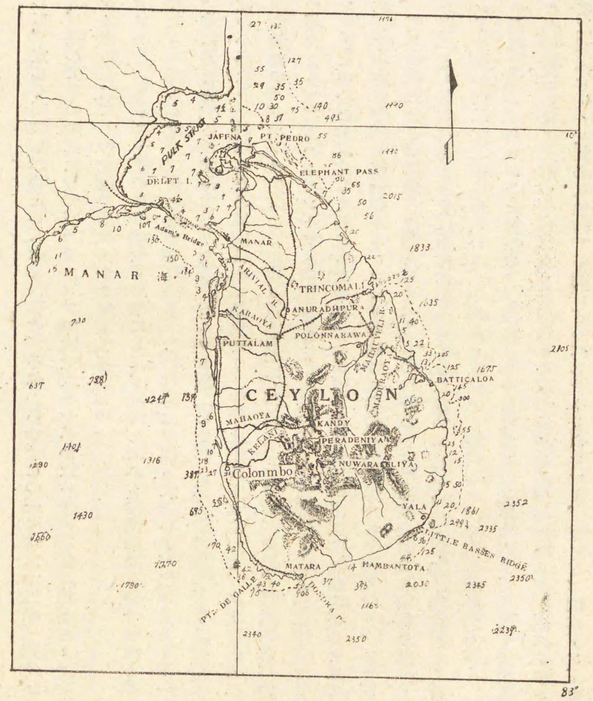
マナル島の南方シーロン西側上は古より有名なる眞珠の産地にして、現在も眞珠堆の名稱を存せり。上古印度第一の寶珠は皆この近海より得たるものにして、是れを得んが爲め印度岸より漁舟にて海上に來れるもの遂にシーロンに漂着し、島民に殺害せられたるもの甚だ多く、爲にシーロンをして羅利國と稱するに至れり。羅利とは Rakṣa にして、喰人の惡鬼に付せる印度名なり。果して當時人肉を喰せしや否や明ならざれども殺害せられたるは事實にして、印度上古神話のラマヤナ（Ramayana）の如きも、印度人のシーロン征服を神話として傳ふるものなり。西曆紀元前二百五十年、印度無憂（アショカ）大王の統一大業成るや、シーロンに佛教を宣布の爲め皇族を派遣せり。此の以後は歷史も明了にして、文化も增進し古來の惡習も跡を絕つに至れり。

この鹹水沼の中、東海岸バッチカロア（Batticaloa）の鹹沼には水中に魚介類の妙音を出すものあり。ムーレイの旅行案內記（Murray's Hand book of India Burma and Ceylon p. 613）に依るに、靜夜月明に乘じ舟を湖上に放てば妙音水底より起る。その音はガラスの水鉢（フインガー・ボール）を濕れる指にて摩擦する音に等し。普通は高低二音なれども、サー・テンナントは幾多の音を聞けりと云ふ。土人はこの音は Cerithium palustre と名くる甲介尾（蝦又は螯に類するもの）の發するものなりと云ふも疑なき能はず。然れども長篙を取り沼中に深く捕しその頂端に耳を當つれば、音は一層强く且明瞭なり。是を以て知るに音響の源は土泥の中に在るは必せりと云へり。是れは有名なる奇觀にして、宜しく天然記念物として永く保存せざるべからず。この一帶は二十五浬（四十六キロ）に及べる長き湖沼なれば、果してその全部なるやバッチカロアの附近なるや明かならず。不肖は數〻シーロンに遊びしも是に至らず、從て聞かざるを以てその位置の廣狹につき斷言する能はず。

極北部ジャフナ（Jaffna）一帶の地形は全く平坦にして、陸地と云ふも沙洲に過ぎず。陸地と陸地の間に水沼溝渠あるも皆鹹水なり。甚しく淺く、舟を通ずる能はず。この沿岸は潮汐も大ならず、〇・九メートルより〇・六メートルに過ぎず。故に澪を存するは唯外方のみなり。デルフト島（Delft）は沿岸と離れバルク海峽中に在り。中に鹹湖を有する卑低の小島なり。然れ共この周圍はやゝ深水なり。南岸は概ね深水にして、淺水は西方にてはやゝ廣しと雖も南側は十浬に滿たず。ドンドラ角（Dondra）は最南端にして燈臺を有し、東洋、西歐往來の船舶の必ず通過する所なり。この岬角より東北方ハムバントタ（Hambantotta）附近に至る海岸はシーロン南岸に於ける乾燥地なるを以て、ハムバントタを中心として少しく製鹽をなせり。是れ雨を帶びたる南西風の限外に在るを以てなり。

シーロンは東西兩海岸を通じ唯一のトリンコマリを除けば港灣と目すべきもの皆無なり。コロンボは商港としては重要なれ共、天然の形狀よりせば殆ど港灣と目すべきものに非らず。唯防波堤により南西信風の巨濤を辛じて防止せるものなり。然れども對歐貿易よりせば西岸に港を要するは當然にして、往時はガル（Galle）を此目的に供せり。ガル港はドンドラ角の西二十二浬の地にして、小灣曲をなせり。港內は水淺く而も險礁頗る多く、深吃水の大船に適せざるにより是れを廢し、コロンボを修築せり。然れども今日猶多少の貿易品あり、港內も漸次修築せり。現在極南部（ドンドラ角の後方）より東海岸一帶は全く未開なるを以て貿易商品少しと雖も、將來はトリンコマリ、コロンボ兩港のみにては到底シーロン貿易を負擔する能はざるべし。トリンコマリ、コロンボ間はドンドラ角を繞り約三百浬

シーロン島圖



（水路部海圖 3137 號に依る）

なり。（北端は繞る能はず）少なくも中間に一港を要す。臺灣に於ても基隆、高雄間は二百三十浬なり。然れども今日臺灣の發達は兩港の負擔過重の爲、中間に新高港を修築せり。シーロンも將來大發展をなさば決して今日の臺灣の比に非らざるべく、その面積の二倍せるより斷ずるも過言に非らず。

トリンコマリ、コロンボの中間とせば一百五十浬の等距離にして、ヤラ（Yala）の地方なり。その點は北緯六度二十分、東經八十一度三十一分なり。此の附近は海岸より二浬の外方に小バス礁脈（Little Basses reef）あり、外洋より巨浪の來るを遮りやゝ靜穩なり。現在は淺水なれ共、浚渫と埋築と共に行ふは困難に非らず。海岸を距る一千メートル乃至一千五百メートルの外方は九メートル以上の深水なり。唯峽點は前面の海流の急なるにあり。ベンガル灣水路誌（一一二—一一三頁）によるに、小バス礁脈の燈船船長の報告を揭げ、十、十一、十二月の三箇月は南南西流向の海流四—五に達し、十二月は海流その最强期に達す。此月中はシーロン南東岸に沿ひ北航すること最困難なりと附記せり。而して一月は波濤高しと云へり。此の一帶は南西信風季は安穩なれ共、北東信風季に於て惡天候なるが如し。是の附近に修築する能はざれば寧ろドンドラ角の西側に築くを利とす。やゝ西方に偏するも此角は何船たりとも必ず通過するを以て、寄港の爲の迂回は全くなし。此點はコロンボもトリンコマリも皆ドンドラ角に及ばず。この角の西方は淺水の沙洲東西兩側より出で牛角狀に灣を抱き、中に東西二浬半、南北一浬の大灣を擁す。灣口は偏南風に暴露するを以て適當に緊縮せざるべからず。灣內外の水深は十乃至十一メートルにして極めて適度なり。決して重大なる工事に非らず。

マクラ（Matara）はこの灣の西北側にして、現在鐵道の終點なり。マタラは氣候必しも不良ならず、年中平均氣溫は華氏八十度（二十六・六五度）にして、降雨量七十インチ（一千七百七十八ミリ）、降雨日數一百七十四日にして、

コロンボに比するに氣温は同じと雖も降雨量は九インチ（二百二十八ミリ）を減じ、降雨日數は六日を減ぜり。故にコロンボに比するも寧ろ良好なり。將來の發展に對して、この兩所につき考慮をなさゞるべからず。

次に河川はマハヴェリ河（Mahauveli）なり。源を中央山脈に發し、殆ど中央山脈の三分二の水量を合し北行、トリンコマリ灣に至り海に入る。サー・トマス・ホルデッチ（印度、一九八頁）は、この流域の二百英里は曾てシーロンの穀倉と稱せられし地なりしが、今は全く荒廢し、病を藏する沼澤の藪となれり。河口より八十英里は十分舟楫を通ずべく、トリンコマリをして軍港に非ずして商港たらしめば、十分に利用し得るならんと云へり。此の流域は實に地味良好なる區域なれ共、アヌダラプラ（Anudharapura）及ポロナルワ（Po'onnaruwa）の兩王朝の覆滅と、西人の西南岸上陸により住民の移住となり全く荒廢し、土地の大部分は林藪に變じ、河の兩岸は不健康地に變ず。又人の顧るものなしと雖も、將來シーロンの開發は全くこの流域に在り。是を整理し昔時の隆盛に返らしめずばシーロンの富饒を期すべからず。先人既に能ふ、今人豈能はざるの理あらんや。

この大河の兩側にヨヂ・エラ（Yodi Ela）、マヅラオヤ（Maduraoya）の兩川あるも、同じく林藪荒廢の裡を流下するのみ。マナル灣に入るものは北より之を算せばアリヴェアル（Arivier）、カラオヤ（Kalaoya）、マハオヤ（Mahoya）、ケラニー（Kelani）の四川を最とす。就中ケラニーはコロンボの北側に至り海に入り、コロンボを知る人は皆之を見る濁流の河川なり。上のマハヴェリ河以外は舟楫の目的に適するものなし。南東海岸は流短く傾斜急にして之を記する要なし。中央山脈の西南側は極めて多雨帶なれば、この雨を受くる河は小流と雖も水量多し。然れ共ケラニー以外は殆どマハヴェリ大河に入るを以て顯著ならず。マハヴェリ大河は故に到處に堰堤を以て之を勒せば、一千七、八百メートルより二、三百メートルに至る約一千五百メートル皆水力發電に適せざるなし。臺灣中央山脈に比するに必しも劣等なりと云ふべからず。唯山岳地帶の面積臺灣に及ばざるを以て、總發電量は或は及ばざるべしと雖も、恐くは二百萬キロワットは十分に可能なりと信ぜらる。シーロンは燃料たる石油、石炭は絶對に無きを以て、電力を以て動熱の源泉となさゞるべからず。將來の開發計畫としてはマハヴェリ大河は殆どシーロンの生命線と云ふべし。

ヌーレリヤ（Nuwara Eliya）は不肖も遊びし地なり。南印度のウタカムンドに比するにやゝ劣れりと雖も一勝區たるを失はず。將來この附近を合し更に大規模の計畫を施さば十分にウタカムンドに比敵すべし。臺灣阿里山に比するに遙に規模は大なり。唯山は低くしてヌーレリヤの市街より六百五十メートルより高からず。故に之を望むも陪隰の感あり。此附近は濠洲より移栽せるアカシヤ屬のアカシヤ・メラノキシロン（Acacia melanoxylon）は最も好く繁盛せり。其他ユーカリプタス屬も良好なり。この南方にハクガラ（Hakugalla）の高山植物園あり。巧に崖側を利用し直綴せり。カンデー（Kandy）は近古の首府なり。その傍にペラデニヤ（Peradeniya）の大植物園あり。その集むる樹種は頗る多く、ジャバのバイテンゾルグ（Baitenzorg）に比敵せり。古蹟はアヌラダプラ（Anuradhapura）——アナラジャプラと一般は呼べり——を第一とす。この規模は實に雄大なり。北部の中原にあり。實に形勝の地なり。是に次ぐものはポロナラワ（Polonnaruwa）なれども規模は小なり。古蹟を記するは今の要に非ざれば之を省く。

ビルマ

第八はビルマなり。同じく上に記せども重要なる地域なるを以て再說す。ビルマの山脈は概ね之を第一に論ぜり、今平原を論ず。

特殊區域地形

第二章　地　形

平原はマンダレーを貫ける北緯二十二度を中心とし、その南北に下の平原あり。卽ち北に於ては東にイラワヂ、中にム（Mu）、西にチンドウヰン（Chindwin）の三平原あり。南には二平原にして、東はシッタン（Sittang）、西はイラワヂの大平原及大河口なり。イラワヂは北より來り、二十度の線に達すれば西行し更に南行す。故に北にては東にあり、南にては西側にあり。寧ろ直條を以て之を論ぜば平原の形はチンドウヰン、イラワヂを西側とし、イラワヂ、シッタンを東側となすべし。ム（Mu）はこの中間にあり。ビルマは北に廣く南に狹きを以てム河流域を北方に一箇添加せりと知るべし。鐵道は直條を欲するを以て東側線を本線とす。然れども西側のイラワヂ沿岸も附設せり。北部にてはイラワヂに沿はず中間のム河に倣ひ、最終點のミトキナ（Myitkina）――通常ミチナと稱す――に至り再びイラワヂに合す。故に鐵道本線はイラワヂをマンダレーの附近より架橋せるも之に沿はざるものと知るべし。

南部にてはイラワヂとシッタンの間にはペグ山脈（Pegu）あり之を遮斷するも北方に達せず。北方にてはム河とチンドウヰンの間に山脈あり。ム河とイラワヂの間は高丘あるのみ、山と目するに足らず。イラワヂの源流は兩川あり、ミチナの上流にて相會す。兩川とも相等しと雖も東源は水量大なり。チンドウヰンの上流はフカウン（Hukaum）――フコンと發音す、以下之を用ふ――の平原に發す。この平原の北は上に記せしアッサムとの唯一の交通路にして將來鐵道を通すべき鞍部なり。フコン平原は極めて低く、二百乃至二百五十メートルなり。之をアッサムに比するに約一百メートル高しと雖も、その形狀盆地をなし、爲に沮洳の處少からず。特に雨季に於て然り。將來排水工事を以てせば優良なる農場たらしむべきは必然なり。チンドウヰンはこの盆地の水を享け西南行して峽谷を破り流下せり。

ビルマの現在は南方に存すと雖も、將來は北方に存するは必然なり。而して北緯二十二度の線は正に此に正中し、附近を以て將來の中心と考へざるべからず。英國はラングーンを以て首府となせども、往昔はこの二十二度線の附近

ビルマ地形圖

及やゝ北方のシエボ（Shewebo）及南方イラワヂ流域のパガン（Pugan）を以てせし歴史あり。今日ビルマは獨立せんとす。ビルマ人果して何の地を以て首都と定むるや未だ知り難しと雖も、ラングーンの不適當なるは必然なりとす。

ビルマ平原の特徴はその高度の低きにあり、イラワヂ上流と云ふもフコン平原と云ふも皆三百メートル以下なるを以て暑熱は相當に強く、而して降雨も亦多く、植物繁茂の條件を具備せり。若し六百メートル以上の高原ならしめば印度のデッカンの如き狀態を見るべし。唯北緯二十度前後の地の寡雨帶を現出するも、附近は皆相當の降雨あるを以て甚しき害を生ずるに至らず、却て特殊の乾燥を欲する作物に適當せり。ビルマ北部の雨あるは二十二度以南のアラカン山の高度の低きにより、ベンガル灣を吹送せる雨雲を完全に捕捉する能はざるによる。是を以て中部より北部は却て雨多く、カチン（Kachin）一帶の高山は十分に是を捕捉す。故に地形はビルマをして雨に惠まし め、晴雨雨ながら良好なる氣候を出せり。

ビルマは現在は人口稀少なり。一千五百萬前後は決して多數と云ふべからず。特にその集中せる區域は河川流域而も南部にのみ多し。故に是を二倍し北部平原を充實せしむるに非ざればビルマとしては十分の繁盛を期すべからず。然れども農産は現在少人口の爲め却て豐富なり。米の如きは十分に國外に移出すべき餘裕を有せり。ビルマは農産以外に林産あり。林産は降雨區域一帶に各種の有用木材を産すと雖も、その第一に指を屈すべきはチーク（Tectona grandis）なり。チークは全ビルマ到處産せざるなしと雖も、中等位の降雨地域に最も多し。竹はビルマの特産なれ共これが利用としては未だ我邦及支那の如きに達せず。

シャン（Shan）と名くる地方あり。シッタン、イラワヂを繫ぐ線の東側、サルウヰン河を挾みメコン河に至る區域一帶を指せる通稱にして、特にその區域なるもの無し。人種も各種にして一樣ならず。文化は一般に低く、ビルマに及ばず。上に記せるが如く山川糾紛し概ね南北の縱谷をなすを以て、西方平原より之に達せんと欲せば幾多の山脈を超えざるべからず。加ふるにこの縱谷の左右にも亦葉脈を見るが如き山川あり。恐くはベルチスタンと相類する山川糾紛の地ならん。故に一川を異にする毎に各〻獨立し、支那も英國も如何ともすべからず概ね放任せり。然れども礦物の埋藏量は南アジア第一なるべし。特に金屬礦物を最とす。現在は交通極めて不便なるを以てこれが資源調査は十分ならず、その埋藏量も想像に止れども、他日精査せば驚くべき富源を見るべしと信ず。從來雲南地方は礦物に豐富なりと稱せらるゝも、往時は雲南とシャンの境界は曖昧にして、恐くは雲南の礦物と稱せしは大部分シャン地方なりしが如し。現にビルマ北部の翡翠玉の如きも從來は皆雲南産なりと信ぜられしが如し。

この一帶は氣候は中和せり。雨量も亦然り。高度は河川の流域を除かば皆一千メートル以上にして、最高は二千六百メートルに至れり。特にサルウヰン、メコンの兩河間を高しとす。北緯二十度線以南は東部は泰國の領域に入り地勢やゝ低平に赴き、遂にメナム河流域に下る。シャン地方には避暑地に適する地方少なからず。現在はマンダレーに近きメイミョウ（Maymyo）を以て之に充つ。この地は一千メートルに過ぎず、地狹小にして云ふに足らず。唯マンダレーに近接せるを以て利用せりと云ふに過ぎず。トウンギ（Taungi）、カラウ（Kalaw）の如き皆一千五百メートル以上の高度を有し適當なる地域なり。この二所は本線のクヂ（Thazi）より通ず。亦トウンギ（Taungi）より達するタンドウン（Thandaung）も適せり。高度は一千三百五十メートルなり。一般にビルマの避暑地は印度に比するに低し。若し高度の地を求めば北緯二十度線以北に至らざる可らず。マンダレーの北方ルビー寶石礦地方の如きは二千メートルの地隨處に存せり。ビルマ人は暑氣を恐れず、英人は北方に少なし、故に避暑地も印度、シーロンに比する

に著しく劣り且廣大ならず。

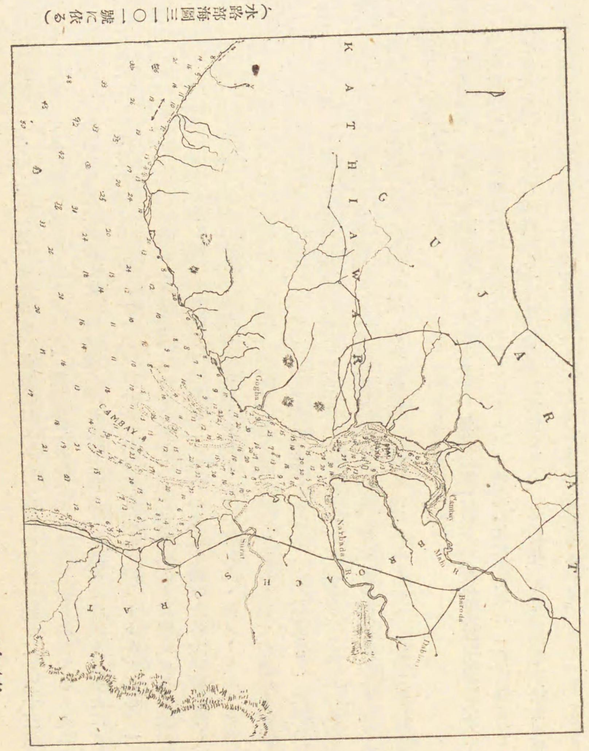
暴　漲　湍

第九は暴漲湍を記すべし。大潮昇に伴ひその地形により暴漲湍を生ず。支那浙江省の錢塘江下流は有名にして、支那古史を案ずるに秦始皇以前より之れが記事を見る。如此き大暴漲湍は世に稀れなるものにして、上海、杭州等よりは現今にても秋分の頃滿月後二、三日は實に壯觀を極め遊人輻輳せり。不肖も數〻これを見たり。印度に於ては支那錢塘江の如く大ならざるも是れに類する箇所三あり。一はカムベイ灣（Cambay）、二はガンヂス、プラマプトラ河口卽ちベンガル灣の北の盡頭、三はビルマのシッタン（Sittang）河口なり。暴漲湍に際會せば船舶は危險を免れ難し。今順次是を記すべし。

カムベイ灣の暴漲湍

カムベイ灣はボムベイの北にして、概ね北緯二十一度より二十二度に至る間に在り。一般に淺水にして、漏斗狀に南に廣く北に狹し。この形とこの水底が暴漲湍を生ずる主要なる原因なり。若し少しく屈曲せば決して是を生ぜざるなり。而してこの灣は二十二度を北に過ぐれば二分せられ、東支は北より東に、西支は直ちに北に向ひ陸地に沒す。故に最後の地點にて錢塘江の如く一路直ちに西を指すに比さば、分岐せるを以てやゝ勢を殺げり。大潮昇は暴潮當時は九メートルを超ゆ。若し地形にして錢塘江の如くならば更に大なる暴漲湍を生じ、カムベイ附近の舟楫を全く杜絶せしむるに至るべし。

（水路部海圖三一〇一號に依る）



カムベイ灣暴漲湍

特殊區域地形

今印度西岸水路誌（二八〇―二八一頁）を抄錄す。暴漲潮はカムベイ市邑の南西方約十二乃至十三浬の地に發生す。大潮の接近するに及びて暴漲潮の現象判然と現はれ、朔望後二日迄その高さ及速度を增加するも夫れより衰へ始む。新月近地點に合致し、滿月遠地點に合致したる時は最高潮を成すと謂ふ。暴漲潮は夜潮と晝潮とにより異り、九月と四月との間に於ては、夜潮は晝潮より六呎（一・八メートル）乃至八呎（二・四メートル）高し。一八三七年カムベイ市邑の西南五浬のカムベイ・クリーク（Cambay creek）に於て最高潮時に當りて發生せる暴漲潮は六呎（一・八メートル）の高さを以て、北に險崖、南に沙堆を有する幅約二・五鏈の水道を轟々たる大音響を發し、十節の速度にて進行するを觀測せり。夜潮の潮昇は前記の漲潮中の三時間を通じ三十一呎（九・四メートル）を示せり。暴漲潮は之を觀測せる前記の地點より上方に突進し、カムベイより三浬の處に至り一沙堆の爲その進路を變向し、その主流はカヴィ（Kavi）の上陸所に向ひ南東に轉じ、夫れよりマヒ河（Mahi）のデヴァン（Dehvan）に至るまで北東方に向進せり。前記と同一地上に於ける晝潮は潮昇僅かに二十三呎（七メートル）に過ぎず。又西方の暴漲潮はサバルマチ（Sabarmati）に向ひ上方に流進する暴漲潮にして東暴漲潮と同一なるも、唯高さ及流速に於て劣れるの差あるのみ。然りと雖も此等東西の兩暴漲潮は何れも諸水道、諸堆を變化せしむる傾向あるを以て、此地方航行は水路に精熟するに非されば企圖すべからずと言へり。

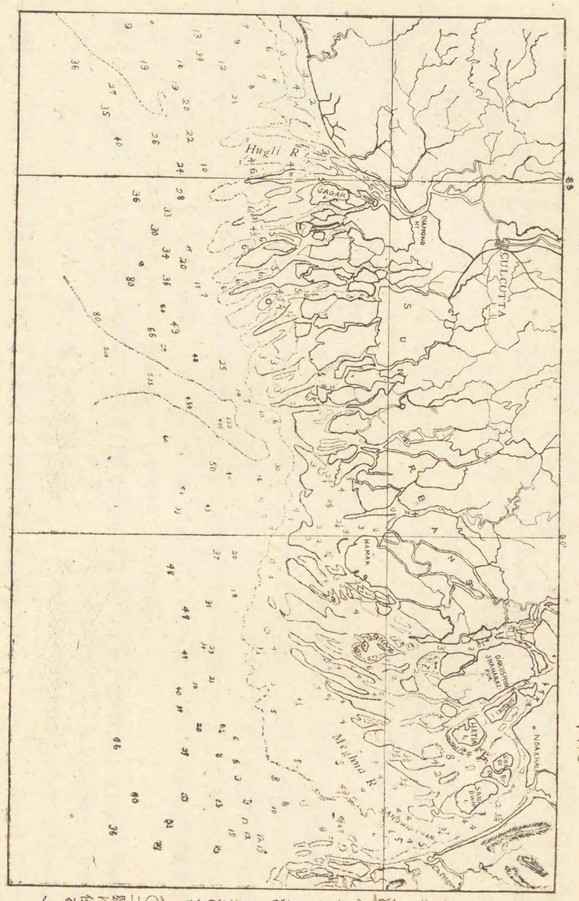
是の記事を以て見るに、大體は杭州錢塘江と大差なきも、最後の點に幾多の分支を有するを以てやゝ弱勢なるが如し。カムベイ灣附近は地味頗る豐沃に物產實に饒かにしてボムベイ附近の比に非らず。一般に淺水なりと雖も九メートル以上の水道は是を探るに決して難からず。然れども暴漲潮あると、是に類する强潮流等不快なる條件を具備し、且兩岸に是れにより沙堆を作り極めて航海を不便ならしむるにより、遂にカムベイ、スラット（Surat）等の往古より海港として存置せる歷史を堙沒せしめ、今日ボムベイをして名を成さしめしなり。

ベンガル灣の暴漲潮

玆はベンガル灣頭なり。この地域の暴漲潮は東西の二所あり。西方はカルカッタの海港に通ずるフグリ（Hooghly）河上に生ずるものにして極めて重大なり。東はメグナ（Meghna）河口に生ず。

先づフグリ河を記す。ベンガル灣水路誌（二五〇―二五二頁）によるに、フグリ河の上流に流入する潮流は障碍を受け大潮の高潮に於ては暴漲潮を生ず。之れが起因は河內の淺瀨處竝に急折せる曲路により漲潮流の進行を阻止するの結果なるもの、如し。フグリ暴漲潮は大潮の最高潮若くはその前後に於ける高潮に際してのみ發生し、其の出現は季節竝に太陰の視差に依り確實に豫知する事を得べし。北東信風季は夜間の高潮は晝間の高潮よりも高きを以て、暴漲潮は夜間に發生するものとす。南西信風季は表面皮流は灣內を北上する爲め海面を昂め、潮昇大に潮流强きを以て暴漲潮を起し、而も偏南風强吹して河水の放出を阻止する時は暴漲潮の高さを增加す。

暴漲潮は最初ダイヤモンド港（Diamond Harbor）――北緯二十二度十一分、東經八十八度十分――の下流、河の右岸なるダイヤモンド東沙堆に於て出現し、該處を泝上する波浪はウネリの破碎するが如き狀態を以て驀進し、フグリ角より上流の狹隘なる直路に達するまでは其勢大ならざるも、諸直路通過に當りては短艇を顚覆せしむるのみならず碇泊中の船舶を上流の方に壓す。偏南風の雄風（風力六）以上に達する時は殊に然りとす。此の暴漲潮はキダポル（Kidderpore）の上流二十六浬のチンスラ（Chinsura）に於て最大となり、その上流十四浬のナヤセライ（Nayaserai）を過ぐるに及んで消滅す。一八九六年三月三十日に起りたる暴漲潮はバヂ・バヂ（Badge Badge）及カルカッタに於



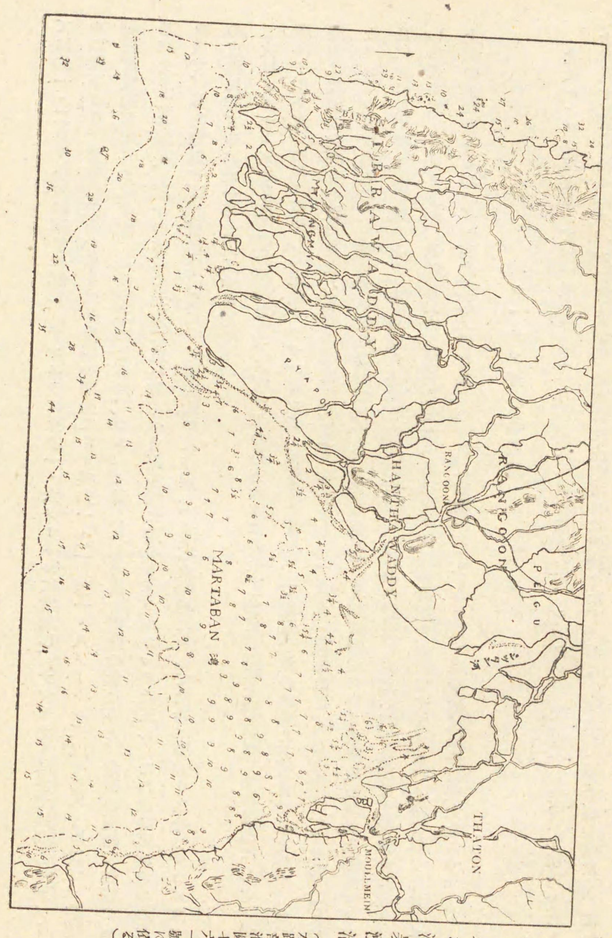
ベンガル灣頭　フグリ河及メグナ河口暴漲湍（水路部海圖二九〇二號に依る）

ては約一・二メートルの高さに達し、チンスラに至り一・六メートルに增加し、ナヤセライに於ては約〇・五メートルに低下せり。舳艫羈泊中の船舶は暴漲湍の通過に當り突如一・二乃至一・八メートル扛起せらるゝを以て、船體は縱動及橫動を起すと記せり。是の記事によるに、カムベイ灣と異り河川の彎曲の急なると、水面の極めて狹窄せらるるにより之を起し、同一の方向に北方に進み驚くべき遠距離に達せり。カルカッタは正しくこの危險區域の中心なるを以て、是を豫知せば港務部長汽艇に乘じ繫留船舶に注意し、深吃水船舶に對しては特に警戒をなせり。カルカッタの良港に非ざるは此一事を以てするも知るべし。

次はメグナ（Meghna）の暴漲湍なり。メグナ河の外方水道に發生する暴漲湍は大潮期四日間共强烈にして、其影響はイルサ河（Ilsa）の少しく上流ナラヤンガンジ（Narayanganj）、下流五十浬の地點に至るまで之を感ず。此の暴漲湍は波頂の突起せる波浪をなし猛烈の勢にて驀進す。サンドウヰプ水道（Sandwip）の暴漲湍はハチヤ島（Hatia）とサンドウヰプ島との間を突進する他の暴漲湍に會し、シデ（Sidi）北西端附近に於て危險なる渦卷を形成す。春分及秋分に於て殊に偏南風のときは暴漲湍の勢力その最頂に達し、波浪は壁狀に直立し波頂は碎けて泡沫を飛ばす。而して波高六・一メートル、進行速力十五節と推定せらる。メグナ河口附近の形狀はやゝカムベイ灣に類すれ共、その上流の狹窄せざる點フグリ河に近し。然れ共この附近は通商港に非ざるを以て學術研究以外に重大ならず。

シッタン河の暴漲湍

次はシッタン河なり。ビルマ海水路誌（一六九—一七〇頁）によるに、シッタン河（北緯十六度四十八分、東經九十六度五十五分）はマルタバン（Martaban）の灣首に注ぎ河口は鐘狀をなす。河口の諸水道に對する海圖なく、纔かに



シッタン河暴漲湍
（水路部海圖七六一號に依る）

地方貿易船の出入するのみ。大潮の際は暴漲湍起り、此の暴漲湍の後には三角波來襲す。此の三角波は暴漲湍と同樣に危險なりと謂ふと記せり。

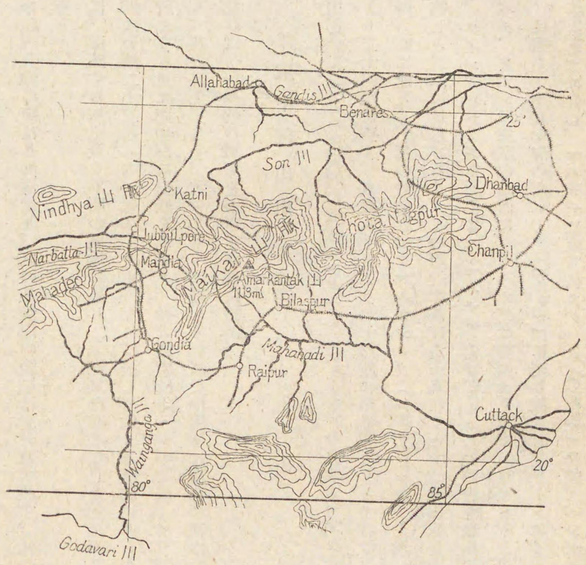
此の記事を以て見るに、海圖すら無く全く不明の區域に屬し、暴漲湍の存在は之を記述せるも上の二、三所の如く詳細ならず。然れ共附近は大潮二十二尺（六・七メートル）なれば決して低き暴漲湍に非らざるは疑を容れず。而もその地形は上の二、三所よりも更に適切なる形狀をなせり。殆ど錢塘江とその形を同くせり。水深も全く海圖に記せざれば明かならざれども、外方海上すら七、八メートルに過ぎざればその內部は極めて淺水なるは論を俟たず。この附近は我軍の占領區域なれば、科學的の調査を海軍水路部に請ふ。

印度中部山川

第十、印度中部の山川を記す。この代表的の地域はナグプル（Nagpur）の東北方マイカル山脈（Maikal）一帶とす。卽ち北緯二十一度より二十四度に至り、東經八十度より八十四度に至る間なりとす。

マイカル山は北東南西方面に連亙し、その最高峯はアマルカンタク（Amarkantak）と稱し、高度は一千一百十三メートルなり。決して高しと云ふに足らざるも、この附近に於ける主峯なりとす。此山脈を中心としナルバダ（Narbuda）、ソーン（Sone）、ワインガンガ（Wainganga）、マハナデ（Mahanadi）の四河を派出す。この四河の源流は集つて附近にあり。ナルバダ、ソーンは主峯の北面に、マハナデは南面より出で、ワインガンガ山脈の南西端にやゝ隔離せり。而してナルバダは遂くアラビヤ海のブローチ（Broach）に至り流入し、ソーンはガンジスに合し、ワインガンガはゴダヴァリ（Godavari）に合し、マハナデは直ちにカタック（Cuttak）を經てベンガル灣に入る。この附近は

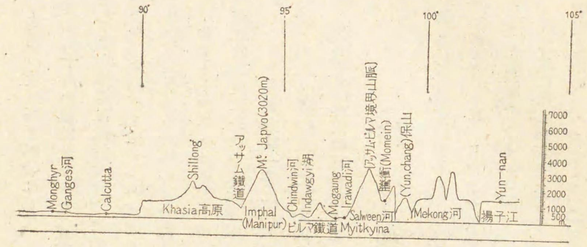
印度中部山川



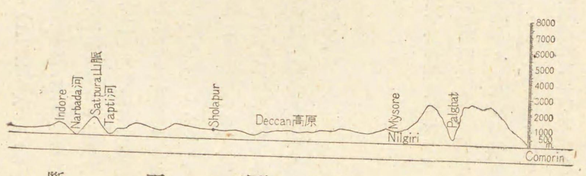
中部印度の高原の最も高き部分にして、ヴィンドヤ（Vindhya）、マハデオ（Mahadeo）等の山脈東西に連亙せるものと平行し、東經八十度の線に至り一たび其の高さを減じ平地となり、この低地をジュバルポル（Jubbulpore）、ゴンディア（Gondia）間の鐵道は通過せり。この東方は上に云ふマイカル山脈に起すべき臺地を生じ、山脈は一般に九百メートルに及べり。ナルバダはジュバルポルの上流二十二キロの邊に大理石の峽間（Marble rock）と云ふ奇勝あり、印度回遊の人の皆之を見る所にして奇觀なりとす。これより上流アマルカンタクに至るまで奇勝少なからず。下流も亦佳景なり。サー・トマス・ホルデッチ（印度、一五三頁）はサレベル・グリフィンの言を引き是の河流の絶勝を賞讃せり。この附近は印度に於ける森林地域にして、これより南部には十分探査を經ざる區域多し。この區域の東方は石炭層露出す。これより東方は一帶に高原にしてチョタナグプルに達す。現時は石炭を發見せしにより將來は開發を見ること疑なし。この山脈の東方には又別の鐵道線路南北に通じ東西線と連絡せり。現在の未開は將來の重工業地たるべく、山川の形勝も亦世人の耳目に入ること疑を容れず。

綜　觀

以上を概略して是を論ずるに、東經七十七度三十分の線をヒマラヤ（シムラの附近）よりコモリン角に至るまでの斷面を作り是を見るに、ヒマラヤの南側は急傾斜し平原に入り、再び上に記せるマハデオ山脈の邊にて臺地を作り、再びベラル（Berar）よりハイデラバッドに至るデッカン高原の北部を作り、ゴダヴァリ、キスタナの兩河の分水區域にやゝ高原狀をなし再びキスタナ流域に下り、この流域を南せば更に高原を作りマイソル一帶に及び、ニルギリ山塊にて峻拔を極め、パルガート（Palgart）の峽間を經て再びカルダモン山脈となりコモリン岬に盡く。



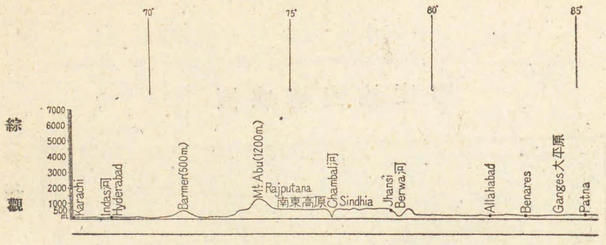
（横斷面圖）



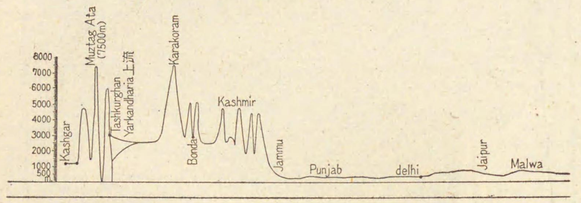
（斷面圖）

次ぐ北緯二十五度の線を取りて之を見るに、カラチの北より東行し沙漠を横斷しアラヴァリ山（Aravalli）より中央印度の高原北端を過ぎ、東經八十度の線より東は平原を貫通しアッサム、スルマ河流域を通じシルチャル（Silchar）よりマニプル（Manipur）の山間を過ぎ、東經九十五度の線にてビルマ、チンドウィン河流域にて再び平原に出づるも又分水嶺を經てイラワヂ流域に入り、更に高山を衝き騰越、永昌を經て雲南に入るを見る。

この兩圖を以てせば大體印度の地形は想像するに難からず。印度の地形は大體にその形は簡單なり。中部を高原とし、北部を平原とし、西部を沙漠とし、東部ビルマの境界及ビルマ一帶は相當糾紛せる地形をなせり。而して沿海地方は良港



（印度地形）



（同上縱斷面）

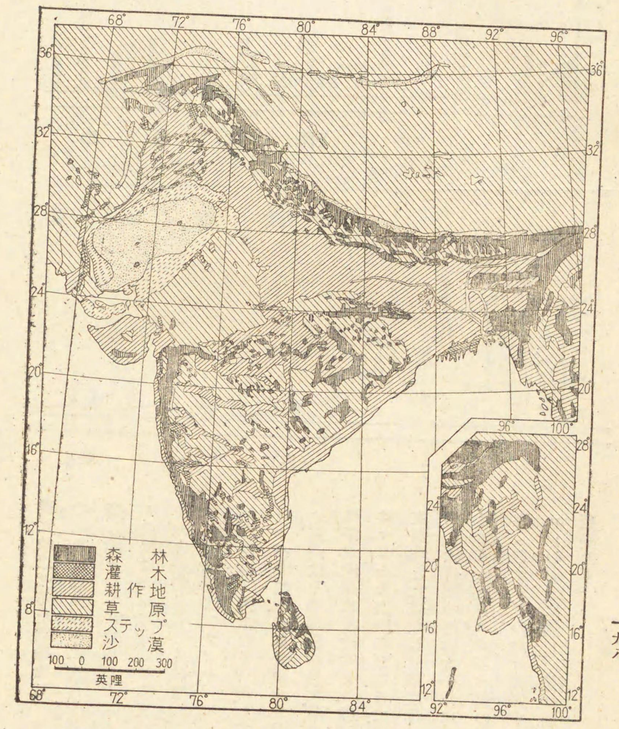
灣に缺乏せるを特徴とし、マラバル海岸の如きは屈曲多きに拘らず港内は泥沙壅塞し港となすに足らず。加ふるに西ガート山脈は海岸に近迫せるを以て背後に通ずべき通路を著しく缺き殆どその用をなさず。海深はアラビヤ、ベンガルの兩ながら極めて深水なり。決して南支那海、ジャバ海西部の如き淺水を見ず。シーロン周圍はその印度半島に對する海峽の外は深水海岸に接近せり。唯下ビルマ海灣はマラッカ海峽に至るまで淺水にして南支那海と大差なし。印度洋は深水なりと雖も我帝國の外方太平洋に於けるが如き深海溝を見ず。ジャバ海の東部のバンダ海（Banda）の如き深處すら半島及シーロンの附近に無し。是れ印度海陸地形の概要なり。

5000メートル以上の高山表

山名	高さ	山脈名	國名
Everest	8882	ヒマラヤ	ネパール
Godwin Austen	8620	カラコラム	印度
Kanchanjanga	8580	ヒマラヤ	ネパール
Dhaulagiri	8180	ヒマラヤ	ネパール
Nangaparbat	8120	カラコラム	印度
Morshiadi	8080	ヒマラヤ	ネパール
Barathor	7950	ヒマラヤ	ネパール
Masherbrum	7821	カラコラム	印度
Nanda Devi	7810	ヒマラヤ	印度
Rakapusha	7790	カラコラム	印度
Kangmen	7760	ヒマラヤ	印度
Tirats chmir	7750	ヒマラヤ	印度
Kulhakangri	7540	ヒマラヤ	ブータン
Teram Kangri	7464	カラコラム	印度
Haramosh	7397	カラコラム	印度
Chamalkari	7290	ヒマラヤ	ブータン
Gaurisankar	7150	ヒマラヤ	ネパール
Nun	7150	カラコラム	印度
Cholpanglik	7105	カラコラム	印度
Badrinath	6980	ヒマラヤ	印度
Api	6790	ヒマラヤ	ネパール
Depsang Sp	6703	カラコラム	印度
Chninomeril	6670	ヒマラヤ	印度
Gurdhar	6440	ヒマラヤ	印度
Sajum	6100	ヒマラヤ	印度
Haramuk	5150	ヒマラヤ	印度
Nuksan	5050	ヒマラヤ	印度

(STIELERS HAND-ATLAS に依る)

印度地表構成圖



第三章　物　産

總　觀

第三に物産を論ず。物産は印度は殆ど何物も産せざるなし。上古は悠遠なり知り難しと雖も、文獻を徵するも恐くは五千年來なるべし。その神話として傳ふる所も亦この以上に幾千年を經過せるならん。然れば幾千年を連算せば幾千億の人類は皆この半島に生死し住居し今日に到れり。この驚くべき多數の人類の外、無數の野獸飛禽皆今日に至るまで存在せり。物なくして焉ぞ如此き生物を容れんや。アッシリア、バビロン、エヂプト、ペルシャ皆印度とその古を同くせり。而して今日は概ね人烟稀少、野獸飛禽すら其類を少なくせり。唯印度と支那のみ幾千年來猶その繁榮を持續せるは由て來る所なからざるべからず。

印度は氣候を以てせば寒あり熱あり、乾あり濕あり、地にして卑低なるあり高峻なるあり、決してアッシリア、バビロン、エヂプト、ペルシャの如き單純なる氣候と地形をなさず。不肖先きに氣候を論じ、次ぎに地形を論ぜしは是れが爲なり。支那も亦然れりと雖も、その産物を以てせば、數量は印度と大差なきも種類は著しく減ぜり。是れ熱帶圈中に入る地域の狹小なるより生ぜり。之を農産に徵するに、米の如きは熱帶の特産なり、印度に生ずるは當然なりとなすも、麥の如きは寧ろ溫帶、亞寒帶の産物なり。然るにパンジャブの冬季は實に麥作に最良なる溫度を與ふ。支

那に於ては二毛作をなす能はざる地域その北西方面に多しと雖も印度は殆ど之を見ず。林木の如きは松柏は溫帶の産なりと雖も、西部ヒマラヤの産を以てすれば遠く支那の及ぶ所に非らず。良材森々として三千メートルの高山を覆へり。茶の如きは支那中部に野生せし特殊の香味飲料なり。然れども印度東部、アッサム、ビルマは別種の茶を産し、却て今日は支那を凌駕せり。蠶絲は支那山東省邊をその源流と傳ふるも、印度の野蠶は神話の時より人の被服となせり。現に神話に於ける大辯才天女の被服は青色の野蠶絲を以てせり。家畜は牛、羊、豚、馬、驢、駱駝皆産せざるなし。香藥の如きは支那は遙に下風に在りて比較するに足らず。描著「隨筆百則」に詳しく是を考證せり。林産中チークの如きは用材中の最上位なり。何物も是に比すべきものなし。然るに是を産するは印度東側、ビルマを第一となせり。其他サル（Sal, Shorea robusta）の如きは堅きに過ぐるの故を以てチークに及ばざるも、その用に適せしむれば却て上にあり。紫檀屬の堅材は殆ど獨歩せり。唯是と頡頏するは中央アメリカあるのみ。

穀類の農作物は陸棉の如き、甘蔗の如き皆印度を原産となせり。今日にては幾多の變種を出し、他地方に更に優良種を栽培せるも決して印度に不可能なるに非らず。甘蔗の如きはヒマラヤの山麓よりコモリン岬に達するまで皆栽培せらる。是の大量栽培によりジャバの印度輸出は全く杜塞し、ジャバ糖業に大打撃を與へ、再起を不可能ならしむ。熱帶及溫帶の作物は印度半島の南部、シーロン、ビルマ南部海岸に於ては殆ど行はれざるものなし。之に加ふるに果物の如きも溫熱、乾濕皆存して缺くる所なし。マンゴーの如きはボムベイよりグゼラット一帶夙にその名聲あり。シーロン亦ジャフナに良品を産す。葡萄の如きはアフガニスタン、ベルチスタン古よりその名顯はる。梨果はカシュミルに良品を産し、メロンはアフガニスタン及ペシャワル平原に良品多し。柑橘は印度を以て殆どその源生地と學者は斷定せり。ナグプル、スルマの柑柑及オレンヂ屬は決して臺灣、廣東を美まざるなり。如此く擧ぐれば地上産物として一の缺くる所なし。唯二千有餘年兵亂久しく連續して氣序和を失ひ人民流轉し、一進一退今日の如き程度に甘ぜざるべからず。

謹んで金光明最勝帝王經（阿滿得壽讖、一〇一―一〇三頁）を案ずるに、王は國土に存在する惡作を看過する時は極めて恐るべき奸詐を以て國土は害せらる。穀物、華果、種子正しく熟せず、米を看過する處には饑饉あり。國土に於て多くの有情（動物一般を指す）は病弱なり。國土に於ては甘味ある大なる果實は變じて甚しき苦味となるべし。穀類、果實の滋潤なる味は消亡し、かくして身根諸覺官は喜ばざるべしと。此文を見るに、大聖世尊は天帝教訓王論品の下に天帝の說として、印度諸王の惡行政を嚴戒せらる。然るに是れを知らざる暗愚なる君主、民衆は徒らに非法に行爲して興亡幾千年、この山河を此の現狀に留むるに至れり。將來は大東亞建設の重要因子として非法を止め正法に順へば、その隆盛は期して待つべし。

又同經（一〇六―一〇七頁）に曰く、吾等の王は正法を以て歎喜してその國土を治め、諸天帝は悅豫して諸人王を擁護す。諸星宿は正しく行き、日月も亦然り。風は節に應じて吹き、又時に順ひて雨ふる。王國に於て豐儉あり。王は正法を具足す。罪過を作るものは宜しきに應じて調御すべし。王は聞譽を得、安らけく諸民を守護すべしと說けり。是の文を案ずるも、大東亞共榮建設に協力せば、その結果は明了なること日月の如し。シーロンの如きは上代は非常に豐饒の地なり。然るに暗君怯卒外敵を禦々能はず、戰亂に繼ぐに戰亂を以てし遂に大半を荒廢せしめ、今日にては僅か五百三十萬の人口を養ふに足る米すら是を産する能はず、三六三四一八三英ボンドの價額の米を輸入せり。（一九四〇年世界年鑑による）これが半に過ぎざる臺灣にして殆ど同人口を養ひ、而もその産米の一半を本邦七千萬人の食糧に移出すると其差幾何ぞや。是れ全く我帝國の善政と、シーロンの禍亂の連續と政府の無關心に由れる惡結果なりと

す。人の最も急となすは食物なり。食物既に然り、況や他をや。

印度民衆は由來貧窮を以て世に聞ゆ。加ふるに天時宜しきを得ざれば旱魃必ず來り、人の餓死するもの頗る多し。是れ皆人爲の結果にして決して天然を以て論ずべからず。我帝國の如き、支那事變に對處しつゝ兩三年の減産せる食物を支へつゝ、而も大東亞戰の大戰果を贏ち得たる、日を同くして語るべからず。古に曰く苦政虎より甚し。又曰く惡法は無法に勝ると。印度の苦政無法は遂にこの天與の富源を減ずるに至れり。

農　産

米

次は主要農産物につきその大略を論ずべし。第一に米を記すべし。

米は印度の原産なり。印度幾千年皆米によりて生活す。卽ち印度は上古の神話によるに、太古天人の地上に降り遊び戲れ之を食し遂に地居し、後天産の乏しきを告ぐるや栽培をなし、黠者は他人の栽培物を奪ふを以て紛爭絶ゆる期なし。遂に聰明の人を撰び之が裁判を依囑し、この判決により惡人を懲す。是を名けて田主と稱すと云へり。田主は後來のクシャトレヤ（Ksatreya）にして、當時紛爭の渦中に隱遁し果實を食ひ生息せるものは後日の婆羅門（Brahman）にして、その仙人を學べる生活が他日の學者たるべき要素をなせり。而して田主の下に貿易をなす者をヴェイシャ（Vaisa）とし、耕牧にのみ從事する賤民をスドラ（Sudra）と稱すと云へり。是を以て見るに、神話の當時より

野生を栽培し各人の食に充てしは分明なり。

Oryza の種類は印度のみならず熱帶多濕の地は概ね野生せるが如しと雖も、アジア大陸を以て最とす。然れども人の用をなせるは O. Fativa のみにして他は學術上の參考となすに過ぎず。印度現在猶野生種を見る事を得。臺灣にても新竹州下には野生稻あり、天然記念物となせり。如此く現在にても幾多の野生種各地に存せるより之を見るに、上古は更に多數に存し、その中よりサチヴァ最も優良なるにより漸次是を栽培し今日に至れり。稻は熱を好み濕を好む。故に南東アジアはこの條件に適せり。熱と濕とは寧ろ濕を最とす。濕なくば枯る。麥と異れるは此點にあり。麥は冷を好み乾を好む。故に西アジアに多し。水中に生ぜるものすらなきに非ず。陸稻と云ふと雖も雨を得るに非ざれば生育せず、唯浸水を要とせざるのみなり。水稻栽培の農事上大障害をなせるは水を盛んならしめんが爲に地面を水平ならしめざるべからず。水平ならざれば水保たず。是を以て河川の下流の如き水平に近き地方にのみ最初發達せしなり。印度に於てもビハル、ベンガルを最大となせるは是れが重大なる理由なりとす。我邦の如くジャバの如く、地狹く人多ければ止むを得ず山脚崖畔も亦田となさざるべからずと雖も、印度の如き大平原に於ては如此き困難には未だ遭遇せざるが如し。

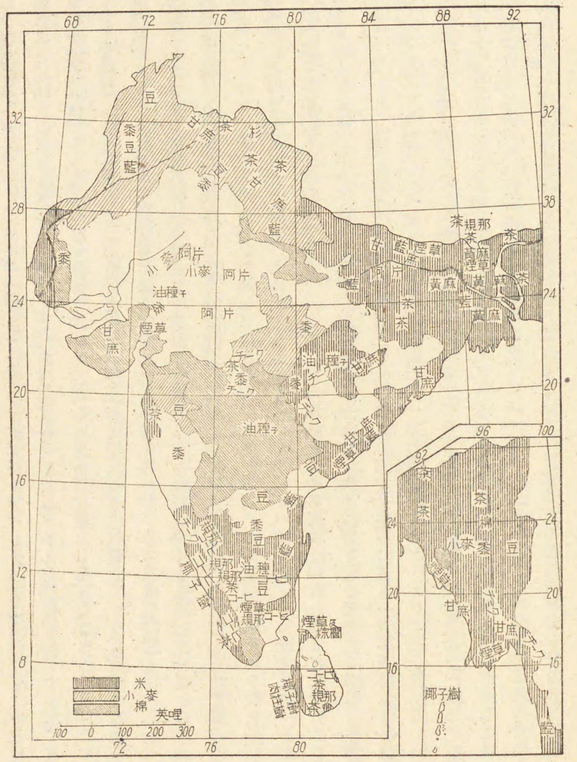
印度の古史を案ずるに、上古より幾多の品種を存せしが如し。大唐西域記には波理夜呾羅（Pāryātra）國の下に、宜穀稼豐富麥有異稻種六十日而收穫との文あり。又摩揭陀（Magadha）國の下に、地沃壤滋稼穡有異稻種其粒麁大香味殊越光色特甚彼俗謂之供大人米と云ふ。始の文は特殊の早稻なり。後の文は優良種なり。早稻はバーキル（マレイ物產誌、一五九七頁）によるに、三箇月にて成熟するものあり、又七箇月に及ぶものあり一樣ならず。然れども大收穫と大粒なるものは概ね長時日を要すと言へり。然れば西域記の後の文の如きは其粒麁大の字あり、確に長時日を要す

主要農作物生産高

作物	單位	一九二九—三〇年	一九三〇—三一年	一九三一—三二年	一九三二—三三年	一九三三—三四年	一九三四—三五年	一九三五—三六年	一九三六—三七年
米	千トン	三一、一三二	三二、一九八	三三、〇〇一	三一、一一四	三〇、九〇七	三〇、二三八	二八、二一一	三三、一九七
小麥	千トン	一〇、四六九	九、三〇六	九、〇二四	九、四五五	九、三七〇	九、七二九	九、四三四	九、八一八
珈琲	千ポンド	三九、四二四	三二、九七三	三二、六一四	三二、四九一	三四、六〇一	三二、七四四	四一、一七一	(不明)
茶	千ポンド	四三二、八四二	三九一、〇八一	三九四、〇八三	四三三、六六九	三八三、六七四	四〇〇、〇九五	三九四、四二九	三九五、一八〇
棉花	千梱(一梱は四百ポンド入)	五、二四三	五、二二六	四、〇〇七	四、六五七	五、一〇八	四、八五七	五、九一八	六、二六一
黄麻纖維	千梱(一梱は四百ポンド入)	一〇、三三五	一一、二〇五	五、五四二	七、〇七二	七、九八七	八、五〇〇	七、二一五	九、六一一
亞麻仁	千トン	三八〇	三七七	四一六	四〇六	三七六	四二〇	三八八	四一八
菜種菜及芥子菜	千トン	一、〇九五	九八八	一、〇二五	一、〇四二	九四三	九〇〇	九五七	九七六
胡麻(テイル)	千トン	四五五	五二六	四七六	五五一	五四一	四〇六	四六三	四八四
落花生	千トン	二、三七〇	二、七六八	二、二七六	三、〇〇七	三、三三〇	一、八八四	二、二五八	二、八〇八
蓖麻子種子	千トン	一一六	一二〇	一四六	一五一	一四三	一〇五	一二一	一二八
印度藍	千ハンドレツド・ウエイト	一四	一三	一〇	一一	七	一〇	七	七
甘蔗糖	千トン	二、七五二	三、二二八	三、九七五	四、六七六	四、八九六	五、一四〇	五、九九一	六、七二六
ゴム	千ポンド	二八、〇二三	二四、三五一	二〇、一一七	六、三八一	一二、九一五	三七、一五六	四八、五四五	六〇、〇六三

(註)本表數字には英領印度のみならず藩王國分をも含む
ゴムの生産高、一九三二—三三年に於て激減を示せるはゴム市場の一般的不振による
茶、黄麻纖維及ゴムの生産高統計は暦年による
一九三六—三七年度の數字は正確ならず修正の要あり

印度農産分布圖



るなるべし。現在のパトナ（Patna）及ガヤ（Gaya）は昔のマガダなり。パトナの米は現在印度に於ても優良種と稱せらる。供大人とは高貴の食用に充つるの謂にして、その品質の優良なるを示せり。香氣を有するにつきては、西域記の文は單に香味と云ひ、その香につきて特に文字を記さゞるにより知り難し。香米なるものは今日にてもあり。パ1キル（マレイ物産誌、一五九八頁）の云ふ所によれば、特殊の高價なる米は香氣を有するも歐洲人の嗜好に適せず。その香は鼠の臭氣あり。然れども土民は甚だ是を賞美し爲に高價を拂へり。その臭氣は貯藏久しきに及べば減退す。若し脫殼せば之をなさゞるに比し著しく減ぜり。然れども賣價はその臭氣の減退に影響さるゝ事なしと云へり。是を以て見るに鼠臭を帶ぶるが如し。我邦人も恐くは歐洲人と同じく是を好まざるべし。不肖も未だ實驗せざるを以て斷言を下す能はず。パトナの供大人米の香氣に關してはその文字の簡なる爲め如何なる香氣なるや斷じ難し。

米の栽培區域は全印度に及べりと雖も、上に記するが如くベンガル、ビハル等ガンジス流域を第一となすは勿論なるが、マドラス及その南部も亦重要產地なり。パンジャブの灌漑を施せる區域は相當の多量を產出せるも、元來パンジャブは麥作を主となせり。ビルマはイラワヂの三角洲を第一とし、生產消費を越え餘剩頗る多し。今英版の世界政治年鑑（一九四〇年版、一二六頁）によるに、一千九百三十六年度より三十七年度に至る一箇年間の作付反別は八四四二〇〇〇〇英反（三四一二七〇〇〇ヘクタール）、その產額三三一九七〇〇〇トンと記せり。三千三百萬トンは決して少數に非らざるも、三億五千萬人（この當時はこの人數なり）の口腹を充たすに於ては少量なりと云はざるべからず。一人〇・一トンに及ばず。一トンを假りに六石と概算せば一人當り六升に及ばず。我邦人消費に對して遙に下位にあり。故に是の數字は全印度の人口に自給自足する能はず、ビルマより大量を移入するに非されば之に充つべからず。印度もビルマも同一の管下なりとするも相當の遠距離なるを以て、將來は更に耕作面積に十分の努力を盡さゞるべからず。而してビルマの餘剩米は印度以外の他地方、寧ろ遠距離の地に輸出するを有利なりと信ず。

我邦の如き地狹小にして人口多き地は增產の事決して容易ならず。上に云ふが如く米田は絶對に水平ならざるべからず。從て是れが創始に當り土木工事を要するや大なり。加ふるに灌漑を十分ならしめざるべからず。故に增產を行はんとせば非常の資金を投ぜざるべからず。故に第一次の計畫としては品種の嚴撰と、農法の改良と、施肥の適正との三者を以てせば、恐くは一割乃至二割の增產は困難ならず。一割を增產せば三百三十二萬トンなり。二割を增產せば六百六十四萬トンなり。況や當時の三億五千萬は今日は三億九千萬に近からんとす。數年後には四億に達すべきは明かなれば、一人〇・一トンの比を以てするも、二割を增產して四千萬トンに達せしめずば食料問題解決に滿足なる結果を期待するを得ざるなり。

麥

次は麥なり。麥は西アジアを原產となせしが如し。印度に於ては上古は野生せしが如し。麥にも數種あり、一般に本邦にては大麥、小麥、裸麥、燕麥等の稱に分つ。印度にても歐洲にても最重要なるは大小兩麥なり。大麥は Hordeum Vulgare にして、小麥は Triticum Vulgare なり。印度の尺度に一指節を七宿麥となせり。（大唐西域記による）玄奘三藏は宿麥と譯せり。この作物は寒氣に堪へ、小麥に比するに栽培も容易なるを以て、上代は一層多く是を用ひしならん。梵語にては Yava と云ふ。大麥のみならず一切の穀物、穀粉を代表せる名となせり。ジャバも上古印度人の渡來せし時には之の島に Yavadvīpa の名を以てせり。是れ大麥の產地なる義に非すして、穀物を生產せる島嶼なるを云ふ。今日のジャバの音もこのヤヴァより轉訛せるものと信ぜらる。英

語にて oats の字を以て一切の穀物を表すが如し。然れども小麥に對しては別に Godhuma の梵名あり。然れば兩者共に上代より印度に存し重要食品たりしは疑ふべからず。

玄奘三藏の大唐西域記には土宜所出稻麥尤多と云へり。而して諸餅麪常所膳也。麪とは康熙字典によるに、本艸註を引き麪は卽糗以麥燕麨成屑と云ひ、急就篇顏師所註共に粉を餅となし食用せるは明なり。サー・ジョルヂ・ワット（印度有用物産誌、六四〇―六四一頁）の云ふ所によれば、大麥は一萬四千尺（四千五百メートル）に至るまで栽培せらる。而も特に施肥をなさず、灌漑をなさず、除艸も簡易なりと云へり。上古未だ簡にして勞少き時は大麥は小麥よりも重要なりしを以て、Yava の名を以て他の穀物を一括せる代表となせしならんか。今日にても單獨に或は小麥粉を混じてチャパテ（chapattis）を作れり。チャパテとは麥粉を作り餅狀となし之を燒き食用に供す。西域記の餅と云ふは恐くはこのチャパテを指せるならん。不肖も嘗に印度にて之を嗜食せり。或は糖蜜を附し、或は乳酪を塗り是を食す。味亦佳なり。故に麥は上代は大麥を主とし、中古より其味小麥に劣れるより漸次小麥を以てし、遂に風土の劣惡なるか寒氣の酷なる地方は依然大麥に非ざれば不可なれども、豐沃なる地方は小麥の作付反別を增加せるもの〻如し。而して大麥は主として山間の土人と貧民の食となる。上流人士は小麥に混用するか或は時々の便食にのみ供し、普通は小麥粉を用ふるに至れり。

作付反別は、政治年鑑（一二六頁）は大小兩麥を別たず一括せるを以てその區分知り難しと雖も、米に比するに著しく少なく、一九三六―三七年には三三二三七〇〇英反（一三四五〇〇〇ヘクタール）にして九八一八〇〇トンの產額を計上せり。耕地も米に比するにその半に至らず、產量は三分一に達せず。是を以て見るに、所要の數量は著しく減じ、我國民の米麥の消費料と相伯仲せるものと見るべし。耕作地は大體は聯合州卽ちガンジス上流地方を最多とし、パンジャブ是に次げり。ベンガルの如き澤國は多く是を產せず、卽て中央部の高原に多し。水を要せざるを以てなり。

高　粱

其他に粟の如き稗の如き米麥に繼ぐ作物なきに非らず。高粱の如きはその主要なり。高粱（Garghum Vulgare）は印度には大栽培をなせり。然れども貧民以外の者の常食に非らず。一般に粒の外藁稈を家畜飼料となすを以て、栽培は相當の大規模に行はる。不肖數年以前、印度高粱を臺灣に輸入し栽培試驗をなせしに、その結果は優良なり。粒は白色を上とし、紅皮之に次ぐ。印度の高粱は滿洲、北支よりは遙に上位にして、サー・ジョルヂ・ワット（印度有用物產誌、一〇三三頁）によるに、優良品種は乳白色にして眞珠狀の光澤を有すと云へり。滿洲、北支にても白高粱なきに非らず。北京の高官は白高粱の粥を往時は食用となせり。今日の紅皮高粱は蓋し貧民の食たるに過ぎざるなり。

如此く幾多の穀物は全印度に栽培せらるゝも米麥以外は重要ならず。この以外の食物としては唯豆菽あるのみ。

落　花　生

豆菽は印度にその種類頗る多し。その最重要なるを落花生とす。印度の落花生は支那に於ける大豆の如し。落花生は決して印度の土產に非らず。一般に信ぜらるゝ所によれば南アメリカの原產となせり。これが印度に入りたる徑路も亦明かならざれども、ポルトガル人の渡來によるならんとの說あり。その紀元と移入徑路は學者の研究に委し、今日にては印度に於ける重要なる豆菽なり。

是れが欲する土壌及氣候は第一は濕熱なり。第二は沙土なり。第三は乾燥なり。この三箇條件を具備せる地方は最適なりとし、印度に於てはマドラス中南部を第一とし、ボンベイ、デッカン高原の西部を主要とす。この以外は重要ならず。その本質よりせば熱帶植物なるは論を俟たず。而して豆莢地中に入り成熟するを以て、粗鬆なる土質にあらざればその形增大するに便ならず。加ふるに過濕の地は腐敗するを以て、殖土の如き堅緻にして保水量の高き地は決して適當なりと云ふべからず。唯短期間に成熟するを以て、支那山東省及關東州の如き短夏地方にても栽培し得らるれども、本來熱帶植物なるは疑を容れず。世界政治年鑑（一二六頁）によるに、七二七九〇〇〇英反（二九一三〇〇〇ヘクタール）、二八〇八〇〇〇トンを產出せり。その大部分はマドラス及ボムベイなるは上に記するが如し。

穀物及穀粉生產高（單位千トン）

	一九三五—三六年	一九三六—三七年	一九三七—三八年
白米	一八九	二三五	二二七
玄米	四四		
小麥粉	一三	二三五	一
小麥	四二	五〇	四六〇
豆類	六四	八〇	六二
大麥	四	一〇	八六
ジョワル及バジラ	九	七	三五
其他	二	三	四
計	三二七	六二一	八七八
價額（單位十萬留比）	三七四	六五七	九四九

玄奘三藏の西域記に各地の土產を記するに、菽の字を用ふ。菽とは大豆なり。印度にはこの土產なし。サー・ジョルヂ・ワット（印度有用物產誌、五六四頁）の云ふ所によれば、支那、交趾支那、日本、ジャバ等の土產にして、印度に輸入せられたるは近時なりと云ふ。是れによるに、菽の字を用ふと雖も他の豆類なるは疑を容れず。印度は豆科植物頗る多く、その食用に供せらるゝものも亦少からず。故に西域記の菽なる文字も亦狹義の解釋を下すは不可なり。

一般の豆類に普用せるものと信ずべし。豆科植物は綠肥を兼用するを以て是を他の作物と輪作するは古より知らる。食品はこの外猶記すべきもの多しと雖も煩を避け是を刪り、次に棉を記すべし。

棉

棉は印度上代より野生せるが如し。サー・ジョルヂ・ワット（印度有用物產誌、五七六頁）は vadara, karpasi, tundikeri, samudranta の四名を掲ぐ。別に木綿 Bombax maraharicum の文字に Tula なる文字を充つ。經中に數〻見る所の兜羅棉なる文字は之を指すものにして、艸棉に非らず。現在は殆ど各地に栽培せられ、就中ボムベイ、ベラル、シンド、チネヴェリ等最も有名なり。本邦に輸入せらるゝ棉花も印度より來れるもの少からず。然れども品質の點より是を見るに決して良好と云ふべからず。米國に劣り、遙にエヂプトに及ばず。蓋し改良種の普及未だ徹底せざるを以てなり。氣候風土より之を論ずるに、決して優等種を產する能はずと云ふべからず。中央印度よりグゼラットの如きは棉作地として絶好なり。シンドも亦灌漑を施せる地方は、ナイル中流に比し何等の遜色なし。マドラス南部の如きも海島棉に適せる良好區域なり。

不肖海島棉種を臺灣臺南の棉業試驗所に送り數年栽培せし結果は、原產地と甚しき逕庭なき良成績を得たり。是れが原產地は西半球西印度のカリビアン海の外方、大西洋に面せる地方なり。溫度は周年同一なり。然れば棉作の成熟期間に臺南地方の夏時を充つれば十分に成熟し得べし。南印度の南端は殆どその條件を具備し、雨量も過多ならず極めて適當なり。豈能はざるの理あらんや。エヂプト棉は同じく臺南に於て試驗せるも失敗せり。此の失敗せし原因は窒氣の濕度と降雨量の原產地に比し著しく增大せるを以てなり。而して乾燥寡雨の冬時を以てせば、溫度の不足より

良好の成績を得難し。是れ臺灣に於ては如何ともすべからずと雖も、シンド地方の灌漑區域ならば極度の乾燥と高溫は原産地に比し何等の相違を見ず。この兩地方に兩種の最良棉を栽培せば恐くは原産地を凌ぐも不可能に非らずと信ぜらる。その他一般の米棉と稱するは隨處皆可なり。

國別原棉輸出表（單位千梱（一梱は四百ポンド入り））

輸入國	一九三三—三四年	一九三四—三五年	一九三五—三六年	一九三六—三七年	一九三七—三八年
英本國	三四二	三四七	四五六	六二二	三九五
其他の英帝國領	三	六	一二	一九	二三
（英帝國合計）	三四五	三五三	四六八	六三六	四一八
日本	一、〇二二	二、〇五五	一、七五九	二、四二六	一、三六〇
伊太利	二六一	二七八	一五四	一六五	一五二
佛蘭西	一六三	一四八	一六五	一五五	九五
支那（香港等を除く）	三三七	一四二	一〇九	七二	六八
白耳義	一四五	一五三	二二八	三一二	一九七
西班牙	六一	六〇	六八	二六	—
獨逸	二四七	一五三	二六一	二一八	一六六
墺地利	—	—	—	—	一
其他の諸國	一五九	一四八	一八四	二五八	二七五
（諸外國合計）	二、三九五	三、一三七	二、九二八	三、六三二	二、三一四
輸出總計	二、七四〇	三、四九〇	三、三九六	四、二六八	二、七三二

東亞共榮圈内の住民は十億に近し。これが被服を供給するは實に懸りて印度の棉作に在り。支那は能はざるも、印度の如き、適地なしと云ふべからず。北支は現在に於ては最良の成績を擧ぐと雖も、決して是を以て四億の民衣を支ふるに足らず。印度も四億の人口を有せりとなすも、印度の栽培區域にして改良せば十分にその餘力を生ずる

州別清白棉産出高表（單位＝一梱は清白棉四百封度入り）

州別	一九三六—三七年 作付面積（單位千エーカー）	一九三六—三七年 清白棉産出高（單位千梱）	一九三七—三八年 作付面積（單位千エーカー）	一九三七—三八年 清白棉産出高（單位千梱）
ボムベイ	五、九九一	一、一二〇	六、〇二三	一、二〇八
中央州及ベラル	三、九五二	一八七五	四、〇四七	七一一
パンジャブ（×）	三、六九一	一、九二一	三、九八五	一、五一三
マドラス（×）	二、五一二	四九七	二、五五六	五〇五
聯合州（×）	七〇〇	一七五	五八一	一九七
シンド（×）	九八九	五二一	一、〇四九	三九四
ベンガル（×）	九四	二八	九四	三一
ビハル	三一	六	四三	八
アッサム	三六	一三	四五	二四
アジメル—メルワラ	三四	一二	三七	一五
西北邊境州	二一	四	二二	四
オリッサ	八	一	八	一
デリ	二	一	二	一
ハイデラバッド	三、〇八〇	四九九	三、五六三	五七〇
中央印度	一、四一四	二〇三	一、三三七	一四三
バロダ	八七一	一三七	九一四	一八六
グワリオール	七一四	一〇六	六六八	七八
ラジュプタナ	五三四	七三	五二四	六三
マイソル	八五	一二	八五	一一
計	二四、七五九	六、二〇四	二五、五八三	五、六六三

（註）州別欄×印は藩王國を含む

は必然なり。加ふるにビルマ中部は現在にては失敗の歴史のみなれ共、將來は必ず成功の期あるべし。現在の失敗は當事者の不熱心と指導者の無能力にして、決して天候の罪に非らず。シーロン北部も亦絶好の棉作地なり。如此く見來らば東亞共榮圈内の棉業は殆ど印度に於て是れが解決をなすべく、我帝國及フィリッピン群島、東印度諸島の如きは之を産するも可なり、産せざるも可なり。決して前途に危惧を懷くを要せざるなり。泰國の如き、安南、カンボヂアの如きは僅々一千五百萬前後の少人數なり、十分自國の生産にて事を辨ずべしと信ず。

木綿は上に云ふッラにして大木なり。Bombax malabaricum の果實な

れども用は壙料を第一とす。品種も Ceiba pentandra に比し劣れり。故に臺灣の如きはボムバックスを栽培せず、皆セイバを栽培せり。然れどもボムバックスの紅花は實に美麗なり。不肖往年ボムベイの北方サルセット島（Salsette）に遊び、この大樹に紅花の滿開せるの美觀を見たり。觀賞用となさばセイバに比し數段の上にあり。

艸棉栽培面積二五一四八〇〇〇英反（一〇二九〇〇〇ヘクタール）にして産額六二六一ベールなり。一ベールは四百英斤なれば一一一八〇〇〇トンなり。決して多量の産額と云ふべからざるなり。

黄　麻

次は黄麻なり。黄麻の産地はアッサム、東ベンガルにして、之を主としてブラマプトラ流域なり。是の植物は Corchoros capsularis と名く。この纖維は外皮にあり、强靱にして囊袋を作るには他の及ぶ所に非らず。故に地球全部にこれを供給し重要なる産物となせり。全世界はこの供給を印度より受くと雖も、他に代用品を自國に於て求めんとする念慮萬全然らざるなし。他の纖維は之れに勝れるあり之れより劣れるあるも皆、價格、數量、製造工程等種々の事情の爲、如何なる地方にても皆滿足なる結果を得ず。

我帝國に於ても是れが代用品は相當長年月に亙り研究せるも、結果は不成功の三字に盡く。唯米のみは稻藁より作る叺と名くる本邦特殊の袋を用ふるを以て黄麻に代用せるも、米より細粒ならば到底藁袋を以て代らしむべからず。又コプラの如き堅鰹粗大の品は藁袋の如き脆弱の物は外包破損してその用をなさず。是を以て滿洲の大豆も、臺灣の砂糖も、山東省の落花生も、南洋のコプラも皆ブラマプトラ河岸の黄麻に依存せり。臺灣にては黄麻を栽培せるにその結果は相當良好なりしも、臺南、高雄の猫額大の產地を以て全臺灣一百萬トンの砂糖を包裝せんとすれば、寸尺を以て丈室を暖むるが如し。

この植物は何故にブラマプトラ流域が世界に冠絶せるや。その由て來る所を討究せば、元來多量の養分を土壤より吸收せる植物なるを以て、一たび施肥を怠れば生長意の如くならず。況やその外皮の纖維の如きをや。故に多量の施肥を吝むべからず。多量の施肥をなさば、如此き低價を以て產出せる印度產と相爭ふ事能ふ所に非す。ブラマプトラ河岸は每年雨期に浸水し、その水秋季に去るや多量の肥料を土壤に殘せり。年々是れを吸收するも決して缺乏せず。ヒマラヤ山、アッサムの高原の削り去らるゝに非ざれば黄麻の肥料の竭くる期なし。加

月別黄麻生產高表（英領印度全州及ビルマの生產高）（單位千トン）

年度＼月別	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	一月	二月	三月	計
一九二三―二三年	七二、二	七四、九	七、七	六九、九	七七、一	五五、三	六八、五	七七、一	七七、九	七七、四	七三、三	八〇、一	九〇三、六
一九二三―二四年	六八、五	八四、七	七七、七	七四、五	八三、一	六八、三	七七、〇	七八、三	七七、二	七七、一	七三、五	七七、七	九〇六、〇
一九二四―二五年	七一、二	八六、一	五五、〇	八一、三	八三、二	七四、五	七九、五	八〇、六	七九、八	八四、〇	七七、四	九四九、八	九四九、八
一九二五―二六年	八四、四	八六、四	七八、三	九〇、七	八四、四	八三、八	八七、三	八〇、八	八六、〇	八五、九	八〇、三	八三、九	一、〇一一、九
一九二六―二七年	九六、三	九四、三	九九、八	一〇七、八	一〇六、七	一一七、七	九九、二	一〇四、七	一一七、六	一〇〇、〇	九九、五	一一七、九	一、三一〇、二
一九二七―二八年	八三、六	一〇一、一	一〇八、六	一一二、一	一一三、二	七八、二	八六、二	八九、〇	八六、〇	八五、九	八〇、三	八三、九	一、〇一一、九
一九二八―二九年	一一七、四	一一〇、七	一一四、二	一一八、〇	一一七、七	九九、二	一一四、七	一一七、六	一一〇、〇	九九、五	八〇、三	八三、九	一、〇一一、九
一九二九―三〇年	一一七、四	一一〇、七	一一四、二	一一八、〇	一一七、七	九九、二	一一四、七	一一七、六	一一〇、〇	九九、五	八〇、三	八三、九	一、〇一一、九

ふるに剝皮は全く人力による。東ベンガルの如き人烟稠密の地は此種の輕勞力は十分なり。天然、人爲の利を兩ながらブラマプトラ河の流域は是を享くるを以て、その一方のみの利か若くは雙方とも之を有せざるが如き地方は到底是と競爭を企つるも不成功の結論に到着すべし。

大東亞建設の上より之を見るに、黃麻袋の需用は恐くは戰前を超ゆるならん。昔日他に輸出せしものまで共榮圈内

月別黃麻輸出高表（英領印度全州及ビルマの輸出高）（單位千トン）

年度 / 月別	一九二九―三〇年	一九三〇―三一年	一九三一―三二年	一九三二―三三年	一九三三―三四年	一九三四―三五年	一九三五―三六年	一九三六―三七年	一九三七―三八年	一九三八―三九年
四月	五〇、五	四二、九	四五、五	二四、四	四一、〇	六〇三	四四、六	四九、六	七〇、九	九〇、二
五月	三五、七	四一、五	三八、〇	三〇、七	四六、六	五〇、八	四六、〇	五三、三	四六、四	四四、五
六月	三九、九	四〇、五	三一、七	一九、五	四〇、五	四三、〇	七九、七	五七、一	六二、八	四三、〇
七月	三五、七	三一、一	四三、八	三〇、四	五七、二	四三、〇	五六、二	五三、七	五三、九	四三、〇
八月	四一、八	二四、七	二三、七	二七、二	四八、一	四九、八	五八、〇	三〇、三	二三、四	四〇、九
九月	八八、五	三六、五	四〇、三	四八、四	五三、四	三八、二	三六、四	八六、四	三八、六	四〇、九
十月	一〇九、一	六六、一	六一、三	六二、二	六三、四	八六、四	九五、七	八三、三	六六、一	六六、九
十一月	一三六、八	七八、八	一〇三、一	六四、八	八三、三	一二、三	九九、三	八八、二	八六、三	六六、一
十二月	九二、二	八八、九	九四、一	八二、二	八六、三	九九、三	八六、三	九九、三	八六、三	八六、三
一月	七四、三	六八、九	四三、七	六二、九	六〇、三	七六、五	七〇、〇	八七、一	七〇、〇	七〇、〇
二月	五七、六	五〇、三	二一、六	五一、八	五一、九	五一、八	五一、八	四四、六	四二、〇	四二、〇
三月	四四、八	五一、四	二九、七	四八、六	四八、六	四八、六	四八、六	四八、六	四八、六	四八、六
計	八〇六、九	六九、六	五四、六	五三、一	七四、八	七二、四	七二、二	七一、三	六九、五	六九、五

黃麻價格表（四百封度入り一梱の價格）

		第一級品	淡色級品	赤ダカス）
一九三八年	三月	留比 三一・一二	留比 二九・一二	留比 三〇・〇四
〃	四月	三〇・〇七	二八・〇八	三一・〇〇
〃	五月	三一・〇〇	二九・〇〇	三〇・一二
〃	六月	二九・〇〇	二七・〇〇	二七・〇〇
〃	七月	三五・〇〇	三三・〇〇	三七・〇〇
〃	八月	三四・一四	三一・〇八	三六・〇四
〃	九月	三五・〇〇	三三・〇〇	三七・〇〇
〃	十月	三五・〇〇	三三・〇〇	三五・一二
〃	十一月	三五・〇〇	三三・〇四	三七・〇八
〃	十二月	三九・一三	三五・〇〇	四二・〇四
一九三九年	一月	四五・〇八	四二・〇八	四八・〇八
〃	二月	四七・一三	四四・〇八	五一・〇〇
〃	三月			

1トルに達せり。不肖往年此等の地方を冬季行歷せしに晩春下揚子江地方に見るが如き滿地黃金を敷くが如き大風土氣候の罪に非らず。油菜は支那下揚子江にては相當多し。本邦にても到處に栽培せらるゝも下揚子江の如く盛ならず。印度も園藝作物として栽培せるもの多きが如く、に消費せらるゝに至るべしと信ず。其他の纖維あるも是に比すれば重大ならず。黃麻の作付反別は二八八六〇〇〇英反（一一六七〇〇〇ヘクタール）にして產額九六二〇〇〇ベールなり。之を換算するに一七一四四六四トンとなる。盛なりと云ふべし。

油料植物

油菜

次に油料種子としては第一を油菜とす。印度にては油菜の種子に芥子を合し計上せり。用途は概ね同じ。これが產地はパンジャブより聯合州に及べる區域にして、冬季の乾燥せる地方なり。ヒマラヤ山脚にては雪なき地方は三千メ

パンジャブ地方は非灌漑地域に大部分を産す。

この作物は上の黄麻の如く甚しく肥料を要するものに非らざれども、決して乾燥地に無肥料を以て大收量を期待する能はず。下揚子江にても本邦にても秋季水稻を收穫せし以後に栽培するものにして、地表は常に相當の濕氣を保持せり。特に葉菜なれば窒素肥料を欲する事相當に多し。然るに是に反せる乾燥地に無肥料を以てす。その不可なるや理の當然なりとす。唯溫度は冷氣を要するを以て、マドラスの如き高溫地方に適せずと雖も、ボムベイ、北部グジャラット（Gujarat）及シンドは相當の產額を示せり。恐くは將來はアッサム極東北、ビルマの北部等の肯綮なる地域の冬季作物となさば、今日の如き貧弱なるものに非ざるべしと信ず。

一般に印度の農業は今日まで幾千年を經ると雖もその原始の狀を脫せるもの極めて稀なり。故に敢て一の油菜をのみ咎むるに當らずと雖も、如此き不可なる狀態を以てして猶大量の產額を出せるは實に面積の大なると、氣候の溫暖なると、降雨の多少等の天然的條件の爲にして、決して人爲の影響に非らず。我邦農業の如き目を以て印度を見るべからず。作付反別は五八一八〇〇〇英反（二三五四〇〇〇ヘクタール）、產額九七六二〇〇〇トンなり。（政治年鑑一二六頁による）

胡　麻

油菜に次げる油料種子は胡麻なり。胡麻は殆ど全印度に栽培せり。油菜よりは良好なる土壤に栽ゆ。此植物は溫度にして適當ならば到處栽培し得ると雖も極寒の地方を除く。油菜は氷點下に堪ふと雖も胡麻は之に堪へず。高溫は是に反し十分に堪へ得べし。故に低溫の時期と地方には油菜を以てし、高溫の地方と時期には胡麻を以てす。支那に於ても河南の夏時作物は胡麻なり。海南島も胡麻を產せり。

サー・ジョルヂ・ワット（印度有用物產誌、九八四頁）はムルタン（Multan）の縣誌を引用し、中等位の濕度を有する地方ならば輕き勞力にて栽培すべし。七月に栽ゑ十一月に收穫すと云へり。このムルタン地方は上の氣候の下に記せるが如く、七月は盛暑極にして寒暖計は五十度に近く、而も極度に乾燥せる時期なり。凡て灌漑せられたる地域の少許の濕度を有する地にては播種せられしが如く、播種期の高溫と成熟期の低溫を示せり。又サー・ウォルター・ローレンスの言を引き、カシュミルにては極めて普通なる作物にして、四月に播種し稻米の收穫の少しく後に收穫す。實に敏感なる作物にて寒風一過すれば害ありと云ふ。是れによるにカシュミル平原の平均溫度（夏期）は攝氏二十三度を指すを以て、此時山上より時に寒風の來吹するあらんか、多少の溫度の減却を見るは當然なり。恐くは二十度以下にては損害を被るならん。この作物は臺灣にても多く栽培せられ、不肖の住宅なる高雄道遙園にては常に栽培す。成績は常に良好なり。播種は五月にして收穫は九月とす。三十度以上の高溫は一千五百方ミリ以上の降雨に抵抗せり。蓋し灌漑さへ十分ならばムルタンの乾燥にも堪へ、全印度何れの地方にても不可ならず。油菜に比するにその適地は廣汎なりと知るべし。

油料作物としてはその搾油の味は殆どオレーブの壘を摩せり。東洋人の味覺は胡麻油を以て第一とす。邦人、支那人皆然り。恐くは植物油として印度人も是を第一となすべし。此點は遙に菜油の上にあり。作付反別五五七〇〇〇英反（二二五四〇〇〇ヘクタール）、收量四八四〇〇〇トンとす。

次は亞麻なり。同じく油料にして、纖維用は副産物となせるが如し。*Linum usitatissimum* は印度よりは寧ろメソポタミヤ等の西アジアの原産なるが如し。印度は移入作物なり。纖維も必しも不可ならざるも未だ十分と云ふべからず。纖維を欲せば花の開ける時に收穫す。油を欲せば子實の完熟を待たざるべからず。甲を欲せば乙を捨て、乙を欲せば甲を捨つ。纖維は最良なれども、これが收穫には相當栽培上困難あり。種子は容易なり。印度にして難を捨て易に就くは又當然なり。油料としては食用に非らざるも、植物油中乾燥油として第一なり。支那の桐油は之に次げる油料なるも、價格の點より桐油を用ふるも若し亞麻仁油にして低價ならば、恐くは桐油は支那內地を出づる能はざるべし。

亞麻は冬季作物なり。冷涼を欲す。故に北方平原、中央印度及デッカン高原に多く、マドラスに少なし。大體は油菜と同じく油は多く輸出用として栽培せられ、食用に非らざるにより、印度內地の需用は極大ならず。臺灣にても冬季作物として栽培せらる。その成績は良好なり。不肖の住宅高雄逍遙園は食用に非らざるを以て栽培せず。この作物は多少地味を瘠せしむる傾向あり。故に豐沃の地に非ずば施肥の必要あり。印度の作付反別は上の食用油料に比し減せり。二八八六〇〇〇英反（一一六八〇〇〇ヘクタール）、收量四一八〇〇〇トンとなせり。

蓖　麻

次は蓖麻なり。是の植物は印度の原産にして、Eranda と稱する梵名を有せり。その惡臭を以て王侯貴人の手にすべからざる物となせり。經中にも伊蘭陁の文字は是を見るも皆惡臭を代表せり。印度人は芳香を好める人種なるを以て、如此き惡臭作物は高貴の人は之を嫌忌せしならんか。この油は有毒なるを以て食料となす能はず。（醫藥には之を供す）。工業用としては上の亞麻仁油は乾燥油の代表となし、蓖麻子油は不乾油の代表なり。この二者は兩極端なるを以て各その用途を異にし、共に必要缺くべからざるものとす。

亞麻の冷涼を欲するに反し、蓖麻は高溫を欲す。然れども相當に低溫に耐ふる性あるを以て、滿洲熱河の如き興安南省の如き地方にても夏季作物として栽培せり。現時は臺灣總督府の奬勵作物なるを以て、高雄逍遙園に於ても栽培せり。冬季を通じ是を栽るも決して生育せざるに非らず、一月の寒季に十分結實せり。サー・ジョルヂ・ワット（印度有用物產誌、九一五頁）の云ふ所によれば、溫暖なる地方にては六千尺（一千八百メートル）に至るまで栽培せらると云ふ。

この葉にて飼育せらるゝ蠶あり、ユリ蠶と云ふ。現在我帝國にても奬勵せらる。下の絹絲の中に記すべし。この油の不乾性を利用し滑油として使用す。又相當の耐寒性あり、凍結せざる利を見る。故にこの特性を利すべき用途には不可缺なりとす。この工業用の外、印度にては燈火用ともなせるが如し。その光輝は石油より明かなりと傳へらる。醫藥用として、最も精製せるものを緩下劑として使用せり。これが搾粕は肥料としては大豆粕と伯仲す。却て大豆粕の窒素過多なるに比し配合要素は適當なり。

この植物は兩種あり。一は多年性にて木質なり。一は艸本にて一年性なり。溫帶の夏時作物としては一年性ならざるべからざるも、熱帶にては多年性も可ならずとせず。唯面積に比し多年性は却て一年性に比し著しくその收量を少くす。是れ枝間を空中に要するを以て密植する能はざるに由る。ジャバに於ては兩種あるも逐次一年性を植うるに至れり。而も多年性は子實大なれども油質不良にして、一年性は子實小なれども油質良好なり。印度にても漸次一年性を用ふ。

廣大なる葉と莖幹は全く無用なる物にして、是れが全量を地下より吸取するとなさば、その地力の減耗するは當然なり。故に施肥をなす。然らずば輪作、休閑等の方法を講ぜざれば著しく地力を減耗し、將來に大害を胎すに至る。葉を以て飼蠶をなさば繊にその一部を回復し得べく、莖幹はパルプに適せず、現在にては燃料以外に用途を知らず。この作物は到處是を栽ゆべしと雖も、その結果により特殊の地方を主とす。印度にてはマドラス最も多し。作付反別は一四〇五〇〇〇英反（五六四五〇〇ヘクタール）、收量一二八〇〇〇トンなり。

椰子

次に重要なる油料植物は椰子なり。椰子はシーロン島を第一とし、印度洋上の各島之に次ぎ、印度南岸及下ビルマ沿岸、アングマン島、ニコバル島之に次げり。印度內地には椰子屬の植物は少なからずと雖も Cocos nucifera は多からず、決してマライ半島の如き大栽培を見ず。この植物は海水を好み石花礁を好めるが如しと雖も、內陸にても十分發達せり。

此の油料となすべき部分は種實の外殼を除き、枝の內部に附着せる白肉にして、これを乾燥せるものをコプラと し、商品となせり。油料と云ふも、搾油後も溫度やゝ下降せば凝固し、他の油の如き物に非らず。直接食用としては最良と云ふべからず。本よりオレーブ油、胡麻、落花生と比すべからざるも、東印度及マライ一帶の住民は却て胡麻よりも是を賞美せり。我邦人はその臭氣を好まず。歐洲人はこの油を變質せしめ油脂としてマーガリンと名け、牛乳油脂の代用となせり。バターの代用としてはその味の劣れるは勿論なれども、直接に食用としてオレーブ、胡麻、落花生との差の如く大ならず。印度人は油料として之を用ひざるが如し。印度人は第一を牛乳油脂とし、他の植物油と共に椰子油も食品となせるが如し。

サー、ジョルヂ・ワット（印度有用物產誌、三五八頁）によるに、コチンに產する椰子を最良となすと云へり。コチ

州別油料植物栽培面積表（一九三六—三七年度）

（單位エーカー）

州別	亞麻仁	胡麻	菜種及芥子	落花生	ココナット	莚麻子	其他の油種子	計
アジメルーメルワラ	四六、五二九	三、一二五	五二七	一、一五一	一、九四〇	一、一五一	一、一五一	三、七四八
アッサム	六、五二九	一、九一〇	九、九八〇	一、一五一	二、九四〇	一、一五一	一、一五一	四、三〇、六四一
ベン・ガル	一八〇、六〇〇	一、八三、八〇〇	七四、一〇〇	二、七〇〇	四〇〇	一、一五一	九〇、一〇〇	一、一〇〇、五〇〇
ビハール	五五〇、三〇〇	一、五四、一〇〇	五三、一〇〇	一、一五一	三、七〇〇	一、一五一	三九、五〇〇	一、四五、八〇〇
ボムベイ	一三、八〇四	一三、四六三	二八、二八二	九八七、〇九六	四六、九八二	一、一五一	八〇、四八二	二、三八、九九三
ビルマ	二四	一、四四〇、六三三	五、八二	七九九、六〇〇	二七、九一二	一、一五一	八、五四八	二、三八、六九三
中央州及ベラル	一、一八三、〇一七	四六、四三三	七二、〇〇八	一四八、六二四	九、一〇四	一、一五一	三一、二一七	二、四四、三九三
クルグ	一	四一	一	一	三、一五一	一、一五一	一、一五一	四一
デリ	一	七	一	一	一	一、一五一	一、一五一	七
マドラス	一、五五九	八〇三、一四三	四〇、〇八二	五六四、六一三	二六三、八七〇	一、一五一	七二、二七一	一、三八、七二五
西北邊境州	一七	四〇、〇八二	四、四九五、〇一三	一、一五一	一、一五一	一、一五一	一、一五一	四、四九五、〇一三
パンジャブ	三、一四四	九九、九八八	九八一、四四六	一、一五一	一、一五一	一、一五一	一、一五一	一〇三、三五
聯合州	三〇八、〇一八	二九〇、八八五	二九四、八五五	一〇六、九四五	九、〇五四	一、一五一	二五、三〇一	一、三八、九六六
オリッサ	八、八〇四	三、〇三三	二六、六九六	一一、九三三	三五、三〇一	一、一五一	四、四二四	一、三五、〇三四
シンド	二	一、三五、〇三四	一、三五、〇三四	一〇	一三	一、一五一	四、四二四	一、三五、〇三四
計	二、三四二、三〇四	三、七二、八四〇	五、五二六、八八一	一、一八三、〇一七	六六四、五二七	一、一五一	二、九四〇	一、三八、九四一

ンは最南端にて而も西岸なり。然れ共マドラス、ボムベイ、ベンガル等の沿岸地方も栽培せざるに非らず。マイソル高原に於ては少量ながら栽培せらるゝも、パンジャブ、聯合州、中央印度等の內陸は是を缺けり。

椰子の用途はコプラとしての油料の外には、その外殻の纖維をコキア（Coir）と名け粗惡纖維を作り之を用ふ。これが用途も相當に多し。シーロン島及印度洋諸島は皆大量を生産せり。椰子屬の植物にして之に類するもの甚だ多しと雖も皆その用途を異にし、或は糖を作り、纖維を作るも油料となさず。唯 Elaeis guineensis のみは油料となすべきも現在にてはシーロンの植物園のみにして、印度全般にはマライ及東印度（主としてスマトラ諸島）の如く栽培は現在にては行はれず。此植物は西アフリカの産なり。

砂　糖

次に重要なる食品は砂糖なり。砂糖は印度の土産なり。上古より野生せり。釋迦種族もその先は甘蔗王種と名けらる。如此くヒマラヤの下部よりコモリン岬に至るまで到處栽培せられ、相當の大量生産と大量消費をなせり。是を史實に徵するに、玄奘三藏の大唐西域記によるに、至於乳酪膏蘇砂糖石蜜芥子油諸餅麨常所膳也と云ひ、又、葡萄甘蔗刹帝利飲也、沙門婆羅門飲葡萄甘蔗非酒醴之謂也と云へり。是文によるに唐時に於ては盛に食品となせるが如く、是より製せる飲料は清淨にして、高貴及出家等の不淨若くは醉亂に至るが如き事を忌む者の飲料にすら是を供せり。又栽培地に關しては濫波國北背雪山三垂黑嶺宜粳稻多甘蔗氣序漸溫微霜無雪とありて、濫波國はペシャワル平原の西部ジャララバッド（Jalalabad）一帶、カブル河（Kabul）流域の平原なるが如し。北西隅より甘蔗を栽培せりとなさば、殆ど全印度栽培せざる地方なしと云ふべし。

現時コイムバトル（Coimbatore）の糖業試驗所にては、短期間に生熟する甘蔗新種を製作するの外、耐寒性に富めるものを製作せり。印度に於てはこの耐寒種を新作するに非らざれば如何に優良種を製するも全印度に普及せしむるに至らず。極南の小區域とシーロン以外にはその用をなさず。故に試驗所に於ては、糖分は稍少なきも耐寒性と早熟性の二點に力を注ぎしは最も賢明なる處置なりとす。此の點は東印度とは全く異り、ジャバ、パスルワン試驗所（Pasuruan）の糖分最多と強健無病のみを目的とせるとはその趣を異にせり。岡田臺灣糖業試驗所長は不肖に語るに、印度コイムバトル試驗所の目的には頗る贊同し、臺灣にても若し支那大陸に蔗苗を送るとなさば此點に留意せざるべからずと云へり。北方にて作る甘蔗は紫莖のものなるべく、相當耐寒性あり。本邦にも往昔より瀨戶內海にて作り、支那にても浙江省にては栽培せり。故に耐寒性も決して困難ならず。唯耐寒性の甘蔗はその莖稈大ならず、從て面積よりすればその產額決して大ならず。故に栽培上より之を觀るに有利と目すべからざるが如し。是に莖稈を肥大ならしむると、早熟と、糖分增加の三者を以てせば、假りにジャバに及ばざるも印度としては大成功と云はざるべからず。

印度人は全般に甘味を欲する人種なり。我邦人の比に非らず。是れ上古より甘蔗を產出せるによる。是を以て往時ジャバより大量に輸入せし砂糖を防止せんが爲、全印度是れが栽培を奬勵し、コイムバトルの如き試驗所にて優良種を出せるにより一般に普及し、ジャバよりの輸入は殆どその跡を絕ち、纔かに凶作の時のみ是れが補給をなすに過ぎず。不肖も曾て印度に遊び、土人の家に就き飮食せしに、甘味の強き菓子類は殆ど不肖の耐へざる所なり。然れども印度人士は喜びて是を食へり。將來印度の產額は恐くは更に增大すべし。政治年鑑（一二六頁）は作付反別四四三五〇〇〇英反（一七九〇〇〇〇ヘクタール）、製品は六七二六〇〇〇トンと記せり。キューバ島の砂糖は現在米國及歐洲に

供給せるもの三百萬トン前後を上下せり。ジャバは往時全盛の時は是に近づけり。我臺灣も一百二十萬トンを産せし記錄あり。然れども六七二六〇〇〇トンと比さば實にその少額に驚かざるべからず。而も二年以前の一九三四―三五年には三四八一〇〇〇英反（一四〇九〇〇〇ヘクタール）に五一四〇〇〇〇トンに過ぎず。二箇年に面積約一百萬英反（四十萬ヘクタール）を增加し、收量にては一百六十萬トン弱を增加せり。

大東亞共榮圈內の糖業問題に留意せる人士は、消費の點よりも生産の點よりも印度を第一に念頭に置き考へざるべからず。ジャバ、フィリッピンに於けるが如き少量の産糖は別に重大なる影響を與ふるものに非らず。是を重大視して論を爲すが如きは蟻垤を大なりとし泰山を小となせるが如し。而して印度はこの大産額をなせるに拘らず猶二一三九九二八ルピーを一九三八―三九年に輸入せり。（政治年鑑、一三一頁）是を以て見るに猶若干量の不足は免れざるが如し。若しシーロンの需用を以てせば更に增加せん。シーロンは五五四一五七英ポンドの砂糖（蔗糖のみに非らず）を輸入せり。シーロンは十分高溫なるを以て、ジャバと同一の最優なる品種を栽培し得べく、その面積も東部一帶の乾燥地帶は皆最良の適地なり。臺灣にして既に一百萬トンを産出せり、シーロンの二百萬トンは當然なりとす。糖業の將來は生産も消費も決して毫厘の悲觀を要せざるなり。

最近は蔗稈の廢棄物よりパルプを製せり。岡出臺灣糖業試驗所長は不肖にこれが製品を示せり。最良と云ふべからざるも若干の良パルプを混入し得ば十分如何なる用途にも供すべし。これが汁液の廢物を以てアルコールを製作するは往時より之を行へり。印度にてはその統計を揭げざるも相當の大量に上れるは必然なり。別に甘蔗糖の外、これに類するものを椰子屬の花莖より生ずる汁液より製せり。これに供すべき植物は Corypha umbraculifera, Borassus flabellifera, Caryota coreus なり。此外最良なる産糖植物は Areya pinnata なれ共、印度にてはマライ、東印度の如く多く存在せず。故に之を論外に置くも不可なし。

上の三種皆汁液より糖を産すと雖も、印度人は糖を採取せず更に醱酵せしめ酒料として飲用せり。汁液は花莖を切りその滴下する所を壺中に貯ふるにより、之を久しく放置せば菌の爲め醱酵して酒に變ず。糖となすは直ちに煮詰めざるべからず。而して醱酵菌を死滅せしめ水分を去らば粗糖と成る。不肖はジャバに在りこの糖を好み愛用せり。その味は蔗糖に類するも所謂黑砂糖の味あり。印度は糖の外、甘味用としては蜜を用ふ。蜜は蜂蜜なり。石蜜と云ふは決して礦物を指すに非らず。その形凝固して石の如きを云ふ。印度は到處蜜蜂多く、巢を作り數十萬生息せり。

砂糖生産高（單位トン）

年度	工場數	甘蔗より製造する砂糖量	グルより精製する砂糖量	カンドサリ生産量	總計
一九二九―三〇年	二七	八九、七六八	二一、一五〇	二〇〇、〇〇〇	三一〇、九一八
一九三〇―三一年	二九	一一九、五八九	三一、七九一	二〇〇、〇〇〇	三五一、六五〇
一九三一―三二年	三二	一五八、五八一	六九、五三九	二五〇、〇〇〇	七七八、一一九
一九三二―三三年	五七	二四〇、一七七	八〇、一〇六	二七五、〇〇〇	六四五、二八三
一九三三―三四年	一二三	四五三、九六五	六一、〇九四	二〇〇、〇〇〇	七一五、〇五九
一九三四―三五年	一三〇	五七八、一一五	三〇、一〇三	一五〇、〇〇〇	七五七、二一八
一九三五―三六年	一三七	九三二、〇〇〇	五〇、〇六七	一二五、〇〇〇	一、一〇七、一六七
一九三六―三七年	一三七	一、一一一、四〇〇	一九、五〇〇	一〇〇、〇〇〇	一、二三〇、九〇〇
一九三七―三八年	一三六	九三〇、七〇〇	一六、五〇〇	一二五、〇〇〇	一、〇七二、二〇〇
一九三八―三九年	一四三	六八四、〇〇〇	一六、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	八〇〇、〇〇〇

（註）甘蔗作付面積は一九三六―三七年に四二三二〇〇〇エーカーに增加す
一九三六―三七年以後の數字にはビルマを含まず
一九三八―三九年度數字は概算にて揭ぐ
カンドサリ生産量數字は總て概算なり

茶

砂糖に關する以外の飲用として第一に茶を擧げざるべからず。茶は印度、シーロンの大産物なり。元來茶は支那の産物にして、歐洲人は十八世紀の末葉より東方航海の歸途に是れを携へ歸り、歐洲に貴品として飲用せらる。サー・ジォルヂ・ワット（印度有用物産誌、二一五頁）によるに、印度に於て是れが栽培をなせしは實に一千七百八十八年、ウオレン・ヘスチングの時にビハル、ベンガル北部等に栽培せるに起因せり。

年別茶生産高表

單位〔作付面積　千エーカー　生産高　百萬封度〕

年	作付面積	生産高	年	作付面積	生産高
一八八五—八九年平均	三一一	九一	一九二九年	七八八	四三三
一九〇〇—〇四年平均	五二五	二〇一	一九三〇年	八〇四	三九一
一九一〇年	五六四	二六三	一九三一年	八〇七	三九四
一九一五年	六三五	三七二	一九三二年	八〇九	四三四
一九二〇年	七〇四	三四五	一九三三年	八一八	三八四
一九二五年	七二八	三六四	一九三四年	八二六	三九九
一九二六年	七二九	三九三	一九三五年	八三二	三九四
一九二七年	七九六	三九一	一九三六年	八三四	三九五
一九二八年	七七六	四〇四			

アッサムに於て發見せしは一千八百二十一年より二十二年の間に、マニプル（Manipur）の發見せしを始なりとす。爾來支那種の將來栽培とアッサム種の栽培とにつきては種々の論議を重ねたるものゝ如し。今是れが歴史を論ずれば事煩なるを以て省略す。アッサム種は其土産なるを以て絶對に有利なる條件を有せるは必然なり。然れども恐くは人の嗜好は必しも栽培の適否と一致するものに非らず。アッサム種と支那種の相違は相當の間隔あるを以て、最初支那茶に慣れたる口舌は恐くはアッサム種を喜ばざりしならん。然れ共これに混ずるに牛乳を以てし砂糖を以てせば、支那種の淡泊は却てその本質の味を減却するに至るべく、アッサムの濃厚なるは乳と糖とに十分抵抗してその特有の香味を殘せり。是を以て、是れに徐々慣れたる口舌は支那種よりアッサム種に移動しつゝあり。印度のみならず我邦人も、紅茶と云はゞ最初リプトン茶を飲用し乳と糖を用ひし爲、今日リプトンの輸入杜絶するや是れに代れる臺灣茶にすら乳と糖とを混ぜり。而して乳の配給なく糖も不十分なるより最近は純一の紅茶を飲用せるも、その餘情をリプトンに寄するが如し。臺灣茶は支那茶にして、その製法のみアッサム茶に類するもその味は全く別なり。臺灣アッサムはアッサム土産に比するにやゝ弱しと雖も、乳と糖を混ぜざれば依然アッサムの香味あり。如此く嗜好は容易に變ずべからず。

アッサムの漸次全世界に普及せしは全く英人努力の賜なり。加ふるにその栽培の容易と收量の增加は、十分に支那茶を世界の市場より驅逐するに足る。露西亞人は好んで茶を飲む人種なり。往昔は全く支那茶なりしが、最近は著しくアッサム進出せり。アッサムの敵はシーロンなり。シーロンは珈琲に大病害を蒙り再起する能はざるや全く是れを

地方別茶生産高表（一九三六年分）

單位〔作付面積　千エーカー　生産高　千封度〕

地方	作付面積	生産高	一日平均勞働力（永久的、一時的）
アッサム	四三九	二二三、三二五	五〇五、八三七
ベンガル	二〇三	九九、四二〇	二〇三、三九八
マドラス	七八	三二、六七六	六五、一八九
クルグ	×	一八八	三五〇
パンジャブ	一〇	二、三八八	一〇、六五八
聯合州	六	一、八二四	三、七六九
ビハル	四	一、一二五	二、五二一
（英領印度合計）	七四〇	三六〇、九四六	七九、七二二
印度藩王國	九四	三四、二三四	八一、八二二
總計	八三四	三九五、一八〇	八七五、五四四

（註）×印は五百エーカー以下

捨て、アッサム茶を栽培し大成功を收めたり。現在にてはこの兩所の外、ジャバ、スマトラ亦アッサム種を栽培し同じく成功せり。現在は同一のアッサム種にして三所は全く競爭し、團扇の何れに揚るを知らず。アッサム種は溫度と相當濕度あらば栽培は容易なり。臺灣の如きも極めて最近の栽培なるも其結果は良好なり。

アッサム、シーロンの外シッキムにも栽培せり。量は大ならずと雖もダージリン（Darjiling）の高地は香味極めて良好なり。一般に熱帶に於ては一千五百メートル以上の高地は茶味良好なるを以て稱せらる。ジャバに於てもマラバ

茶輸出高

單位〔輸出高　百萬封度
　　價格　十萬留比

年度	輸出高	價格
一九二六—二七年	三四九	二九、〇四
一九二七—二八年	三六二	三二、四八
一九二八—二九年	三六〇	二六、六〇
一九二九—三〇年	三七七	二六、〇〇一
一九三〇—三一年	三五六	二三、五六
一九三一—三二年	三四一	一九、四四
一九三二—三三年	三七九	一七、一五
一九三三—三四年	三一八	一九、八五
一九三四—三五年	三二五	二〇、一三
一九三五—三六年	三一三	一九、八二
一九三六—三七年	三〇二	二〇、〇四

輸出先

	一九二六—二七年百分比	一九三六—三七年百分比
英本國	八三・〇	八四・九
歐洲諸國	一〇・〇	一・六
亞細亞	五・八	五・一
亞米利加	五・七	七・六
濠洲	一・六	〇・四
阿弗利加	一・九	〇・四
	一〇〇・〇	一〇〇・〇

印度茶價格表

年	平均競賣價格 封度當り價格 指數	年	平均競賣價格 封度當り價格 指數
自一九〇一—〇二年 至一九一〇—一一年	六・〇（アンナ・パイ） 一〇〇	一九三三—三四年	九・七（△） 一六〇（△） 四・一〇（▲） 八一（▲）
一九一七—一八年	一四・一〇 二四七	一九三四—三五年	九・〇（△） 一四八（△） 五・二（▲） 八六（▲）
一九一八—一九年	一一・四 一八九	一九三五—三六年	九・四（△） 一五七（△） 五・〇（▲） 八一（▲）
一九二八—三〇年	九・一一 一六五	一九三六—三七年	一〇・七（△） 一六八（△） 四・八（▲） 七八（▲）
一九三〇—三一年	九・四 一五六		
一九三一—三二年	六・五 一〇七		
一九三二—三三年	五・二 八六		

（註）△印は輸出檢査所經由の茶の價格及指數にして、▲印は國內消費向け茶の價格及指數なり

も栽培せりと雖も、その量を以てせばアッサム、シーロンに遠く及ばず。

アッサムは主としてスルマ河の上流一帶なりとす。是に加ふるに東北隅の山地を加ふ。元來野生せる區域はマニプルなるを以て、アッサムの內マニプルに接近せる區域に繁盛なるは理の當然なりとす。元來茶は雨量多きを厭はず、五千ミリ以上の雨量あるもその生育を妨げず。是を以て見れば、アラカン山脈の如きも、西ガート西面の如きも皆絕好の產地なり。然れども茶の生產量は現在にてはやゝ飽和せり。この以上の產出を必要とするや否や疑問なり。強て增產をなさしむるの必要なし。若し必要あらば四年の時日を費さば十分成功すべし。

茶園に於て必要なる要素は勞働力なり。この勞働力は必しも強力を要せず、婦女子にて可なり。最近本邦靜岡縣、

ル高原（Malabar）の一千五百メートル以上の地に非らざれば最良の茶を產せず。中部ヒマラヤ、クマオン（Kumaon）、カングラ（Kangra）、南部のニルギリ（Nilgiri）、トラヴァンコール（Travancore）

鹿兒島縣にては刈除に器械力を用ふ。然れども新に茶園を起すに非ざればこの方法を取る能はず。茶樹の頂邊を人間の頭顱の如き圓形か、若くは水平ならしめざれば鋏を以て新芽を剪取る能はず。故に舊茶園に直ちに用ふべからず。強て用ふとせば臺刈をなし、一兩年休閑せしめざるべからず。アッサム、スマトラの如きも勞働力の不足に常に困難せるはこの理由による。印度の生產量は一八〇〇〇〇〇〇〇〇キログラムにして、シーロンは一〇七二七二七二キログラムなり。是を合せば二八七〇〇〇トンなり。

珈　琲

次に珈琲は往年シーロンに盛に栽培せしが、Hemileia vastatrix と稱する菌の爲め全滅し、是れに代り茶を栽培し今日の隆盛をなせり。然れ共これ珈琲栽培地を擇ぶに適當ならざりし爲にして、この菌の發生と傳播は危險なりと云ふも、その氣候狀態により必至の運命にありとは信ずべからず。臺灣にてもこの菌は發生せり。不肖は常に當局者に警告せり。當局者も防止に努力せり。幸ひに大害に及ぶに至らず。

シーロン、ジャバは大害あるも臺灣に大害なきは全く氣候による。何故にや珈琲を多雨の地に最初栽培せり。シーロンも然り、ジャバも然り。ヘメリア菌はこの多雨濕潤の地にては猛威を揮ふ。ジャバはコンゴーのロブスタ種を栽ゑ今日の隆盛をなせり。シーロンは一蹶振はず。蓋しアラビカ種はその原生地は紅海の兩側にあり。エチオピアの山地は降雨多しと雖も、アラビヤ側は極めて寡雨なり。故にアラビカ種は決して多雨の地を欲せず。中等位の降雨あるはその生長を助くと雖も、過濕と高溫は必しも適當ならず。臺灣の如きはアラビカ種に適せり。降雨多しと雖も一定時の乾燥期あり、又多少寒熱の差あり。赤道の下、過濕溫熱の地に栽培せるを以てヘメリア菌の發生を增長せるもの

にして、ブラジルの如きはアラビカ種の變種なるも、この菌の爲め大損害を蒙れるを聞かず。その主要產地は南緯二十二度線にして相當の寒氣あり、而も原產地よりも適當にして、世界第一の豐產をなせる適地なり。勿論寒氣もその度を過ぎ氷點下に數日を過すが如きは不可にして、特に嚴霜を忌む。乾燥地ならばやゝ高溫なるも不可なし。アラビアの原產地は北緯十二度にして夏時は酷熱なり。然れども乾燥せり。

現在印度にてはその栽培地適當ならず、往昔の誤謬を踏襲し多雨の地に栽培せるを以てその效果は良好ならず。將來の栽培地としてはベンガル灣の西側の高地一千メートルより北緯二十二度の邊にて零メートルに至る區域と、極南にて二千ミリ以下の雨量地と一千五百メートルより五百メートルの間を撰ばゝ可なり。ビルマにてはペグ山脈の如き適地なるべく、北緯二十二度以南のシャン地方にては北は一千メートル、南は一千五百メートルの地にて同じく雨量一千五百ミリの地ならば必ず成功すべし。シーロンの如きは東南面、東面の一千メートルの地を撰び之を栽ゑ、若しアラビカ種を危險なりとなさばロブスタ種を用ひて可なり。焉ぞ褒に懲りて膾を吹くの愚を學ばんや。リベリカ種は强健なれども香味は劣れり。其他の各種は良好なるものなきに非らずと雖も試驗栽培の範圍を出でず。

珈琲輸出竝國內消費高（單位＝千ハンドレット・ウェイト）

年（六月三十日基準十二箇月）	生產高	輸出高	國內消費に充て得る餘剩
一九二七年	三〇六、一	二四一、三	六四、八
一九二八年	三一七、五	二六一、五	五五、〇
一九二九年	二四七、九	一三八、三	一〇九、六
一九三〇年	三五三、〇	二七九、四	七三、六
一九三一年	二九四、四	二〇八、四	八六、〇
一九三二年	三〇〇、一	一六三、〇	一三八、一
一九三三年	二九五、〇	一六八、七	一二六、三
一九三四年	三〇八、八	一八六、六	一三一、二
一九三五年	二九二、八	一四七、五	一四五、一
一九三六年	三六七、六	三一〇、〇	一三七、六
一九三七年	三〇三、六	一七二、四	一三〇、二

蓋し大東亞共榮圈内の住民は徐々と珈琲の嗜好を增加しつゝあり。本邦人の如きは兩三年來珈琲の輸入杜絶するや臺灣産のみにては國内需用を充すに足らず、大豆及その他の子實を炒焙しその粉末を飲用せり。支那に於ても上海、南京、北京、廣東等大都市は徐々たりとも年々需用を增加せり。南方民族はその土産なるを以て一般に需用少なからず。何故にやイスラム教徒は一般に愛用せり。是れその宗教の發生とアラビカ珈琲の産地と一致せるより來れる慣習なり。他のアルコール飲料と異り醉面を伴はざるを以て、宗教上の禁制を素らざるを以てその傳播力は將來に迅速なるべしと信ず。故に大東亞共榮圈に於て是れが栽培は增進せしむる必要あり。就中印度の如きは、その原産地アラビヤに類する氣候もコンゴーに類する氣候も各〻撰ぶ所に任かし可能なれば將來の增進を期して待つべく、又ブラジルに依存するの必要を認めざるなり。最良の珈琲は茶の如く高山を主となす如し。

カカオ

次はカカオなり。この植物は大東亞共榮圈に於ては少量なり。唯シーロン及ジャバあるのみ。然れ共必しも栽培困難ならず。印度にては現在は極めて少量なり。サー・ジョルヂ・ワット（印度有用物産誌、一〇七六―七七頁）は少しく之を記し、マラバル、ニルギリに少許を産し、シーロンも重要ならざるが栽培せしを記す。然れ共サー・ジョルヂ・ワットの當時より今日に至りてはシーロンは長足の進歩をなせり。

これが栽培條件は珈琲と茶の中間雨量を要し、溫度は高溫を必要とす。而も絶對條件は無風なり。風力强ければ結實せず、樹勢も亦弱し。これが原産地は南米オリノコ河（Orinoco）流域にして北緯八度の地なり。是れを栽培し良好の結果を生ぜるは中央アメリカ及カリビアン海諸島なり。ジャバは南緯七度の邊にては原産地を凌駕すべき優良品種を出せるもその生産量は少なし。然れ共チョコレートの需用は文化の向上と一致し、我邦にても急激に增加せり。最近の輸入杜絶するや、臺灣すら未だ是を産出せざるを以て不得止忍耐する外他策なし。この飲料は特殊の香氣を以て他の代用品を許さず。

將來大東亞共榮圈に於てはシーロン産を更に擴大すると共に、印度極南地方の無風溫暖の地と、下ビルマ及南シャン地方の無風高溫多濕の地を撰ばゝ、決して中南米に依存する必要なし。カカオは飲用のみならず、その油脂は醫藥用としても代用し難き必要品なり。シーロンの産額は政治年鑑に記載を缺けるを以て明かならざれ共、栽培面積は三四〇〇〇英反（一三七一九ヘクタール）に上れり。恐くは新企業なるを以て十分の産額を生ぜざるならんか。

ゴム

次はゴムなり。ゴムは現在にては未だマライ、東印度に及ばざること遠し。シーロン最盛にして、印度大陸是に次ぐ。シーロンは五三〇〇六五キロ、印度大陸は二七二八六四二キロ、合計五四八二九三〇一キロにして、五萬五千トンに過ぎず極めて少量なり。然れども果して全印度の需用を充すに足るや明かならず。若し不足ならばマライ、東印度より移入せば可なり。別に新栽培を行ふべき必要なし。然れども適地としては下ビルマの如き多雨帶はマライに讓らざる絶好の地なり。

印度大陸にて栽培せるは勿論ヘヴェア・ゴム（Hevea Bragiliensis）なれ共、アッサムの森林中に於ける印度ゴムと名くる Ficus elastica の野生ゴムも亦採取せり。このゴム樹は乳繰錯雜してヘヴェアの如く切付けをなすも流出著しからず、故に栽培として遠くヘヴェアに及ばず。唯原生林中より大樹を伐り之を採取せり。唯アッサムにては原産地

なるを以て、發育極めて順調なるを以て少許の栽培をなすに過ぎず。

別表參看

以上概ね農産及栽培物を記せり。農産物のみならず印度の産物は極めて多數にして、一々是れが記載をなすは煩に過ぎ讀者を倦怠せしむるの外效果薄し。故に別表（三一九―三四九頁）を作り之に題目を記し、特に是れに關し必要を告ぐる讀者の參考に供す。別表は「印度有用物産誌」により之を作る。

農業面積表（單位千エーカー）

	一九二九―三〇年	一九三〇―三一年	一九三一―三二年	一九三二―三三年	一九三三―三四年	一九三四―三五年	一九三五―三六年	一九三六―三七年
實測による面積	六六九、九一六	六六九、二四五	六六八、八九九	六六八、〇四五	六六八、〇四〇	六六八、〇四〇	六六八、三五四	六七九、六三二
農村交書による面積	六六七、五一六	六六七、五三三	六六七、五八六	六六七、七三二	六六七、七二一	六七七、五四四	△六六八、九九九	六七九、一四三
森林面積	八七、二七七	八七、九二三	八七、五六六	八八、八〇三	八九、〇七七	八九、三三九	八九、八〇六	八九、一七三
耕作不適面積	一四九、八七三	一四九、八一〇	一四九、六四四	一四九、五五〇	一四九、八二三	一四九、八一六	一四五、九八五	一四五、〇〇四
休閑地と異る耕作可能荒地	一五五、四九一	一五四、〇一八	一五四、〇二四	一五四、〇〇〇	一五三、六二七	一五四、〇六四	一五四、〇五四	一五四、二五八
休閑面積	四九、七二四	四九、六八	四九、〇四三	四九、〇九三	五〇、九三三	四九、六三九	五一、四〇〇	四八、三五八
實際播種面積	三三八、一六一	三三九、一二五	三三八、二六六	三三八、二六六	三三八、〇七六	三三八、二四六	三三八、七一四	三三八、七一四
灌漑面積	五一、〇〇〇	四九、六九七	四八、七二九	四九、八八三	五〇、〇八八	五〇、五三四	五一、五九七	五一、六六四
食用穀物作付面積	二四九、四四四	二四九、四五一	二四九、四四四	二四九、四四四	二四九、四四四	二四九、四四四	二四九、四四四	二四九、四四四
米	七九、四四四	八〇、四三二	八一、二八八	七九、九八八	八〇、四二五	八〇、四二〇	八〇、四三三	八一、一七八
小麥	二四、七三一	二四、七九七	二五、三三〇	二五、〇一四	二五、六五八	二五、六五五	二四、七九七	二四、一七八
大麥	七、〇二七	六、六九三	六、四九五	六、四〇五	六、七一四	六、五八七	六、五三一	六、一七八
ジワール	二三、八〇八	二三、八〇八	二二、八〇八	二二、六四二	二二、四〇一	二二、一三八	二二、五〇一	二二、一三八
バラジ	一三、二九一	一三、六九八	一三、九四七	一四、〇〇七	一四、一八八	一四、〇三三	一三、七四四	一三、九四四
ラガ	四、〇〇〇	三、九四四	三、八六六	三、八六六	三、七三三	三、七三八	三、五九八	三、五九八
玉蜀黍	六、五三三	六、四四八	六、二七七	六、一〇九	六、〇四九	六、二七七	二、八二七	二、二一七
レイン	一二、四五八	一三、六四四	一三、九二六	一三、九二二	一六、五四六	一三、九三六	一三、七三三	一三、五四〇
グ	三〇、二九四	三〇、三五三	三〇、四四四九	三〇、五八八	三〇、六一〇	三〇、五八八	三〇、三二三	三〇、二六三
其他の食用穀物及豆類	二〇〇、〇一八	二〇〇、〇三三	二〇一、〇一四	二〇一、〇四三	二〇一、〇四三	二〇一、〇一四	二〇一、〇一四	二〇一、〇一四
食用穀物合計	二二五、八三	二二五、七三六	二二五、七三六	二二五、七三七	二二五、七三五	二二五、七三五	二二五、七三五	二二五、八六九
砂糖	八、三八九	八、三〇一	八、三〇一	八、三〇四	八、三〇四	八、三〇四	八、三四	八、三四一
其他の食用作物（果實、野菜、藥味原料、香料及各種食用作物を含む）作付面積	七、八九六	八、〇七八	八、〇七八	八、〇七七	八、〇七七	八、四八五	八、三四一	八、一八一
食用收穫物總計	二三〇、四九九	二三一、八四六	二三一、八四六	二三一、八四四	二三一、八四四	二三一、八四四	二三一、八四六	二二六、六八八

（註）一九三六―三七年の數字は正確ならず修正の要あり　△印數字中には詳細不明の一四一、〇〇〇エーカーを含む

州別耕作地並耕作地面積表（一九三六―三七カ年度）

（單位エーカー）

州別	耕作地		未耕作地		森林
	管轄面積	現在休閑地	耕作可能の荒地	耕作不適地	
シオ聯邦西マデク中ビボビベアア					
ジ					
メ					
ル					
―メ					
ル及ベ					
ンツ					
ハガサル					
ベラ					
ワラ					
ドサ州ブ州スリグルマイルルムラ					
計	三九八四〇	四七六三〇	一四〇〇	四〇〇	一四〇
シ	三四〇	四〇	一〇〇	四〇	一〇
リ	四〇	一〇	一〇	一〇	一〇
合ジ邊	一四〇	一〇	一〇	一〇	一〇
ツヤ幾	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
ドサ州ブ州スリグルマイルルムラ	三四〇	四〇	一〇	一〇	一〇
計	三四〇	四〇	一〇	一〇	一〇
シ	三四〇	四〇	一〇	一〇	一〇
リ	四〇	一〇	一〇	一〇	一〇
合ジ邊	一四〇	一〇	一〇	一〇	一〇
ツヤ幾	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
ドサ州ブ州スリグルマイルルムラ	三四〇	四〇	一〇	一〇	一〇

州別農作物作付面積表（一九三五―三六カ年度）

（單位エーカー）

州別	香煙草及料	砂糖 甘蔗	砂糖 其他	繊維 棉花	繊維 黄麻繊維	繊維 其他の繊維	繊維 繊維總計
シオ聯邦西マデク中ビボビベアア							
ジ							
メ							
ル							
―メ							
ル及ベ							
ンツ							
ハガサル							
ベラ							
ワラ							
ドサ州ブ州スリグルマイルルムラ							
計	一四三〇	四〇	一三五	一四〇〇	一四〇	一〇	一四一〇
シ	三〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
リ	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
合ジ邊	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
ツヤ幾	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
ドサ州ブ州スリグルマイルルムラ	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
計	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
シ	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
リ	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
合ジ邊	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
ツヤ幾	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
ドサ州ブ州スリグルマイルルムラ	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇

州別農作物栽培面積表〔甲〕（單位三六一三七年1度）

| 州別 | 染料及皮鞣し原料 | | | 藥品及麻酔劑原料 | | |

州別主要農作物生産高（一九三六―三七年度）

州別	米（千單位トン）	小麥（千單位トン）	砂糖（千單位トン）	米（千單位トン）	棉花（千單位梱）	黃麻繊維（千單位梱）	亞麻仁（千單位トン）	茶（千單位トン）　煙草及葉煙草（千單位トン）	胡麻（千單位トン）	種落花生（千單位トン）	落花生（千單位トン）	大麥（千單位トン）
聯合シヤ州	三、一八六	三、四〇一	四、三五四	三、五四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四
シヤム	三、一八六	三、四〇一	四、三五四	三、五四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四
西ベンガル	三、一八六	三、四〇一	四、三五四	三、五四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四
マドラス	三、一八六	三、四〇一	四、三五四	三、五四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四
中央州及ベラール	三、一八六	三、四〇一	四、三五四	三、五四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四
ビハール	三、一八六	三、四〇一	四、三五四	三、五四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四
オリッサ	三、一八六	三、四〇一	四、三五四	三、五四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四
ビルマ	三、一八六	三、四〇一	四、三五四	三、五四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四
ベンガル	三、一八六	三、四〇一	四、三五四	三、五四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四
アッサム	三、一八六	三、四〇一	四、三五四	三、五四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四
ベラール	三、一八六	三、四〇一	四、三五四	三、五四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四
ガサルワ	三、一八六	三、四〇一	四、三五四	三、五四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四
ルムラ	三、一八六	三、四〇一	四、三五四	三、五四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四
計	三、一八六	三、四〇一	四、三五四	三、五四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四	一、四四四

（註）　落花生及黃麻繊維の數字は一單位に數字中には其他雜多のものを含む

州別食用穀物栽培面積表（甲）（一單位九三六―三七年一カ年）

州別	米	小麥	大麥	ジョワル其他	バジラ其他
シヤ聯合州	三、一八六	三、四〇一	四、三五四	三、五四四	一、四四四
ンドゥ北部	三、一八六	三、四〇一	四、三五四	三、五四四	一、四四四
ンベ州及ルール	三、一八六	三、四〇一	四、三五四	三、五四四	一、四四四
ヤ境ラ	三、一八六	三、四〇一	四、三五四	三、五四四	一、四四四
ドサ州ブ州スリグルマイルルムラ	三、一八六	三、四〇一	四、三五四	三、五四四	一、四四四

州別食用穀物栽培面積表〔乙〕（一九三六―三七年度）（單位エーカー）

州別	ラギ其他	玉蜀黍	グラム	其他の穀物及豆類	食用穀物總計
アジメル―メルワラ	五六	六二、一八	二九、一八一	四七、一二七	二九五、四三〇
アッサム	―	―	―	―	五、六八三、七四〇
ベンガル	四、五〇〇	七三、〇〇〇	二四一、九〇〇	一、五九、九〇〇	三、七二四、八〇〇
ビハール	六二、七〇〇	一、六四一、九〇〇	一、三七三、七〇〇	一、三七九、八〇〇	三〇、一九九、八〇〇
ボムベイ	八〇、一五三	一、八四六、六〇〇	六四〇、五六八	九六八、一二九	一九、九四五、〇四〇
ビルマ	―	二三、七三九	二六四、〇五四	九六八、一二九	一四、六八九、七一八
中央州及ベラール	九、四四九	一五四、一〇三	一、七五、四三五	五、三八〇、六二三	三〇、三七一、一三五
クルグ	七	―	七四、七九八	一、三七七	八九、七八四
デリー	三、三九九	三、〇五九	八二、八八四	一三、二六四	三四、五二一
マドラス	一、七八八、九三九	八〇、五四一	六、一七四、八〇九	二二、八六	三、六五三、六七五
北邊境州	―	四五六、八〇九	三九、〇〇三	二二、三六	三、三三、六七五
パンジャブ	一八、六〇四	一、〇七、五九一	四、九〇八、九一八	一四二、三六	三、三三、〇六九
聯合州	二四八、〇四九	一、九四、一〇三	六、四四四、九五五	六三、七九七	六、一三、一二〇
オリッサ	二九四、七三	三、八〇	四、〇六六	四、〇四二	三、八〇三、一二〇
シンド	三三	五、九五四、三一七	三四七、〇四二	二九、七七七、八九一	三〇四、〇三五、九三
計	三、五八五、二一〇	二九、九五、一二〇	一五、七九五、三二〇	二九、七七七、八九一	三〇四、〇三五、九三

非食用作物作付面積表（單位千エーカー）

作物	一九二七―二八年	一九二八―二九年	一九二九―三〇年	一九三〇―三一年	一九三一―三二年	一九三二―三三年	一九三三―三四年	一九三四―三五年	一九三五―三六年	一九三六―三七年
亞麻仁	二、二一三	二、〇九二	一、九二七	一、九九九	二、一二七	二、一七	二、〇六七	二、一二八	二、一三	二、三四二
胡麻	三、五四一	三、六六八	三、五六六	三、六三八	三、七一二	四、二〇七	四、二〇七	三、六三八	三、七二九	三、七二九
菜種菜及芥子菜	三、二七七	四、二六七	三、五二四	三、二九七	三、五〇七	三、五二四	三、二三三	三、二八五	三、二八	三、三八
其他の油種子作物	七、〇九三	七、八三九	七、二九三	七、五二四	六、四四四六	七、七九三	八、一九四	六、一六七	八、九四三	八、四三五
（油種子作物合計）	一六、一三	一七、八八六	一六、三三〇	一六、一四一	一五、八八三	一七、六九五	一七、七九四	一四、一五四	一四、八三五	一四、四三五
棉花	一四、八〇四	一六、五〇二	一六、一四一	一四、一〇一	一四、四八七	一三、一三三	一四、四八四	一四、一五八	一四、四八七	一四、四五七
黃麻	三、二九四	三、〇六三	三、二六八	三、四〇三	一、八七四五	二、四九四	一、八七七	一、九三五	一、八七七	一、八三五
其他の繊維作物	七一三	六五七	六六六	七一九	六六六	六三三	六六	六四	六六	六三
印度藍	六七	八一	七一	六四	五三	四二	四一	四〇	四一	四一
阿片	五四	四九	四二	四三、	四三	三一	三	一八	一八	一八
珈琲	九二	八七	九一	九二	九二	九三	九五	九五	九	九
茶	七四三	七六〇	七六六	七七五	七七五	七七五	七七九	七七九	七六三	七六三
烟草	一、一四五	一、一五〇	一、一七三	一、一三	一、一五〇	一、一一六	一、〇八五	一、〇五七	一、一五〇	一、一五〇
飼料作物	九、一五三	九、一七七	九、三八一	九、三〇〇	九、六三五	九、九八九	一〇、三〇七	一〇、九九一	一〇、三〇八	一〇、三〇八
其他の非食用作物	一、七六三	一、七七三	一、九〇一	一、九〇一	一、八二〇	一、八四九	一、四九四	一、五三四	一、四五八	一、五〇七
總計	四七、九五〇	五一、一八九	四九、八五九	四八、〇六七	四六、四五七	四七、二四〇	四七、一四九	四六、四二四	四八、五四二	四五、〇八九

州別灌漑面積表（甲）

州別	實際收穫面積（單位エーカー）	灌漑施設府工事による灌漑面積（單位エーカー）	收穫總面積に對する灌漑面積比率（%）	工の六一九年帶濕未三五年に至るより行府三（單位十萬留比）	作物種別の灌漑面積價格（單位十萬留比）
パラ	三、三六七、三七〇	三、六六七、三七七	一〇・〇	四五〇、〇	三、三一一
西ビルマ	四、三六七、四五六	三、四七〇、三四六	七・九	三、〇〇〇、〇	五六、三六〇
中央ビルマ	四、四二一、二四六	三、六四〇、四五六	八・二	三、八〇〇、〇	一、九七六、〇
ベンガル州（ベラール、ダダ境を除ク）	二六、一一〇、〇〇〇	一二、一五六、四五七	四六・〇	三、五四〇、〇	一、一四〇、〇
ボンベイ州（シンド、サマスリ）	三、三六七、三七〇	三、六六七、三七七	一一・〇	四五〇、〇	三、三一一
ムンベイ	三六、〇五五、〇〇〇	四、三三六、〇〇〇	一一・九	三、〇〇〇、〇	一、九七六、〇
マドラス	三、三六七、三七〇	三、六六七、三七七	一一・〇	四五〇、〇	三、三一一
計	三三、三六七、三七〇	三、六六七、三七七	一一・〇	四五〇、〇	三、三一一

（註）△印數字中には西ジュムナ水路、シルヒンド及ガッガー水路等の灌王國水路にして灌漑せられたる六六一、三四七エーカーを含む

▲印數字中には水力發電工事の二一九〇萬留比及び政府管井の四六〇萬留比を含む

州別灌漑面積表（乙）（單位一九三六―三七年度カエーカー）

州別	水路による灌漑 國營	水路による灌漑 民營	灌溉池による灌漑	灌井戶による灌漑	其他の灌水	灌漑總面積
シンド	—	—	一〇、六一〇	一〇、六一〇	一一	一七、六二七
北部ボンベイ	一〇	六、四一〇	一、四一一	—	四〇	六、四七一
中央州	一、四一一	六、四一〇	六、四一一	六、四一一	一、四一一	一七、六二七
ベラール	六、四一〇	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一七、六二七
ボンベイ	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一七、六二七
ビルマ	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一七、六二七
アッサム	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一七、六二七
ベンガル	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一七、六二七
ビハール	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一七、六二七
ユナイテッド州	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一七、六二七
パンジャブ	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一七、六二七
ダダ境を除ク中央州	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一七、六二七
ベラール	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一七、六二七
計	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一、四一一	一七、六二七

（註）×印は「水路による灌漑、民營」の數字中に包含せらる

州別作物別灌漑面積表〔甲〕（一九三六―三七年度）

單位エーカー1

州別	米	小麥	大麥	ジョーワル	バジリ
シオ州	一、八八五、九五一	九四〇、四三六	一一、四四四	一、一四一、四一〇	一、七七
パンジャブ州	一、六二一、九四六	九三〇、七六六	三六、六四四	一、三五五	
西北ボンベイ	一、三三六、〇三五	六三、三三一	一、一四一	一、四四一、四一〇	一一、四四六
マデラス	一、四九、三三四	一、四四、九七四	一、四四	一、四四、九七四	一、四四六
中央州及ベラール	八八、四三五	三、九三五	一、四四	一、四四、九七四	一、四四六
ビハール	一、四九、三三四	三、四四、九七四	一、四四	一、四四、九七四	一、四四六
ボンベイ州	一、三三六、七四四	三、四四、九七四	一、四四	一、四四、九七四	一、四四六
ベラール	一、四九、三三四	三、四四、九七四	一、四四	一、四四、九七四	一、四四六
アッサム	一、四九、三三四	三、四四、九七四	一、四四	一、四四、九七四	一、四四六
ドサ州	一、四九、三三四	三、四四、九七四	一、四四	一、四四、九七四	一、四四六
マイソール	一、四九、三三四	三、四四、九七四	一、四四	一、四四、九七四	一、四四六
ルムラ	一、四九、三三四	三、四四、九七四	一、四四	一、四四、九七四	一、四四六
計	一、四九、三三四	三、四四、九七四	一、四四	一、四四、九七四	一、四四六

（註）本表面積數字中には收穫期間中度々灌漑二回に及ぶ爲め重複加算となれるものあり

州別作物別灌漑面積表〔乙〕（一九三六―三七年度）

單位エーカー1

州別	玉蜀黍	其他豆の類	甘蔗	其他食用作物の	棉花	非食用作物の	總灌漑面積計
シオ州	三、六三	二、四三三	九	一〇、六八	三、八八	四四	三、七七
パンジャブ州	一、四四〇、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六
西北ボンベイ	一、四四、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六
マデラス	一、四四、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六
中央州及ベラール	一、四四、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六
ビハール	一、四四、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六
ボンベイ州	一、四四、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六
ベラール	一、四四、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六
アッサム	一、四四、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六
ドサ州	一、四四、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六
マイソール	一、四四、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六
ルムラ	一、四四、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六
計	一、四四、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六	一、四三、六五六

（註）兩收穫期の灌漑面積を重複加算せること甲表に同じ

林　産

次は林産なり。林産は上に云ふが如く溫帶林より熱帶林に及べり。その面積は政治年鑑（一二七頁）によるに二四一七四三平方英里（六二八六三〇平方キロメートル）にして、その過半はビルマに存す。大印度としては森林面積は狹きに失す。此の數字は土侯領を除けるにより、之を合せば恐くはその五分一を增加し、我帝國の現在の全面積たる六十七萬平方キロメートルよりやゝ多かるべしと信ず。

チ　ー　ク

森林中熱帶産として第一は上に云ふが如くチークなり。Tectona grandis の學名を有し、東南アジアの原産なり。チークの良材たるは辯を待たず。印度に於ける産地は大陸に於ては中部、西部及南部なり。東部には少なし。ビルマにてはアラカン、ペグ、マルタバンの丘陵なり。アラカンは東側なり。北緯二十五度以北にては多く産出せず。サー・ジョルヂ・ワット（印度有用物産誌、一〇六八―六九頁）は、サハランプル（Saharanpur）、デラヅン（Dehradun）、ラホール（Lahore）にも栽培せしに好結果なり。其他各地の林業場の植林は皆成功せり。ベンガルも、アッサムも、アラカン西面も亦然りと云ふ。臺灣にても隨處の植林は皆結果良好なり。然れ共熱帶圈內の臺南、高雄兩州と臺北、新竹兩州と比較するに著しき差あり。故に生長すと雖も、その木材として利用せらるべき植林は依然熱帶圈外を不適當なりと斷定するを穩當なりとす。ラホールの如き北緯三十一度の地に生長するの故を以て亞熱帶林木となすは不可なり。

栽培は一般に良好なり。特に肥沃の地を欲せず寧ろ不適なり。やゝ瘠土は樹の生長少しく遲きも堅緻なり。ジャバは全部殖造林なれども皆良地に非らず。八十年乃至一百年を以て伐木適期となせども、臺灣に於ける實例に徵するに二十年を經たる間伐材は直徑二十サンチに及び、柱、杭等として是を用ふるも十分その用をなせり。此の木材は硬輕その中庸を得て、一般の建築材、造船材、家具材等に用ひて佳ならざるなし。不肖は此の木材を好み、住宅は造船の廢材を得て之を用ふ。一たび之を用ひば決して他の木材を欲せざるなり。

我邦の建築者及工匠等は硬材を好ます。上古より之を產せざるを以て、輕材に適する工具のみなれば、之を使用するに困難なるを以て避けて用ひずと雖も、造船は之を用ひざれば不可なり。故に船匠は皆その良材なる事を知れり。この木材は特に白蟻の害に對し有效なり。白蟻は此材に害をなさず。故に臺灣の如き白蟻の多き地は實に有效なりとす。輕輭材は兩三種を除く以外は皆是の害を蒙らざるなし。故に熱帶にては困難なり。

ヒマラヤ杉

次はヒマラヤ杉なり。學名は Cedrus deodara なり。サー・ジョルヂ・ワット（印度有用物產誌、二九一―二頁）の云ふ所に依れば、これが產地は西ヒマラヤを主とし、西はアフガニスタンより東はクマオン（Kumaon）に及び、高度は一千八百メートルより二千四百メートルに至る區域に最も多く、東部にては三千メートルに及べり。樹木は大喬木にして普通圓周十二英尺（三・六六メートル）なるも、三十―四十五英尺（九・二五―一三・七二メートル）のもの少からず。樹長も一百より二百四十英尺（三〇・五―七三・二メートル）に及べるものあり。不肖往年カシュミルを旅行せしに、高度二千四百より二千一百メートルの間に大森林中を通過せり。この樹性は庭園樹としては垂下せる絲條

の如き枝を有するも森林として全く之を缺き、亭々蓋々樹頭にのみ枝を有し、天日を遮り全く光線を蔽へり。

この樹は我邦人の多數は知らざるも、大都市に住せる人は皆これを見る。特に公園の如きは之を植ゑざるもの少なし。神戸は我邦にて最初に移植せし地にして、五、六十年の樹齢を有するもの少からず。特に山麓の北野町に多し。東亞ホテルの如きは其の適例なり。東京にては故福羽子爵、内苑頭たりし當時新宿御苑に栽培し、今日既に大樹となる。京都も植物園中に之を植ゑ、一昨年（十五年）始めて結實せり。如此く東部、中部の風土には極めて適し、而も強健にして、山地たるとやゝ低濕地たるとを問はず能く繁茂せり。東京築地本願寺の如き極めて低濕地なるもその生長は極めて良好なり。庭園の針葉樹としては我邦人は特に松を好めども、不肖は此樹を以て遙に上位にありと信ず。その幹、その枝共に松樹の如き屈曲せるものに非らず。

この木材は又本邦の檜材に似て輭材中の最良なり。サー・ジョルヂ・ワットは一立方英尺三十五ポンドの重量を有ずと云へり。決して重しとなさず。然れども輭材としては堅緻なるを以て、之れが土産地たるパンジャブにては鐵道枕木に用ふ。カシュミル及カナワル（Kanawar）にては、六百年より八百年に及べる古建築に今日猶この材を見るべし。唯缺點とする所はやゝ裂目を生ず。故にペイント及ワニシを用ふるに適せずと云へり。然れども彫刻用としてはカシュミル一帶の建築等に多く使用せり。

此の材は上のチークの如く白蟻等に對し極めて有效なり。是れ材硬きが故に非らず、一種の芳香性樹脂を有するを以て蟻族是を嫌ふによる。臺灣に於ける福州竹の例の如し。

松　材

次は松材なり。上のヒマラヤ杉に比するに劣れりと雖も用ふべし。學名は Pinus excelsa なり。サー・ジョルヂ・ワット（印度有用物產誌、八八八頁）によるに、アフガニスタンより東はブータンに及べるヒマラヤにして、クマオン及シッキムを除く西ヒマラヤに多し。その高度は概ね上のヒマラヤ杉に同じく一千八百メートルより三千八百メートルに及べり。この松林も不肖はカシュミル及西ヒマラヤにて數ゝ通過せり。ヒマラヤ杉に及ばざる大喬木なり。樹幹は直立し、本邦の松の如く屈曲せず。恐くは松樹各種中最良なるべし。excelsa の名を用ひしは適當なりと信ず。樹葉はやゝ綠色よりも青碧色を帶び一層優雅の觀あり。大林となす以外に庭園樹として極めて適當なり。何故にや、ヒマラヤ杉は本邦各地に栽培せらるゝも此樹は多く是れを見ず。不肖は臺灣にて是を知らず。恐くは植物園にも有せざるならんか。原產地の高度等はヒマラヤ杉と全く同一なれば、本邦中部を最適とし十分に普及せしむる價値あり。

木材としてはやゝヒマラヤ杉に劣れるも、板材となすときはヒマラヤ杉より勝れり。是れ小裂を生ぜざるより有效なると、香氣の强烈ならざるに由る。カングラクル（Kangrakulu）の茶園にては此板を以て茶箱となせり。輕量なると、樹脂の香氣なきと、割裂せざるに由る。本邦のモミ板を用ふるが如し。白蟻への抵抗は恐くは不可ならん。

檀　木

白檀

次は檀木なり。此の中香檀は所謂白檀にして、學名は Santalum album なり。サー・ジョルヂ・ワット（印度有用物

産誌、九七六―七頁）の云ふ所によれば、南印度の乾燥帶を原産地とす。就中マイソル（Mysor）、クルグ（Coorg）、南マラッタ（S. Maratta）、ハイデラバッド（Hyderabad）、カルナタク（Karnatak）、西ガート（W. Ghats）、ニルギリ（Nilgiri）、コイムバトル（Coimbatore）等を主とし、北印度にては栽培なり野生なしと云ふ。玄奘三藏大唐西域記にも極南地方にのみ是を記し、國南濱海有秣剌耶山崇厓峻嶺洞谷深邃其中則有白檀香樹の文あり。この文の秣剌耶山なるものは卽ち地形の項に記せる Malaya-Cardamon 山なり。然れば上のジョルデ・ワットの云ふコイムバトル地方に合致す。

現在はマイソル地方最盛にして、土侯國の專賣となれりべき植物を要す。決して白檀樹のみにては生長せず。この同居植物は一百以上をラマラオは列擧せりと云へり。臺灣に栽培せる實例に徵するに、同植すべき樹は特に之を撰ばざるが如し。灌木にして白檀より旺盛ならざるやゝ類似せるものならば大過なきが如し。

これが栽培は必しも困難ならざるも多濕は之を避けざるべからず。やゝ乾燥地ならば概ね成功せるが如し。印度には最良の香木とし上古より之を尊べり。不肖の「隨筆百則」（一七〇―一七四頁）に詳細を記せり、就て見るべし。東印度諸島、西印度、西濠洲にも存するも遠く及ばず。

紫　檀

次は紫檀なり。紫檀はその材木の本性不明にして久しく疑議の中に存す。最近は Pterocarpus Cochin sinesis を以て是に充つるを適當なりとす。然れ共これは本邦にて云ふ所の紫檀なるものにして、印度にては紫檀と云はず赤檀と云ひ、上の白檀に對して是を稱す。京都市嵯峨清涼寺の本尊の如きは赤梅檀の佛像なりと傳へらる。この赤梅檀なるものは決してサンタルムに非ず、プテロカルプス屬なり。今是をサー・ジョルデ・ワット（印度有用物產誌、九〇七―九〇九頁）の記する所によれば下の五種を擧ぐ。(1) Dalbergisides (2) Indicus (3) Macro carpus (4) Marsupinium (5) Santalinus なり。

（一）はアンダマン群島の產にして、その木材は堅緻にして著名なり。家具、床板、鐵道車輛、勾欄及砲車に用ふ。カルカッダ、マドラスの兵工廠及キルメプールの船渠等にて貯木せり。（二）は最も普通に栽培せられ、臺灣にても之を見るべし。（三）はビルマのみにで他には多く見られず。第一よりは更に堅緻に且比重も重し。（四）は藥用のキノゴムを產するものにして、中及南印度、シーロンの產なり。木材は南印度にて重視せられ、戸牖に用ひ又柱梁、家具、農具、車類、船材とす。特に兩面を有する大鼓の胴に用ひ、特殊の音響を發す。（五）は所謂赤梅檀にして南印度の產、特にマドラス附近に多く、小木なり。木材は柱として賞用せられ、南デッカンにては農具に用ひ、又彫像、箱簞、額緣等に大に重用せらると記せり。然れども紫檀の支那及日本の用途と大差なし。唯紫檀は往時より重價を以て支那に輸入せられたるものなれば、柱梁となせるが如きは少なしと雖も、北京の故來の宮殿等には是の種の木材を用ふ。

廣東の城北五層樓の十數年前改築せられし時不肖適〻之れを見、その故時の殘材を贖ひ來り、今日猶所有せり（現に高雄逍遙園にあり）。この材は中心腐蝕し空洞をなせども直徑約六十サンチの圓柱なり。木質は紫檀に類せり。是を以て見るに、廣東にては南洋より船載せるにより如此き巨材を城樓に使用せしならんか。時代は明かならざれども明朝時代なるべし。此種の材は有用なれども特に重し。

黒　檀

黒檀はサー・ジョルヂ・ワット（印度有用物産誌、四九八―九頁）によるに、Diospyros Ebenum, D. Kurzii, D. Melanoxylon の三種を木材用として擧ぐ。第一は普通の黒檀なり。印度にては多からず。デッカン及カルナタク（Karnatak）にありと雖も多しと云ふべからず。第二はセイロン北方の乾燥地方にては普通の材木なり。印度は少量なるを以て輸出するに至らざるも、シーロンよりは一八九二―一九〇二年の十年間には毎年三百トンを輸出せりと云ふ。東印度諸島にてはセレベス最も多く、本邦に常に輸出せられしは各人の能く知る所なり。臺灣には是れに類せる毛柿あるも極めて極南部のみにて少量なり。第二はアンダマン島の産にして、英國にてはマーブル木材と云ふ。その色澤大理石に類するを以てなり。非常に貴重なるものにして、他の地方に産せざるが如し。第三はコロマンデル黒檀にして、彫刻用となすと云へり。

以上はその概略なり。本邦の黒檀は東印度諸島、主としてセレベス産なり。支那は何れの地より古來輸入せしや、不肖は未だ研究せざる故斷言する能はず。

婆　羅

檀木の次に堅材としては婆羅なり。學名は Shorea robsta にして、全印度に多し。大唐西域記によるに、拘尸那揭羅國城西北三四里渡阿恃多伐庭河西岸不遠至婆羅林其樹類槲而皮青白葉甚光潤四樹特高如來寂滅之所也と云へり。是の記事は婆羅樹を能く説明せり。サー・ジョルヂ・ワット（印度有用物産誌、九九〇―一頁）の云ふ所によれば婆羅樹の區域は二あり。一はヒマラヤの下方の樹林一帶、二は中央印度ベンガル、オリッサ等なり。玄奘三藏の記する所は第一のヒマラヤの下方に屬するものなり。

この木材は極めて堅固にして、北印度にては最重要なる材となせり。十分に氣乾せざるも良品ならば堅固と彈力と強靱の三者を具備す。その用途は杭、梁、板、橋欄、戸牖、砲車、車輛、鐵道枕木等にして、毎年幾十萬立方英尺を使用すと云へり。

印度の林相

以上は大體に硬軟各種の材を擧ぐ。熱帶林は多種多様にして、溫寒帶の如き單純林なるもの殆ど存せず。上に云ふヒマラヤ杉及松の如きは大なる單純林をなせども、緯度上も既に熱帶圏を離れ、高度よりも完全に溫帶に入れるを以て如此き林相をなせり。瀾葉樹としては單純林の存在は少なく、チークの如き婆羅の如き稍是に近しと雖も、針葉樹林の如く幾十キロメートルを一林相となすが如きを見ざるなり。

森林諸統計（甲）

地方	地方面積（平方哩）	森林 指定（平方哩）	森林 保安林（平方哩）	森林 其他區分州林（平方哩）	森林 計（平方哩）	對地森林ず方林面積比積（%）
計落アクアベニアヤ中オヒビバ爺ベシボマ						
島ンダマンルーメタンエ央ルリルンムド						
一九三六年	一〇一、三五〇	一、三五〇	一、三二六	三五	二、六七六	二・六
一九三五年	一〇一、三五〇	一、三五〇	一、三二六	三五	二、六七六	二・六
一九三四年	一〇一、三五〇	一、三五〇	一、三二六	三五	二、六七六	二・六
一九三三年	一〇一、三五〇	一、三五〇	一、三二六	三五	二、六七六	二・六
一九三二年	一〇一、三五〇	一、三五〇	一、三二六	三五	二、六七六	二・六
一九三一年	一〇一、三五〇	一、三五〇	一、三二六	三五	二、六七六	二・六

森林諸統計（乙）

地方	天産物 材木及薪（立方呎）	天産物 産出額 其地比（圓）	收益（圓）	費用（圓）	差引儲利（圓）	比
ビルマ（シャン州を含む）	一一七、三五〇、〇〇〇	一一、三五〇	四、五四七、三五一	四、〇五〇、一一一	四九七、二四〇	一一
ベンガル	一一七、三五〇、〇〇〇	一一、三五〇	四、五四七、三五一	四、〇五〇、一一一	四九七、二四〇	一一
ベンガル	一一七、三五〇、〇〇〇	一一、三五〇	四、五四七、三五一	四、〇五〇、一一一	四九七、二四〇	一一
ベンガル	一一七、三五〇、〇〇〇	一一、三五〇	四、五四七、三五一	四、〇五〇、一一一	四九七、二四〇	一一
ベンガル	一一七、三五〇、〇〇〇	一一、三五〇	四、五四七、三五一	四、〇五〇、一一一	四九七、二四〇	一一
ベンガル	一一七、三五〇、〇〇〇	一一、三五〇	四、五四七、三五一	四、〇五〇、一一一	四九七、二四〇	一一

（註）地方面積の數字中にはデリ地方及マニプール（中央印度）の英領バルマナを含まず又區分州林中には往々全く樹木無き荒地を含み從て當該欄數字は必しも正確なる森林面積を示すものに非らず（シャン州の面積は六一〇五八平方哩なり）

	計	一九三六―三七年	ビルマ	アッサム	ベンガル	中央諸州及ベラール	北西辺境州	アジメール―メルワラ	英領(管轄)地	チスタン	ブルチ	計	一九三五―三六年
一九三〇―三一年	三、五三八、五三九	三、五三八、五三九	四、五四〇	三、五三五、九九九	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	三、五三八、五三九	三、五三八、五三九
一九三一―三二年	三、五三八、五三九	三、五三八、五三九	四、五四〇	三、五三五、九九九	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	三、五三八、五三九	三、五三八、五三九
一九三二―三三年	三、五三八、五三九	三、五三八、五三九	四、五四〇	三、五三五、九九九	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	三、五三八、五三九	三、五三八、五三九
一九三三―三四年	三、五三八、五三九	三、五三八、五三九	四、五四〇	三、五三五、九九九	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	三、五三八、五三九	三、五三八、五三九
一九三四―三五年	三、五三八、五三九	三、五三八、五三九	四、五四〇	三、五三五、九九九	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	三、五三八、五三九	三、五三八、五三九
一九三五―三六年	三、五三八、五三九	三、五三八、五三九	四、五四〇	三、五三五、九九九	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	三、五三八、五三九	三、五三八、五三九
一九三六―三七年	三、五三八、五三九	三、五三八、五三九	四、五四〇	三、五三五、九九九	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	三、五三八、五三九	三、五三八、五三九

（註）　収益欄の数字中には主要森林事務院及研究所項目に於ける収受勘定の三六、六八三留比を含む

　　費用欄の数字中には英皇帝（五四、〇三七留比）及森林事務院並研究所（六二、二一一留比）の項目に入る費用を含む

　　差引損益欄の数字は英皇帝（五四、〇三七留比）及森林事務院並研究所（五八五、九二七留比）に就き不足勘定を差引きたる後の数字なり

林業貿易表

（一）　材木輸出高（年、單位千呎）

	一九三六―三七年	一九三五―三六年	一九三四―三五年	一九三三―三四年	一九三二―三三年	一九三一―三二年
英帝國へ	千留比	千留比	千留比	千留比	千留比	千留比
材木輸出高	一七、一三六	一七、九三五	一七、一三六	一〇、四〇九	一二、一七三	一三、一四四
英帝國へ	七五%	七五%	七五%	七五%	七五%	七五%
鐵道枕木	三、三六六	三、五四八	三、五四八	二、八六四	二、七三三	二、四三四
其他の材木	一、三五四	一、四八二	一、四八二	一、一四五	一、〇九三	九七三
砂利及トン砂						
松（砂利及トン）						
樅（砂利及トン）						
チーク木材	三、三七〇（同上一、三五〇）	三、三七〇（同上一、三五〇）	三、三七〇（同上一、三五〇）	二、三七〇（同上一、〇五〇）	二、三七〇（同上一、〇五〇）	二、三七〇（同上一、〇五〇）
千留比	四、三六六	四、三六六	四、三六六	三、四二〇	三、四二〇	三、四二〇

（註）　一九三七年四月一日以來、英領印度の海上外國貿易統計は英領印度の對ビルマ貿易を含み、ビルマの他外國との直接取引を除く（以下各表其同じ）

林業貿易表（2）ラック類輸出高（年、單位千磅）

	一九二六―二九年	一九三一―三三年	一九三三―三四年	一九三四―三五年	一九三五―三六年	一九三六―三七年	一九三七―三八年
ラック（磅）	六、四二一	一、三〇七	九三三	一、八四五	三、三七四千個比	三、三〇六千個比	一、五三一千個比
ロジン（磅）	（一、一四九）	（五七）	（四四）	（二）	（留比賀ベンガレット一、三〇九）	（同上）三、三四三	（同上）一、四一八
ペトラック（磅）	一、四二九	三四四	六六	三五四	六、八七五	一〇四、〇三三	八、八三三
松脂及トルペンタイン（磅）	六、三五六	四、九二九	四四四	四、一三五	五、一三五	四、一八二	三、三八三
木材クレオソート（磅）	一、三五三	三四五	一〇九	一、三五	一、三七五	一〇四、〇三三	八、三三三
枕木（本）	四、七九三	一、三一四	三四〇	三、八四五	四、四七五	一、三七五	三、三七五
鐵道其他の材木（磅）	一、八三五	一、三四	一、三五	一、三五	一、三五	一、三五	一、三五
計	四、〇	三五	三四	五七、八	三三、六	三五、〇	三、三

（註）ミロバランの數字中には汁液を含み、白蠟の中には油を含む　△印は積卸雜費を含む

林業貿易表（3）製作品輸出高（年、單位千磅）

	一九二六―二九年	一九三一―三三年	一九三三―三四年	一九三四―三五年	一九三五―三六年	一九三六―三七年	一九三七―三八年
其他の製作品							
計	一三五	一三二	一三	一二、〇三	一二、三三	一二、二三	一、六三
木材パルプ				千個比	千個比	千個比	千個比
寸法標							

（註）「其他の製作品」中には家具、細工品及骨董出品を含まず

林業貿易表（4）材木輸入高（年、單位千磅）

	一九二六―二九年	一九三一―三三年	一九三三―三四年	一九三四―三五年	一九三五―三六年	一九三六―三七年	一九三七―三八年
材木				千個比	千個比	千個比	千個比
チーク	一三五	一〇九	五四	一一、〇三	七、九三	一、〇六	三三、五六
松（磅）及トルペンタイン（磅）	（一一）	（九）	（六）	（留比賀各港哪六四）	（同上）三、三七	（同上）一一〇	（同上）一三、三
其他の材木	三三、六	二四、〇	二一五	二一五	七、三〇	七、四三	四、四七
鐵道枕木	三五	一三四	一三五	一三五	七、三五	一、三五	一、三五
計	四〇	三五	三四	五七、六	三三、六	三五、〇	三、三
英帝國より	一三%	一二%	一三%	六%	五%	二%	九%
陸路輸入	（不明）	（不明）	（不明）	（不明）	（不明）	（不明）	（不明）

（註）陸路輸入の數字は一九二四―二五年（三五、〇〇〇磅）以後不明なり

林業貿易表〔5〕　樹脂類輸入高（年、單位千磅）

	一九二八—二九年	一九三一—三二年	一九三二—三三年	一九三三—三四年	一九三四—三五年	一九三五—三六年	一九三六—三七年	一九三七—三八年
樹脂	二八	二一	一二	二五	千留比 四、四九	千留比 三、七六	千留比 三、五二	千留比 四、五二
松脂精及代用品	一九	九	八	九	一、四八	一、二三	一、三三	七、五〇

林業貿易表〔6〕　製作品輸入高（年、單位千磅）

	一九二八—二九年	一九三一—三二年	一九三二—三三年	一九三三—三四年	一九三四—三五年	一九三五—三六年	一九三六—三七年	一九三七—三八年
茶櫃	四九七	三五六	三五六	四〇〇	千留比 五二、〇八	千留比 五八、一七	千留比 五六、二七	千留比 七一、七〇
木材パルプ	三一一	二七〇	一六六	二〇三	二六、一八	二〇、四八	一四、五八	一七、一七
燐寸	一二九	八	四	六	六二	一、〇〇	四八	二〇、四四
其他の製作品	九一	三二	九四	九四	二〇、三九	二二、六五	二〇、四四	二八、一九
計	一、〇二八	六六六	六二〇	七〇三	九九、二五	一〇二、三九	九一、七五	一三七、五〇

（註）其他の製作品」の中には家具、細工品及再輸入品を含まず

畜産

牛

次は畜産なり。印度は上古より畜産に富めり。而も居民は乳を好み從て牛を愛するに至れり。是と共に農事を第一となし役牛の必要を生ぜり。而して之を愛するの極は何の日か彼等の尊崇せる大自在天（シバ）と連結し牛を崇び、乳を飲用するの外牛糞すら清淨なりと迷信せり。乳より酪酥を作り、その最上味を醍醐味と稱するに至る。經典中にも牛乳に關する記事は極めて多く枚擧する能はず。

印度の高貴なる種族は武人の少數を除き多く肉食せず、從て動物蛋白及油脂の人體生存に必要なるは之を乳脂に求めざるべからず。生理的の必要より牛乳を愛用せしなるべし。大聖世尊の正覺を畢波羅樹下に成ぜんとするに先ち、二牧女の奉る所の乳糜を受けしは世間周知の史實なり。如此く高貴の種族にして而も淨行をなせる人にても乳糜は上妙の食なりと信ぜられしなり。故に爾來幾千年この習慣は今日に傳へられ、西方民族の印度に入るも同じく西方アジアの牧民なり。歐洲人の來るも亦牛乳を常用せる民族なり。我帝國の大和民族の如き牛乳を醫藥なりと信ずる民族に非らず、

我民族は何故か佛教の渡來と共に輸入せる牛乳を却去して是を用ひず、經中の乳味に關する點は之を默過して實行せず。是れ奇異なり。若し奈良朝の佛教隆盛なりし當時より牛乳を飲用せしならば、今日は東洋第一の牛乳飲用國た

るなり。寥々幾十萬頭に過ぎざるホルスタイン牛を以て乳を藥用に供するが如き愚は學ばざりしならん。

馬

馬は同じく印度に於ては最古の家畜として、牛と共に重用せらる。アリヤン民族は馬に對して東方民族より遙にその關係は深しとす。上古よりアリヤナ（今のアフガニスタン）は善馬の産地なり。是を故郷となせる民族にして最重用の家畜たる馬を捨て印度平原に移住するの理なし。況や西北一帶は産馬地域として今日も猶然り。支那及本邦は古より善馬を産せず。漢武帝の西征もその重要目的は大宛汗血馬なり。

シル及オクス兩大河の上流は古より名馬を産せり。唐の太宗の陵墓たる昭陵の六駿馬の彫刻を見るに皆此種の馬を以てせり。所謂西域と稱せらるゝ地方は皆善馬産地として支那にて知らる。刹帝利種（Ksatreya）は武人なり。故に馬を以て戰陣の用となせしは史上に記せるが如し。吠舍種（Vaigya）は商人なり。大陸貿易に車馬を用ふるは理の當然なり。故に牛に次ぎ馬を愛用せしは上古より疑を容れず。今日も極めて多數の馬を産せり。

象、羊、山羊、豚、駱駝、水牛

牛馬の外は象を家畜となせ共その數は多からず。古は王族の用と戰陣に用ふるに過ぎず。今はシーロン、ビルマ以外はその數甚だ少なし。

羊と山羊は食用と皮用に用ふ。羊毛は極めて少量なれども、その數多きによりパンジャブより北西一帶には相當量を産せり。別にカシュミル地方には特殊の山羊毛あり、極めて上品となせり。

豚は少なし。イスラム敎徒の是れを嫌忌すると、印度敎徒の食肉を好まざるとにより、支那に於けるが如く多數を見ず。

駱駝はシンド地方の沙漠に多し。一般に印度の駱駝はアリヤン族の Camelus bactriana に屬す。現にシンドには駱駝騎兵あり。

水牛も亦使用せらる。米田の如き水澤には此の家畜の必要あり。

畜類頭數

今政治年鑑（一二六頁）によるに、一九三五年（ベンガル、ビハル、オリッサ、ベルチスタンを除き）牛八千四百萬頭、水牛二千九百四十一萬五千頭、羊二千二百十一萬三千頭、山羊二千六百八萬九千頭、馬一百四十萬八千頭、騾六萬四千頭、驢一百四十四萬二千頭、駱駝五十二萬六千頭なりと云ふ。何故ベンガル以下の諸州を除きしや不明なり。之を加ふれば更に增加すべし。

生畜及畜産加工品輸出入高　（單位千留比）

輸出

種別＼年度	一九三五―三六年	一九三六―三七年	一九三五―三七年に於ける全輸出額に對する比率（%）
製品としたる皮革	五六、二八九	七三、六三四	三・七五
羊毛及羊毛製品	二九、二五六	三七、三八九	一・九一
骨	三、二一九	四、六四五	〇・二四
生畜	九二六	八三一	〇・〇四

輸入

種別＼年度	一九三五―三六年	一九三六―三七年	一九三五―三七年に於ける全輸入額に對する比率（%）
羊毛及羊毛製品	二七、八五四	二八、六九四	二・二九

主要家畜分布狀態（單位萬頭、左側括弧内の數字は百分比を示す）

州別＼種別	牛	水牛	緬羊	山羊	馬	驢	騾	駱駝
聯合州	二、二九〇（一九・一）	八〇〇（二六・七）	二三三（八・八）	六五六（一八・四）	四六（二六・〇）	二五（一八・三）	一・八（二四・〇）	二・五（四・七）
パンジャブ	九〇〇（七・五）	二五〇（八・三）	四四六（一七・六）	三六二（一〇・二）	四七（二六・五）	六〇（四三・七）	三・二（四二・七）	二八（五二・九）
マドラス	一、六四四（一三・七）	五五〇（一八・三）	一、三〇〇（五一・四）	七四〇（二〇・八）	二〇（四・七）	—	—	—
中央州及ベラル	一、〇五〇（八・七）	—	三七（一・〇）	一四七（四・一）	一二（六・八）	三（二・二）	—	—
ベンガル	二、四九〇（二〇・七）	一一〇（三・七）	六一（二・四）	五四三（一五・二）	—	—	—	—
ビハル及オリツサ	一、七四三（一四・五）	三七〇（一二・四）	一二三（四・九）	五五五（一五・六）	一九（一〇・七）	三・二（二・三）	—	—
ボムベイ	九〇〇（七・五）	二八〇（九・三）	二五六（一〇・六）	三八六（一〇・八）	二〇（一一・三）	一九（一三・九）	—	一八（三四・〇）
アジメル―メルワラ	—	—	三四（一・三）	—	—	—	—	—
西北邊境州	—	—	五〇（二・〇）	—	—	一二（八・八）	一・三（一七・二）	三・五（六・六）
其他	九八三（八・三）	六四〇（二一・三）	—	一七一（四・八）	三三（一八・四）	一四八（一〇・八）	一・二（一六・〇）	一（一・八）
總飼養頭數	一二、〇〇〇	三、〇〇〇	二、五三〇	三、五六〇	一七七	一三七	七・五	五三

（註）頭數を掲げざる州の飼育頭數は「其他」の欄に含めたり、頭數は一九三〇乃至三五年頃の統計と推量せらる

馬及騾の意外の少數なるは注目すべし。少なくも一千萬頭以上ならざるべからず。然れども役馬少なく農耕は牛を用ひ、運送は鐵道又は自動車等に依るを以て、その必要牛及水牛に及ばざるを以て十分一以下の數なるべし。ベンガル、ビハル、オリッサ等の諸州も馬の産地に非ずして牛、水牛の最も多く使用せらるゝ區域なり。

家禽類は雞を主とせるは必然なれども、その統計を缺くを以てその數量を知るべからず。一般に肉食をなさゞる民族なるを以て歐米、支那の如く大量ならざるは必然なり。

水　産

漁　業

次は水産なり。漁業は海産と淡水産とし、海産は瀕海皆行はざるなし。淡水産は河川池沼による。ベンガル、ボムベイ、スマトラをその産地となせり。乾鹽魚も亦多く、特に記すべきは魚翅なり。支那人の食膳の最良品はアラビヤ海及印度洋産とす。シンドの外ベルチスタンの沿海民は漁業に長ぜり。フカ族の巨大なるものアラビヤ海及印度洋に多し。これが翅も亦臺灣附近の如き小なるものに非らず。カラチ、ボムベイは皆集散地なり。魚膠も從て製せられ貿易品となせり。海參も相當に漁獲せらる。サー・ジォルヂ・ワットの「印度有用物産誌」は五二九頁より五五一頁に至るまで詳述せり。就て見るべし。

漁業は全般に之を論ずればボムベイ沿岸、カチャワル半島よりトラヴァンコールに至る沿岸は皆好箇の漁場なり。

ビルマ之に次ぎ、最後はベンガルなりと云へり。

一般に鹽は水産なれども、印度に於ては水産よりは寧ろ陸産なり。唯シーロンは水産として海水より之を取ると雖も、大陸は岩鹽及沙漠中の鹹湖を用ふ。ペルシャ灣とオマン灣の中間なるバンダル・アバス（Bandal abbas）の前方の島嶼は岩鹽より成れり。海軍水路部刊行ペルシャ海灣水路誌（一四五頁）によるにジェジラット・ホルムズ（Jezirat Hormuz）――北緯二十七度五分、東經五十六度二十七分――にして、諸丘は顯著なる白色諸峯を除く外は主として岩鹽質にして、區々の色彩を有する薄き土質にて被はると云へり。この附近に至るまでベルチスタン一帶に岩鹽層あるが如し。故に水産として是を論ぜず礦業の下に加ふ。

眞　珠

水産中他地方に異なるは眞珠の産なり。サー・ジョルヂ・ワット（印度有用物産誌、五五七―八頁）によるに眞珠貝（Melagrina margaritifera）と名くる貝にして、シーロン及ビルマのメルキ叢島に産すと云へり。シーロンの産地はし、上古よりマナル灣の眞珠はその最良なるものを如意寶珠と名け唯一無二の珍寶となる上の地形の下に記せるが如し。商人、漁夫は生命を顧みず南印度より是を漁獲し、上都に赴き重價を得たり。その否運なるものはシーロン沿岸に漂着し殺害せられ、或は噉食せらるゝに至れるは史乘に明かなる所なり。現在にては何故にやその産額減少し、却てペルシャ灣のバーレン島の眞珠貝業の隆盛を見る。然れども本邦に於けるが如き養殖をなさば、恐くは昔時の寶州たらしむるも決して困難ならずと信ず。

其他水産は少許の産は各地に無きに非らず、印度洋上大小幾千の島嶼皆是れ水産の地なり。漁船の來往は將來は十分にその産額を增すべしと確信す。

礦　業

次は礦業なり。礦業は大陸なるを以て頗る多しと雖も、カナダ、濠洲、アメリカ合衆國、南米等の大陸に比するに著しく下位にあり。その理由は明かならずと雖も是を推測するに二の原因あり。一は地質極めて單純なるを以て接觸礦物の少なきによる。二は礦物の産地は人烟稀少の區域に在るを以て十分の調査を未だなさざるによる。

上古よりの史乘に徵するに印度は五金産額多く、冶金の術も甚だ發達せり。之を經典中に於て見るに金、銀、銅、鐵は勿論缺くる所なく、其他も皆豐富なりしが如し。大唐西域記によるに、若其金銀鍮石白玉火珠風土所産彌得盈積と云ひその豐富なるを說けり。最近は印度政府やゝ熱心に探究をなせしも、その以前は容易なる物の以外は放置せしが如し。印度人は上代は熱心に探究せしが如きも近年に至りては努力する所なく、又富人も容易に金錢を得る事をのみ力め、荒野山谷の中に是れを探るが如き困難を敢てするもの尠し。而して上古より既に得易きは之を得て礦脈の盡きしもの少なからず。

上の林産の下に引用せる婆羅樹の河恃多伐底河は別名を尸賴拏伐底河と云ひ、譯して有金河と云へり。この河は明かならざれども、概ねガンダク（Gandak）の本流か支流なるは必然なり。今回はこの河につき何等沙金の存在せるが如き事を全く聞かず。採取し盡せるや未だ發見せざるや不明なれども、チャンパラム縣（Champaran）及ゴラクプル縣（Gorakhpur）に金を産せる記事なし。チベット西境は有名なる産金地なれども、此に關しては印度の文獻は缺け

り。金の如き最も冒險者の心を動かす金屬にして猶如此し。況や他をや。

石　炭

現在印度の最大礦産は石炭と鐵なり。石炭はベンガル西境より東方に延長し東經八十二度の邊に及び、折れて東南にマハナデ河の流域に及ぶ。別にゴダヴァリの中下流に産す。是を詳細に記せば下の七河に分たる。(一)はゴダヴァリ河の流域、(二)はソン河の流域、(三)はオリッサ、(四)はアッサム、(五)はナルバダ河の流域、(六)はダムダ(Damuda)、(七)はラジマハル(Rajmahal)なり。此の以外にビルマには一般に散在せるも上ビルマに多し。シーロンは全く産出せず。

是の中(一)と(二)を主要とす。(三)は(二)の南下せる地域にして優良ならず。現在最大なるベンガル炭田と云ふはこの區域の東邊なり。この石炭は最優良にして、火力強く粘結性を有し、附近の鐵礦と共に有名なる製鐵用となせり。船舶用としてもカルカッタは重要なる石炭港として知らる。(一)の炭礦は外洋に移出せらるゝを開かず。量もその區域の大なるより推知するに數億トンに上るべきは必然なりと雖も、北支那の如き多量に非らざるは必然なり。然れども試錐は果して十分なるや疑なき能はず。恐く將來には必ず新炭田の以上の區域中若くはその以外にも發見すべきは當然なり。然れども地質は最も石炭を生ずるに不利なる古生層と火成岩を以て大部分を占め、北部平原は四紀層なれば共に石炭の發生すべき要素を缺けり。シーロンの如きは殆ど古生層と少許の四紀層なれば全く絶望の外なし。

印度の現在發見せる炭層はゴンドヴァナ(Gondowana)と稱するメソゾイック(中生層)なり。唯アッサムの極東北部のみ第三紀なるが如し。このゴンドヴァナ層はベルチスタンにも亦發達せり。故に少許の炭層を出せり。カシュミルの北及東には大に發達せるも、高山峻嶺五千メートル以上なるを以て、石炭有無の津を問ふ人なし。其他はカラチのランに面せる北岸と、アッサムのカシヤ高原の南側にあり。この附近は炭層を露出せり。マドラスの沿岸一帶は古生層の東側をクレクジュスと第三紀層にて蔽へるを以て、相當石炭の探究をなせしが未だ發見せず。ビルマはアラカン沿岸にはゴンドヴァナ層あるも、イラワヂ河流域及中部一帶は概ね第三紀層多し。蓋し英人は英國炭の如き眼を以て見るにより、第三紀炭の如きは劣等なりと信ぜるも、本邦及滿洲撫順皆第三紀層なり。第三紀炭にして決して石炭紀の炭層に劣るものと斷ずべからず。寧ろ第三紀に十分の探求をなすを可とす。

第三紀時代は一般に艸木繁茂し今日まで數十萬年炭化すべき原料に豐富なり。支那は必しも第三紀

州別石炭産出表　(單位トン)

州別	一九三六年	一九三七年	増加	減少
アッサム	二〇三、三九八	二四八、五六三	四五、三四五	
バルチスタン	八、〇九九	一七、四七九	九、三八〇	
ベンガル	六、六七七、八四一	六、五一七、八三〇		一四〇、〇三一
ビハール	一三、〇六、九一四	一三、八三六、七一七	一、八一九、八〇三	
中央印度	三、九一、四八八	三、三四、二九一	四、八〇三	
中央州	一、五〇七、九二	一、五〇四、一五九		三、八三
西部州委任領	八〇六、四三三	一、二四四、九八八	四三八、五五六	
ハイデラバッド	八五三、七三九	一、〇七六、三四一	二三三、三〇三	
オリッツサ	三一、〇六二	四七、一二七	一六、〇六六	
パンジャブ	一五六、八四九	一六六、六三三	九、七二三	
ラジュプタナ	三〇、一七七	三三、三九九	三、一九二	
計	三、六二〇、八二二	三、五六九、四〇九	二五六、四〇九	一四三、八四四

州別産出石炭價格表

州別	一九三六年 価格（一砂＝一三・三留比）	一九三六年 トン當り價格	一九三七年 価格（一砂＝一三・三留比）	一九三七年 トン當り價格
ラバオ	六、四八四	四、五四	一四、四六九	一四、七六
イ部	一、七四〇	一、二四	一、九五三	一、三九
ジンリデ州央	一、一三六	一、一三	一、一四七	一、一四
ユラ委央	一、一三六	一、一三	一、一四七	一、一四
計印ガダ	一、一三六	一、一三	一、一四七	一、一四
プジヘ	一、一三六	一、一三	一、一四七	一、一四
タヤツベ	一、一三六	一、一三	一、一四七	一、一四
ナプサド任	一、一三六	一、一三	一、一四七	一、一四
額州度ルンム	一、一三六	一、一三	一、一四七	一、一四
平均	一、一三六	一、一三	一、一四七	一、一四

第三紀層ならざるも、第三紀層ならば善惡共は別として炭層を有せざるの理なし。臺灣の如きも全く第三紀層なり。ビルマの炭層は將來に於て第三紀層中より採掘に堪ふる層を發見すべきは、不肖の信じて疑はざる所なりとす。

印度中最も將來發見の可能性はビルマなりとす。ビルマの地質は決して印度大陸の如く單純ならず、石炭のみならず各種の礦物皆產せざる理なしと信ず。

鐵

鐵は現在にては中央及南印度に多し。サー・トマス・ホルデッチ（印度、三三一三頁）はマドラスの附近のサレム（Salem）の近傍は丘陵の全部は赤鐵礦の最純なりと云へり。又、ランガンジ（Ranganji）はベンガルの極西にて第一の炭田の東邊にあり、炭坑の附近の鐵礦はセール（頁岩）に伴ひ印度の何れの地方よりも能く發達すと云ひ、又中央部のラテライト（赤色土）の地方は皆鐵分に富めりと云へり。

現在の製鐵業は石炭の關係上ベンガル西邊、ビハル東部一帶に行はる。他日は恐くはマドラス附近にても製鐵は擧行せらるべしと信ず。本邦の如き鐵礦にも炭礦にも無關係の地に製鐵所を起し得べしとなさば、何の處か製鐵に適せざらんや。今日まで製鐵業の印度に發達十分ならざりしは英本國より製鐵品及機械等を輸入するを便利となせしによる。海南島の如き島嶼にしても猶石碌山の如き大鐵礦の發見あり、印度大陸が今日の如き貧弱の鐵礦源に非らざるは分明なり。サー・トマス・ホルデッチの云ふが如く、變質岩中到處これを發見するの機會あるべしと確信す。

ビルマも亦此點に於ては重要なる土地なり。特にシャン地方は如何なる礦物資源を埋藏するや計るべからざるものあるべし。

鹽

次は鹽なり。鹽は上の水産の下に云ふが如く印度にては陸産なり。陸産の中最大なるは岩鹽と鹹湖なり。サー・トマス・ホルデッチ（印度、三二八―三三二頁）は海鹽の外ラジュプタナのサムバル湖(Samubar)を擧ぐ。その位地をゼイプル（Jaipur）とジョドプル（Jodhopur）の中間なりとせり。湖水は東經七十五度に正中す。この湖は鹹水にして湖鹽を採集す。この現象は印度に止まらず滿洲帝國にても、内蒙古にても到處に存在せり。然れども印度にては稀有なるが如く、相當に論議せらるゝに足る。

これに次ぐはパンジャブの西部の鹽山（Salt range）なり。此山は西方頗る高く一千五百三十メートルに及べり。この山脈中には隨處に鹽坑あり。又コハット(Kohat)にも岩鹽を産す。コハット鹽はコハット、バンヌ(Bannu)間の小村落なるバハヅルケル（Bahadurkhel）に産す。この兩所は最重要なる鹽坑にして、このコハットの鹽はアフガニスタンに國境を越えて輸送せらる。

鹽山脈の鹽坑につきてはサー・トマス・ホルデッチは世界最古の鹽坑にして、シルリアン（Silurian）より新らしからず、シルリアン系の化石を産出せりと云ひ、この鹽は殆ど無盡藏と云ふべしと記せり。又上に記せるペルシャ、バンタル・アバス附近のジェジラット・ホルムズの附近に在るキシム島の鹽につき、サー・トマス・ホルデッチは驚くべき大鹽層なるを詳細に記述せり（印度、三三一―二頁）。文長ければ省略す、就て見るべし。

如此く海鹽よりは寧ろ陸鹽を主とせり。而も政府專賣なるを以て、一般人民は十分なる供給を得難きが如し。將來はシンドのラン等に大鹽田を起し、政府の專賣たると否とを問はず、如此き政治的の問題は之を別とし、大産出をなさゞるべからず。海水の性質たるや、鹽化曹達のみならず、加里もマグネシウムもヨードも皆之を含有せり。金すら一億分の一以上を含めるは皆人の知る所なり。カッチ・ランの如き最良の條件の下に極めて廣大なる面積に製鹽業を起さゞるは全く政府の罪惡なり。將來その政府の何人たるを問はず絶對に擧げざるべからざる大事業なりとす。

岩鹽には加里を含有するを普通となせども、印度の岩鹽は之を有するや否や不明なり。サー・ジォルヂ・ワット

鹽生産額

地方別	一九三六年 生産額	一九三六年 價格（一磅＝一三・三留比）	一九三六年 價格（一磅＝一三・三留比）	一九三七年 生産額	一九三七年 價格（一磅＝一三・三留比）	一九三七年 價格（一磅＝一三・三留比）
印度	トン	留比	磅	トン	留比	磅
ベンガル	八三	五、一〇七	三八四	一一三	七、八六五	五九一
ボムベイ	四〇〇、六八二	一、八一九、六四七	一三六、八一六	四八九、七四二	二、二八六、四八二	一七一、九一六
グワリオル	一一五	五、七二六	四三〇	五五	二、六八〇	二〇二
マドラス	三四九、一九〇	一、五八三、二九三	一一九、〇四四	四二一、〇一四	二、〇八七、〇三八	一五六、九二〇
北印度	四六八、一一八	三、二九七、〇三〇	二四七、八九七	四六五、七一二	三、一七四、四八四	二三八、六八三
シンド	一三〇、〇三四	六五八、七二二	四九、五二八	一一六、三八六	五八八、八一六	四四、二七二
計	一、三四八、二二二	七、三六九、五二五	五五四、〇九九	一、四九三、〇二一	八、一四七、三六五	六一二、五八四
アデン	三五五、三九四	二、〇七一、〇一一	一五五、七一五	三五五、一六六	二、〇七〇、六一八	一五五、六八六
ビルマ	三二、二七二	四九五、五一四	三七、二五七	五三、八一三	八二四、九四三	六二、〇二六

（註）グワリオルの數字は年度期間（一九三六―三七年及一九三七―三八年）に依る

輸出國	一九三六年 輸入量	一九三六年 價格（一磅＝一三・三留比）	一九三七年 輸入量	一九三七年 價格（一磅＝一三・三留比）
英領印度	三七、〇〇〇、〇〇〇噸	三、五九〇、〇〇〇留比	四一、三七〇噸	五、四四〇、〇〇〇留比
其他諸國	二三、三七四噸	三、〇八〇、〇〇〇留比	二五、〇一七噸	三、三〇〇、〇〇〇留比
計	三七、〇四四噸	三、五九〇、〇〇〇留比	四八、三八七噸	五、四四〇、〇〇〇留比

（註）一九三六年の數字にはビルマへの輸入全部を含み、一九三七年の數字にはビルマへの輸入は同年一月乃至三月の三箇月分のみを含む

（印度有用物産誌、四八一五〇頁）は加里の原料を植物灰と、土壌中と、硫酸加里と、動物主として羊汗の毛に附着せる洗毛の際に生ずるものと、甜菜糖の滓との五種を擧ぐるも鑛産加里を云はず、別に硝酸加里（九七二一五頁）を詳記せり。サー・トマス・ホルデッチは各種の鹽坑を記せる中にも言及せず。硝石は有效肥料なるを以て直ちに是を以て施肥に充つべしと雖も、海水分解に關する諸種の鑛物も亦決して等閑視すべからず。海水蒸發の最大弱點はその水分を大量に含有するに、これが蒸發に要する熱量と器械と面積なり。この三者にして若し利益ならば、これが原料としては空氣を以てするの以外に地球上豐富なる原料あらざるべし。今シンドよりランの邊の炎熱と光線を以てせば熱量も器械も面積も問題にあらず。恐くは岩山の鹽鑛を採掘するよりも更に低廉なるべし。大東亞共榮圏中最良の製鹽地

石油及天然瓦斯

次は石油及天然瓦斯なり。ビルマを第一とす。油田はイラワヂ中流を主力とし、エナンジャウン（Yenangyaung）を第一とし此の上下流に及べり。この油井は一百年前より開けるものにして、最近は他にも有望なる油井多しと雖も皆イラワヂ流域なり。此以外にアラカンの沿岸にあり。アキャブの附近のボロンゴ（Borongo）、ラムリー（Ramri）の兩島にも鑿井し採油せりと雖も未だ多量ならず。如此くこの兩區域は竝行して南北に連なれり。イラワヂ流域は更に北上してチンドウィン河流域に存するもの、如く、その徴候を認むるも未だ採油に至らず。

將來はビルマはスマトラ、ボルネオと比肩すべき大油田たるは必然にして、或はスマトラより豐富なりと信ぜらる。背斜軸も相當長距離に延長せるもの、如く、油田面積も著しく廣大なり。特にチンドウィン流域にして果して十分採油を見るに至らば、恐くはイラン、イラクと相伍すべき大油田なるやも知り難し。要するに我帝國の石油技術者の最も努力すべき地點の隨一はビルマ油田なりとす。

大村一藏氏の「世界の油田」（三九四―九七頁）によるに、ビルマ油田は第三紀層なりとし、イラワヂの油田の列を約一百五十哩（二百四十キロ）とし、チンドウィン油田をインダウ附近となせり。而して一千九百三十九年の統計によりより七・五三八〇〇〇〇バレルを計上し、その換算を約一百萬トンなりと云へり。而も著者（大村氏）は「ビルマの油田は現在の處中央石油地帶の西部に偏し、殆ど一直線に發達して居る形を見る。仍し同地帶の幅は平均百五十哩（二四〇キロ）、延長七百哩（一一〇〇キロ）以上に達して居るから、將來大に研究の餘地のあるわけである。同時にアラ

カン石油地帯に就ても其餘地ありと著者（大村氏）は觀て居る。」と論述せり。このアラカン石油地帯は上に云へるアキャブ近傍を指すものにして、その系統はイラワヂ河石油帶とは全然別にして、印度に連續せるものなりと大村氏は云へり。以上の大村氏の論より之を推斷するに、スマトラの最大油田たるパレムバン、ジャンビを合し一百五十マイル（二四〇キロ）四方に過ぎざるより是を推さば、ビルマの油田はイラワヂのみにて約その五倍の面積を有するものと知るべし。

アッサム油田は大村一藏氏の「世界の油田」（三四五頁）によるに、「印度油田地帶はヒマラヤ山脈の南麓に沿ふて起伏して居る丘陵地帶であるが、現在では不思議にもヒマラヤ山脈の兩端近くだけに各一箇宛の油田地帶が開かれて居る。東の方はアッサム側にある關係からアッサム油田と呼ばれ、西部のものはパンジャブ州にある爲めパンジャブ油田と呼ばれて居る。昨今の出油の割合は次の様である。アッサム州一九三七年一・八五九〇〇〇バレル、一九三八年一・八九一〇〇〇バレル、パンジャブ一九三七年三〇三〇〇〇バレル、一九三八年五九七〇〇〇バレル」と記せり。七バレルを約一トンと換算せば、アッサムは二七〇〇〇〇トン、パンジャブは三五〇〇〇トンなり。極めて少量なりと云ふべし。然れ共この油帶は極東北より極西北まで延長一千七百英里（二七〇〇キロ）なるを以て、將來に油井を發見せば恐くは世界に於ける最長の地域なりと知るべし。ビルマの油帶の二倍半に及べるは特に注目すべき點なり。

是れが地質につきては大村氏は言及せずと雖も、印度地質圖によるに、極北西のインヅス河の流域より極北東のブラマプトラ河の南下せる地域まで、ヒマラヤ山麓に沿へる狹長なる第三紀層あり、石油はこの第三紀層に含有せるならんと推定す。石油は必しも第三紀層にのみ存するものに非ざるも、ビルマの油田も亦東印度諸島も概ね第三紀層に在り。故にこの第三紀層中に油田の存するは當然なり。恐くはアジア南部は第三紀の時代に石油を作るべき種々の條件に適應せしならんか。

アッサムは極東北隅のマクム（Makum）附近にして、ビルマと境をなせるパトコイ山脈（Patkoi）の北面にてフカウン平原よりアッサムに超ゆべき山道のアッサム側なり。附近には石炭も頗る多し。卽ち礦物資源の寶庫なり。パンジャブはラワルピンデ（Rawalpindi）よりアタック（Attack）の邊なり。是の以外にもベルチスタン一帶に油徵ありと傳へらる。現にペルシャ灣中のバーレン島（Bahrēn）には有名なる大油田を開けり。

如此く見來れば、印度に於ける油田の將來は洋々たるものにして、その産地も決して今日の如き少數に止まらず、インヅス右岸の三紀層の如き、北はパンジャブに列なり南はカラッチに及べる幅員も廣き大區域なり。

・玄奘三藏の大唐西域記によるに、尼波國都城東南有小池以人火投之水卽焰起更投餘物亦變爲火と記せり。此文を見るに明かに天然瓦斯なるは疑を容れず。而して果してメタン瓦斯なるや石油瓦斯なるや分明ならずと雖も、恐くはヒマラヤ山麓の石油地帶の瓦斯に屬するものならん。都城と云ふは唐時は今のカトマンヅ（Khatmandhu）に接近せるパタン（Patan）なり。現在の印度地質圖はこの一帶は皆古生層となすも、ネパール國の地質測量は未だ十分ならざるにより或は第三紀を露出せるやも計られず。又カングラ縣（Kangra）のパラムプル（Palampur）の東九マイル（約一四キロ）にバイジュナット（Baijnath）の印度教寺院あり、この寺院には天然瓦斯の火上古より不滅なりと云ひ、毎秋大祭には全印度より三萬の巡拜者ありと云ふ。如此きは決してメタン瓦斯に非らず、明かに石油瓦斯なり。

如此くヒマラヤ山麓地帶は所々に瓦斯の發生せる所を存せるが如し。英國が何故に印度の油源に努力せざりしや不明なれども、恐くは他の領土若くは領土に類する地帶に遙に有利なる油田を存せるにより閑却せしならんか。將來に大に調査開發を計畫すべきは、ビルマ以外はこのヒマラヤ山麓なりとす。

雲　母

次は雲母なり。印度の雲母は世界に冠たる品質と産額を有す。その主要地帯はハザリバグ縣（Hazaribagh）一帶にして、ガヤ縣の南部よりハザリバグ一帶は皆產地にして全世界產額の半に達し、政治年鑑（一二八頁）によるに、一九三七年には二九七三四二ハンドレット・ウェイト（約三〇〇〇トン）を輸出せり。その價格も一〇七九七〇二英ポンドなり。雲母の需用は日を逐ひて增進するは皆人の知る所にして、印度にこの大產地を有するは共榮圈の爲め祝賀に堪へず。

マンガン

次はマンガンなり。マンガンは中央印度一帶に產し、此外マイソル、マドラス等の地方に產す。中央印度及ヴィザガパタム（Vizagapatam）は最も有名なり。東ガート山脈より中央高原に至る一帶にこの礦區あり。最近ヴィザガパタムの附近より中央州のライプル（Raipur）に達する鐵道を開通せしにより一層この運搬に容易ならしむ。ソヴィエト・ロシヤは印度と相拮抗するマンガン產地なり。この兩國は世界に於ける最大產地とす。支那是に次げり。

中央印度の礦石は純分も高く五〇―五四に及べり。その產額は政治年鑑（一二八頁）によるに一〇五一五九四トンを一九三七年に輸出せり。その價格は三二二九五五四英ポンドなり。印度製鐵業の發達と共に多少は國內需用も增加すべきは必然なれ共、製鐵業も僅々二、三百萬トン程度なればマンガン消費量も大ならず。

金

次は金なり。金は印度上代より夙に是を知り七寶の第一とし、王侯、貴人、富商皆用ひざるなし。然れ共その大部分は沙金なりしが如し。沙金はその採取の容易なると、冶金の必要なきと、純分の高き等種々の便利より、上古は印度のみならず何れの國にても皆沙金を主要なる產金となせり。印度の如きは上古より冶金、鍊金の術は他の國よりも發達せりと雖も、今日の如く一百萬分五に至るまで是を捕捉するが如きに至らず。今日にてはマイソル王國のコラル礦山（Kolar）を第一とす。岩金なり。其他ハイデラバッド王國、マドラス州下、ボムベイ州の東南等皆マイソル高原の周圍なり。

沙金はビルマ、イラワヂの上流に多し。支那にてはイラワヂを大金沙江と呼べり。其他中央印度の東部も亦所々に沙金淘取を行へり。カシュミルの東方ラダク地方はチベットの西境と共に產金地帶なるも、地高く寒く人の訪ふもの少なきを以て、未だ產金地として喧稱せらるゝに至らず。アッサムの東北隅の諸川の谿流も、その西康省內に入りたる地方より產金す。皆沙金なり。卽ちチベットは產金地方なるを以て、東西とも是に連なれる地方は大小となく皆產せざるなし。南部に於けるマイソル周圍の岩金とチベット周圍の沙金は印度の產金地帶なるを知るべし。

ビルマの東部シャン地方の中、その東邊のワ（Wa）地方は支那とビルマに連亙し產金地として稱せらる。將來に探究すべき餘地あり。現在にてはビルマは沙金を主要となせども、將來は岩金も十分シャン地方に於て發見せらるべきは斷言を憚らず。

然れども印度は濠洲、カナダ、北米合衆國の如き大產金國には非らず。況や南阿をや。悠々五千年之を用ひて盡き

ざるより見るに、支那に比し遙に上位に在るは分明なり。政治年鑑（一二八頁）によるに三三〇七四三・九オンス、價格二二八五四〇四英ポンドを一九三七年に出せり。

寶玉類（ルビー、サファヤ、翡翠、琥珀、金剛石）

其他の礦物は特に重要なるもの無しと雖も、印度は上代より寶玉を愛用せる習慣あり。是を馴致せしはその國土に寶玉を産せしに由る。我帝國には寶玉の産するもの殆どなく、從て我國民中、別して大和民族は寶玉に對して概ね冷淡なり。然れども支那人はやゝ是を喜び、南方の各民族は之を賞美するは我國民の想像を超ゆ。印度の如きはその第一なり。金剛石の如きは世界に於て最初より之を發見使用せしは印度民族なり。經典中にもその堅牢の點と、その珍玉たるの點と共に是を以て第一となせり。大玉の寶冠は是なくば可ならず、其他の寶玉も亦然り。是も國中に産するを以てなり。

大唐西域記によるに、印度本土中寶玉の産を記するは加濕彌羅國と屈露多國との下に火珠を産すと云ふ。火珠と云ふ文字より解釋せば赤色の眞珠なり。河川中に珠貝を産せざるに非らざるも、カシュミルは河澤多く貝類も亦少なからざるべしと雖も、屈露多は今のクル（Kulu）なれば山河の急瀬に到底珠母貝を産すべからず。故に赤色の寶玉たるルビーを指せるならん。ルビーはサファキアと共に現在カシュミル、クルの中間なるザンスカル（Zanskar）の高山の谿谷中に産せり。恐くは是を指せるならん。この地方はカシュミルに屬し、カシュミル政府は王侯の禁採區域となし庶民の採取を許さず。故に人是を知らず。

ビルマとシーロンの兩所は有名なるルビーの産地なり。ビルマ・ルビーはマンダレの北方の山地なり。シーロンはラトナプラ（Ratnapura）なり。ラトナとは寶の義、プラとは市邑の義なり。是の地は上古より寶玉を産するを以てラトナプラの名あり。

ビルマは翡翠石を産す。この石は玉と名けし支那の古寶玉なり。明時代より特にその濃綠色を賞美するに至れり。我邦人は皆是の玉石を賞用せり。この礦區はイラワヂ上流モガウン（Mogaung）の西北方にしてフカウン平原に通ずる一帶に産す。

これよりフカウン平原には琥珀をも産せり。シーロンのラトナプラはルビー、サファキアの外幾多の寶玉を産し、ラトナプラの名を辱かしめず。

金剛石は最近は殆ど産せずと雖も、その産地はハイデラバッドとマイソルの中間よりマドラスに及べる一帶は往時より是れが産地と稱せらる。大唐西域記によるに、この地方を遊歴せし玄奘三藏も更に言及せず。恐くは太唐の當時に發見せられざりしならん。經典中に散見するに上古よりその産出ありしは分明なり。

サー・トマス・ホルデッチ（印度、三四〇頁）によるに、印度に於ける金剛石の産地は三所あり。一はキスタナ、ゴダヴァリ河流域、二はゴタワリ、マハナデ川流域、三はブンデルカンド（Bundelkand）のパンナ（Panna）なりと云へり。第一、第二は地質は下部のヴィンドヤ（Vindhya）等にして、第三は蠻岩（Conglomerate）の中に包含せられ、南阿の金剛石産地と同じと云へり。パンナはアラハバッドの西南一百八十マイル（三二〇キロ）の地なりとす。是を以て見るに、上代は第一、第二共やゝ未開區域にて、第三はコサムビ國（Kosambi）の領域にして、世尊の當時も十六大國の下にて繁盛せし地方なれば、恐くは上古の金剛石は此地方より産出せられしならんか。然れども玄奘三藏は憍賞彌國の下に何等言及せず。

黒鉛、錫、ウルフォラム礦

次は黒鉛（Plumbago）なり。シーロンの特産なり。産地は一百六十箇所に及べるも、概ね中央山脈の北邊なるが如し。その産額は一一七八三トンなり。この礦物は世界に於ける重要産地の一としてシーロン推稱せらる。

次は錫なり。錫はマライ半島を大産地として、その北端に連接せる下ビルマ地方なり。之に次ぎウルフォラム礦（タングステン）も此地方に産す。この地方は狹小なりと雖も各種の礦物を埋藏し、海岸に近く運搬に至便なるを以て先づ開發せらるべし。

銅、銀

次は銅なり。銅は印度にて多く産出せずと雖も各地に散點せり。ビハル、オリッサの一帶、ヒマラヤの外側、ラジュプタナ等の小銅礦各地に在りと雖も皆大産出をなさず。然れ共上代より是れが利用は極めて多し。現在にてはビルマを最大とす。シャン地方は銅礦到處に産出す。政治年鑑（一二八頁）は銅礦石を三七一五七二一トン産出すと云ふ。其他鉛、亞鉛も亦産出せりと雖も、現在に於て特に推稱すべき大礦區なし。銀も亦然り。上古より之を使用するも産額は現在微々たるのみ。

硝　石

次は硝石なり。硝石に關してはサー・ジョルヂ・ワット（印度有用物産誌、九七二頁）の云ふ所によれば、ホランド氏の説を引用し、硝石の發生すべき原因は一は窒素有機物の供給、二はこれを發生せしむべき氣候の好條件、三は加里の存在、四は表土に硝酸加里を隆盛ならしむべき氣象條件等なり。是に最も適合せる地方、卽ちビハル省の中ガヤ（Gaya）、チルフット（Tilhut）、サラン（Saran）、チャムパラン（Champaran）を最となせり。

是の地方は人口の密度極めて高く、每平方英里に五百人（一キロ平均約二百人）にして、農業に從事し家畜多く、而も氣溫は平均七十八度より八十度を超え、日較差も八度を過ぎず。此の條件は特別に硝石の發生に好條件を與ふと云へり。而して民衆の燃料は木薪及牛糞を用ひ、加里資源なるを以て、是の地方よりは年產二萬トンの硝石を產出すと云ひ、又其他の地方も是を產出せり。是を以て見るに、智利硝石の如く礦物をなすに非らず、農家の土壤よくその成因をなし、氣候の好條件により之を作るによる。

其他の地方も亦人口稠密なる地方なり。人口稠密のみの理由にては是を作成するに便ならず、他の天然條件を具備せざるべからず。ジャバ東部、中部はビハルより遙に稠密なれ共、降雨の條件はビハルの如く是が成因に適合せず。故に多少は存すべきも特に記すべきに至らず。是の地は古のマガダ及ベイシャリ兩國區域の地なり。兩國の强大を稱へしはこの天然資源の土壤を消耗せしめざりしによる。

石膏、フユラー土、耐火粘土、一般粘土

次は石膏なり。是れが用途は相當に廣汎なり。印度には隨處に之を產出し、政治年鑑（三八頁）には四六〇九〇トンの產額を記せり。然れ共決して如此き少額に止まるものに非らず。その埋藏は莫大量なり。

マドラス州、ボムベイ州皆是を產す。カッチにも最上質の物を產す。ラジュプタナのジョドプル（Jodhpur）地方

にも大産地あり。ビカナル（Bikanar）、インヅス河の右岸地方にも、鹽山（上の陸鹽の下に記せり）地方にも岩鹽と共に産出す。其他隨處に出づるも、その用途としては肥料の補助となすと、家屋の塗料及窓硝子の粘着劑に供せり。これが最良の物はアラバスター（Alabaster）と稱し裝飾用具とす。中部ヒマラヤのガルワル（Garhwal）地方に產し、鉢、コップ、皿等を作り、暗綠色をなし、北印度一帶の富人の賞用する所となる。歐洲にては照明具を作れり。

次にフュラー土（Fuller's earth）は一種の酸性白土なり。印度にてはこれが用途は食用又は醫藥なり。サー・ジョルヂ・ワット（印度有用物產誌、三三九―三三〇頁）によるに、淡黃色の土は醫藥用として食せられ、又頭髮の洗滌にも衣類の洗濯用にも使用せらる。又是等の布帛の重量を增加する爲にも少しく用ふ。その成分は珪酸なり。產地はベンガル、中央州及パンジャブ、ラジプタナ、インヅス河中部のデラ・イスマル・カン地方なりとす。本邦にては酸性白土を油類の精製に用ふるは皆人の知る所なりとす。

次は耐火粘土なり。サー・ジョルヂ・ワット（印度有用物產誌、三三〇頁）によるに、成分は上のフュラー土と相類せり。この最なるは石灰、鐵及アルカリ性の土を含まざるものを可とす。如上のものは硝子を製するに當り珪酸の溶解を助成すべきものなればなり。歐洲にては石炭層の下部に發見せらるゝも、印度にても石炭田に多く見らる。產地はジュバルプル（Jubbalpur）、アッサムのジョワイ（Jowai）及チャンダ（Chanda）、ウマリヤ（Umaria）、ゴンドワナ（Gondwana）の石炭坑の地方に於て發見せらる。

一般粘土も亦重要なる生產品にして陶土としてその用あり。政治年鑑（一二八頁）は一九三七年度產額を三三〇〇〇七トンと計上せり。是れが最上なるは高嶺土（カオリン）にして、硬質陶器の原料として使用せらるゝも、一般粗陶器には必しも如此き良質ならざるも可なり。支那と異り印度は陶器に硬質の物なく概ね粗陶なり。上代より是を作るも、決して支那と比較すべき優良品を見ず。近時は陶器、土管等其他工業用品の原料としてこれが產業は極めて重要なりとす。

印度礦業の將來

以上は概ね印度の礦物を論ぜり。その詳細は此紙上に於て盡す能はず。蓋し上に數ゝ云ふが如く印度は地質の單純より見るに、その礦物資源は決して農產物の如く豐富ならずと雖も、大國なるを以てその種類は殆ど之を網羅せり。將來に十分の探檢調査を要するはビルマの全部なり。特にシャン地方を主とす。此地方は今日まで全く未調査の區域にして地質も不明なり。恐くは驚くべき多額の礦物を發見すべし。是に次げるはビルマに比連せるアッサムなり。同じく未調査の區域頗る多し。中央印度もその東部は全く森林荒艸の中に埋沒せり。意外なる發見をなすべし。我邦の如きは殆ど地質上の調査の十分なりし區域すら、支那事變以來礦物資源を要する事急なりしを以て、所々に意外なる發見をなせしは皆人の知る所なり。

從來英人の印度調査の如きは極めてその重要なるものと、近づき易き地方のみに礦物探査をなせしに過ぎず。故にその大部分は全く放棄せらるゝを見る。カシュミル地方の如きは古書に徵するも礦物資源に富める地方なるは疑を容れざるも、山高く地險にして登攀に易からざるより放棄せらる。ベルチスタンも亦人烟稀少の故に之を訪ふ人少し。今日印度の礦業を論ずるはその一端を見て全般を論ずるは極めて輕率と云ふべく、不肖の此書も十年を出でずして大改正を施さゞるべからずと斷言す。如上の礦業は姑く之を以て筆を止め、別表に政治年鑑（一二八頁）により一九三六年、三七年の產額を記載すべし。

鑛産物産出高表

（印度生産統計表の一九三六年及三七年に適用し得る鑛物價格總計）

（單位磅）

種別	一九三六年	一九三七年	增加	減少	變化百分比
モ重石	四、六九、二五六	四、六九、二五六			
粘土	一、二四、四三一	一、二四、四三一			
耐火	二、二四、四三一	二、二四、四三一			
ク礬土					
硝石	六、六二、九四五	六、六二、九四五			
チ鐵鑛	一、〇二、七四〇	一、〇二、七四〇			
銅鑛	三、二五、四三一	三、二五、四三一			
鹽	三、四四、〇九五	三、四四、〇九五			
建石	一、二六、四三一	一、二六、四三一			
雲母	三、四四、〇九五	三、四四、〇九五			
マ石	一、二六、四三一	一、二六、四三一			
石炭	四、六九、二五六	四、六九、二五六			
石灰石	一、二四、四三一	一、二四、四三一			
ト石	三、二五、四三一	三、二五、四三一			
土料	三、四四、〇九五	三、四四、〇九五			
鑛石	一、二六、四三一	一、二六、四三一			
鐵鑛	四、六九、二五六	四、六九、二五六			
石炭	一、二四、四三一	一、二四、四三一			
ペ石	四、六九、二五六	四、六九、二五六			
計	三、二五、四三一	三、二五、四三一			
鐵	三、四四、〇九五	三、四四、〇九五			
イ	一、二六、四三一	一、二六、四三一			
鑛	四、六九、二五六	四、六九、二五六			
村	一、二四、四三一	一、二四、四三一			
鐵	三、四四、〇九五	三、四四、〇九五			
鑛	一、二六、四三一	一、二六、四三一			
石	四、六九、二五六	四、六九、二五六			
炭	一、二四、四三一	一、二四、四三一			
石	四、六九、二五六	四、六九、二五六			
灰石	一、二四、四三一	一、二四、四三一			
雲母	三、四四、〇九五	三、四四、〇九五			
石	一、二六、四三一	一、二六、四三一			
油母	三、四四、〇九五	三、四四、〇九五			
料	一、二六、四三一	一、二六、四三一			
土	三、四四、〇九五	三、四四、〇九五			
ト	一、二六、四三一	一、二六、四三一			
石	四、六九、二五六	四、六九、二五六			
灰石	一、二四、四三一	一、二四、四三一			
建石	一、二六、四三一	一、二六、四三一			
鑛	四、六九、二五六	四、六九、二五六			
玉	三、四四、〇九五	三、四四、〇九五			
ト	一、二六、四三一	一、二六、四三一			
石	四、六九、二五六	四、六九、二五六			
石	一、二四、四三一	一、二四、四三一			
灰石	三、四四、〇九五	三、四四、〇九五			
ト	一、二六、四三一	一、二六、四三一			
鉛	四、六九、二五六	四、六九、二五六			
カ	一、二四、四三一	一、二四、四三一			
石	三、四四、〇九五	三、四四、〇九五			
ト	一、二六、四三一	一、二六、四三一			
鑛	四、六九、二五六	四、六九、二五六			
イ	一、二四、四三一	一、二四、四三一			
ソ	三、四四、〇九五	三、四四、〇九五			
ド	一、二六、四三一	一、二六、四三一			
ト	四、六九、二五六	四、六九、二五六			
止	一、二四、四三一	一、二四、四三一			
石	三、四四、〇九五	三、四四、〇九五			
帶	一、二六、四三一	一、二六、四三一			
曹	四、六九、二五六	四、六九、二五六			
タ	一、二四、四三一	一、二四、四三一			
青	三、四四、〇九五	三、四四、〇九五			
ベ	一、二六、四三一	一、二六、四三一			
石	四、六九、二五六	四、六九、二五六			
粉	一、二四、四三一	一、二四、四三一			
雲母	三、四四、〇九五	三、四四、〇九五			
石	一、二六、四三一	一、二六、四三一			
灰石	四、六九、二五六	四、六九、二五六			
柱	一、二四、四三一	一、二四、四三一			
ベ	三、四四、〇九五	三、四四、〇九五			
ル	一、二六、四三一	一、二六、四三一			
チ	四、六九、二五六	四、六九、二五六			
ヨ	一、二四、四三一	一、二四、四三一			
サ	三、四四、〇九五	三、四四、〇九五			
イ	一、二六、四三一	一、二六、四三一			
ソ	四、六九、二五六	四、六九、二五六			
イ	一、二四、四三一	一、二四、四三一			
ト	三、四四、〇九五	三、四四、〇九五			
土	一、二六、四三一	一、二六、四三一			
帶	四、六九、二五六	四、六九、二五六			
合計	一、二四、四三一	一、二四、四三一			
	三、四四、〇九五	三、四四、〇九五			
	一、二六、四三一	一、二六、四三一			
	四、六九、二五六	四、六九、二五六			

礦山統計表

年次	礦山數	勞働者使用一日平均數			
		坑内作業		地上勞働	
		男子	女子	子供	總計
一九三〇年	八、一四八	一、二三五、四二五	二五四、九〇五	三七、九七二	一、五二八、三〇二
一九三四年	八、六五八	一、二四八、〇〇九	二二〇、八六〇	一八、三六二	一、四八七、二三一
一九三五年	八、八三一	一、三六〇、一三一	二三五、三四四	一五、四五七	一、六一〇、九三二
一九三六年	九、三二三	一、四〇〇、二一〇	二三九、八七五	一二、〇六二	一、六五二、一四七

工　業

紡　績　業

次は工業なり。工業は輕工業にして、重工業は極めて少なし。輕工業の中第一は紡績業なり。印度の地は棉花を産する事多大なるに拘らず、往時は舊式紡績のみにして、器械紡績は全く之を缺き、織布は盡く英國の輸入に待てり。

而して我帝國低廉製品を以て之と競爭するや、關稅障壁等により英國政府は之を防遏せんと力めたるも、英國製品の高價なるは終に我製品の低價と戰ひ之に敗る。然れども印度人の自國に於ける企業精神は如上の時代を歷つゝ自然に隆起し、今日の如き隆盛をなすに至れり。政治年鑑（一二八頁）には一九三七年に三百五十五の工場を計上せり。錘數は九五七八〇〇〇、織機は一九五〇〇〇に上れり。然れ共これを以て全印度四億に近き民衆の被服の全部を滿すに足らざるは分明なれば、依然として大量の綿布類を輸入せり。

將來印度に於て工業の第一はこの棉織工業にして、恐くは數倍し十數倍するも十分と云ふべからず。特殊の綿布は暫く之を輸入に待つも、一般の綿布の印度產棉を以て之を製すべきは理の當然なり。今日にては印度棉花は品質最良と云ふべからざるも、他日エヂプト棉、海島棉等優良種を栽培するに成功せば十分にこの目的に到達すべく、今日の如く棉花を輸出し綿布を輸入するが如き愚は明日に於て期すべからず。

我邦の紡績業者も此點に十分留意して、自ら進んで印度の爲め印度內地に紡績業を起し、世界無比の紡績技術を以て印度人を指導し、この大目的を達成せしむべき義務あり。印度を以て自己製品の市場となすが如き近視眼は、英人の印度に失敗せし歷史を再往するものにして、如此き紡績業者は我帝國內に於ても存在困難なる者なり。況や大東亞共榮の大義に於てをや。

紡績業統計

年（六月三十日ヲ以テ）	工場數	紡錘數	織機數	雇一日平均職工者數	消費棉花 ウンドレッド	消費棉花 トン	棉花概量 三九三封度梱
一九一九年	四	九、一四〇	一、五〇三	三一〇	九、九〇〇	一、七四〇	三、三七四
一九二〇年	五	九、三四〇	一、五四一	三五〇	一一、三〇〇	二、一四〇	三、八二〇
一九二一年	四	一〇、〇〇〇	一、六三一	四〇〇	一〇、八〇〇	二、〇四〇	四、一六〇
一九二二年	四	一〇、〇〇〇	一、六三一	四〇〇	一〇、八〇〇	二、〇四〇	四、一六〇
一九二三年	四	一〇、〇〇〇	一、六三一	四〇〇	一〇、八〇〇	二、〇四〇	四、一六〇
一九二四年	四	一〇、〇〇〇	一、六三一	四〇〇	一〇、八〇〇	二、〇四〇	四、一六〇
一九二五年	四	一〇、〇〇〇	一、六三一	四〇〇	一〇、八〇〇	二、〇四〇	四、一六〇
一九二六年	四	一〇、〇〇〇	一、六三一	四〇〇	一〇、八〇〇	二、〇四〇	四、一六〇

州別綿絲産出高表（單位封度）

英領印度別州	一九三四—三五年	一九三五—三六年	一九三六—三七年	一九三七—三八年
マドラス	三五〇、四四〇、五〇〇	三五〇、八〇〇、四〇〇	四三七、一四〇、〇〇〇	四六七、一〇〇、〇〇〇
ボムベイ	五九〇、〇〇〇、〇〇〇	五九〇、〇〇〇、〇〇〇	五九〇、〇〇〇、〇〇〇	五九〇、〇〇〇、〇〇〇
ベンガル	一〇五、〇〇〇、〇〇〇	一三五、〇〇〇、〇〇〇	一四〇、〇〇〇、〇〇〇	一四〇、〇〇〇、〇〇〇
ユナイテッド、プロヴィンス	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇
パンジャブ	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇
ビハール、アンド、オリッサ	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇
セントラル、プロヴィンス、アンド、ベラール	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇
アッサム	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇
ノースウェスト、フロンティア、プロヴィンス	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇
ブリティッシュ、バルチスタン	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇
デリー	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇
アジメール、メルワラ	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇
合計	一、一四〇、四四〇、五〇〇	一、一八〇、八〇〇、四〇〇	一、四三七、一四〇、〇〇〇	一、四六七、一〇〇、〇〇〇
外印度諸王國ノ計	四〇〇、〇〇〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇、〇〇〇
總計	一、五四〇、四四〇、五〇〇	一、五八〇、八〇〇、四〇〇	一、八三七、一四〇、〇〇〇	一、八六七、一〇〇、〇〇〇

（註）印度藩王國內の州名下の如し。インド、マイソル、バロダ、ナンドゴーン、バルナガル、ハイデラバッド、ラジコット、コチン、トラバンコール、キシアンガル、キャンベイ、コルハプール、ウジャイン）、グワリオール（ウジャイン）、トラバンコール

右の中、トラバンコールの數字は一九三四年十月以來報告されつゝあるものなり

種類別綿製品産出高表

種類		一九三三―三四年	一九三四―三五年	一九三五―三六年	一九三六―三七年	一九三七―三八年
半白及晒反物	ポンド	四九五、七九四、七九四	五七〇、七三、三〇〇	五八七、九三一、九三六	六〇四、五三五、七一八	六六七、一八四、九五五
	ヤード	二、三六四、九四四、八九九	二、六四一、六五四、〇六五	二、七五二、四九一、九二八	二、七六一、七六五、四三二	三、一九〇、六四七、三九二
染色反物	ポンド	一三七、六一〇、四九六	一四七、四六六、一四〇	一五三、八七九、八九六	一六五、六三三、一一三	一六九、九一三、〇四〇
	ヤード	六八〇、〇五六、八二八	七五五、八〇一、九八二	七九七、八七八、九八五	八〇三、三一六、六三七	八九三、六二八、九七一
半白及染色物に非ざる反物	ポンド	三、三四一、九八三	三、七〇三、七三七	三、七四〇、三三六	五、一四四、七三〇	六、一五八、二五七
	ヤード	八四一、七六二	九三〇、五三三	一、〇九一、二五〇	一、一八八、一三九	一、五一七、九五八
メリヤス類	ポンド	三、三四〇、三三六	四、七八四、四三五	八、二七七、四七四	六、四六六、八〇九	七、四九六、〇八七
	ヤード	七四五、三九一	一、四八一、七八	一、六四二、三四八	二、〇八五、六五四	二、四四五、六一九
雑	ポンド	四、八六四、二三	六、二〇八、三三〇	五、六七三、四四八	五、七七七、六五六	六、〇三、一一〇
絹或は毛と混織の木綿類	ポンド	一、八五九、二四	三、八三〇、二六五	四、六七六、一五二	五、九二八、〇一六	八、一五五、六〇三
	ヤード	六四五、八六〇、八五五	七三九七、六四七、〇七	七六一、五五二、〇三〇	七八二、三五、八八一	八六四、二〇五、〇四一
合計	ポンド	二、九四五、〇五一、七二七	三、三九七、四五六、〇四六	三、五七一、二五〇、九〇三	三、五七一、九八七、〇九九	四、〇八四、二九六、三六三
	ヤード	一、五七、二五二	二、四二〇、三三一	二、九三三、五九八	三、二七三、七九三	三、九六三、九七七

（註）一九三七―三八年の數字中にはビルマを含まず

種目		工場生産高 一九三五―三六年	工場生産高 一九三六―三七年	工場生産高 一九三七―三八年	輸出高 一九三五―三六年	輸出高 一九三六―三七年	輸出高 一九三七―三八年
半白及晒反物		八四二、八	九〇〇、七	一、〇八四、八	四、二	八、八	二一、八
金巾及上等綿布		五九、五	六五、九	六六、九	一、〇	一、五	五、四
チヤダース		一、二四〇、五	一、一一七、七	一、二一五、四	—	〇、一	〇、一
綿絨毯		一五二、一	一七〇、五	一九一、三	一、〇	一、三	一、八
天竺（家庭用及敷布類）		一一八、九	一三〇、六	一五三、〇	三九、三	六六、八	七六、九
綾織類		三四九、七	三七、四	四七九、三	四五、五	七八、五	一〇六、〇
其他		二、七三、五	二、七六一、八	三、一九〇、七	九六、二	一一二、四	一三五、二
計		二、七九、九	三、一七、九	三、四九三、六	九六、二	一一二、四	一三五、二
染色反物		七九七、九	八一〇、二	九三、二	一四一、七	一九〇、九	二四一、二
總計		三、五七一、四	三、九二七、八	四、〇八四、三	一四一、七	一九〇、九	二四一、二

種類別綿絲紡出高表（單位封度）

種類	一九三三—三四年	一九三四—三五年	一九三五—三六年	一九三六—三七年	一九三七—三八年
一番—十番	四九、七〇〇、五四〇	四二、七二五、一二〇	三九、九二五、三六〇	四一、七九三、四七五	三八、四八九、三三〇
十一番—二十番	一三、〇九四、〇八七	九二、七一四、八四〇	九七、二〇八、三八〇	一〇一、九五五、七九三	一〇六、六四三、九九〇
二十一番—三十番	九七、〇五〇、〇八三	七四、〇六〇、二六八	八三、四〇四、一八〇	七七、三八九、三三六	一〇二、〇六一、五五四
三十一番—四十番	三一、五九〇、五五三	二二、四三一、二六一	三〇、一九〇、一二三	三七、八九三、二四三	五四、一九〇、六七八
四十番以上	一三、九〇四、二五五	一〇、八〇一、九一一	一三、六六六、九二八	三〇、六九九、九七〇	三〇、四一〇、九九七
屑其他	五七三、三四八	九二四、八七七	一、〇〇三、〇四〇	八三五、五六六	五〇四、七五五
計	三二、九三一、八六三	二四二、六四七、七九九	二六五、三八七、八五一	二七六、六九六、〇七七	三三〇、六〇一、三四四

（註）一九三七—三八年の數字中にはビルマを含まず

黄麻布工業

次は黄麻布工業なり。この工業は政治年鑑（一二八頁）によるに一〇四工場を算せり。上の農産の下に記せるが如く黄麻は世界中印度に及ぶ地なし。是れが麻布は又他の企及を許さず。これが工業の生ずるは當然なりとす。

黄麻はその用袋を第一とす。布よりも袋なり。故に綿布の如くその用途廣汎ならず。然れども印度四億の用に非らず、全世界の用なり。その販路は極めて廣大なり。決して生産過剰ならず。唯その質に於てやゝ粗なり。更に是れを精製し細線を作り得ば粉袋に充つる事も不可ならず。現在粉袋は皆綿布なり。麥粉の如きは是を綿袋に入る。若し麻袋にして是れに代らば更に廣大の需用を生ずる。

印度は現在にて混織の如きは未だ發達せず、我帝國の織布は殆ど混織せざるなし。故に將來は綿、麻の混織も生ずべく、又麻の中も黄麻のみならずサム（Sum）の如き、アムバリ（Amulbari）の如きも亦混織の必要なきに非らず。一般に織維として棉と麻は印度の大宗なりと雖も、是を各別に存置するは愚の至なり。其他被服たると工業用たると、紡と織とを以てするものは皆同一なり。絹布の如きも畢竟高價なる紡織品に過ぎず。

黄麻布の用途は上に記するが如く全世界に供給せるにより、その數量は莫大なり。政治年鑑（一三二頁）によるに、

黄麻織維製品生産高表

年度	ガンニー袋（單位百萬箇）	ガンニー布（單位百萬碼）	價格（單位十萬留比）
一九三〇—三一年	四三四、〇	一、二七〇、九	三、一四八、八
一九三一—三二年	三八八、五	一、〇二一、〇	二、一三八、六
一九三二—三三年	四一五、〇	一、〇一一、七	二、一三九、七
一九三三—三四年	四〇一、六	一、〇五二、五	二、一一〇、五
一九三四—三五年	四二二、九	一、〇六三、四	二、一二四、五
一九三五—三六年	四五八、九	一、一一八、三	二、三二五、一

黄麻の原料のマミー一三三九六七一八〇ルピー、織布とせるもの二六三六一一三七三ルピーなり。之を合せば三九六五七八四五三ルピーなり。殆ど四億ルピーに近し。然れ共將來は更に發達すべきは論を俟たず。若夫れ種々加工をなさば、我邦の綿布業の如く七億圓を超えしを見るに、又この麻布業も五億ルピーを目標とするは自然の歸趨なり。是れが產業は同じく我邦の業者は未だ多しと云ふべからず、將來は進んで是が企業をなし、印度人士に敎ふるに混織等種々の新發明を以てし、上の綿布の如く共榮の大義に

依存し行動せざるべからず。

紡績業及黄麻布工業の附屬工業

上の兩工業に附屬せる工業として、棉花の子實を除くと、是を壓搾し運搬に便ならしむると、麻皮を壓搾し運搬に便ならしむる工業あり。この脫實は相當に工程の煩あるも、是を除き棉實を搾油原料たらしむ。壓搾は單に運搬に便ならしむる爲にして簡易工業なり。棉作地一帶に上の脫實と壓搾の工場多く、黄麻の産地に麻皮の壓搾工場あり。皆原料産地に接近せずば工場を起し難し。

製革、タンニン、搾油、烟艸、ラック製造工業

鞣皮工場も相當に多し。製革事業一般に行はる。

タンニン原料は印度は必しも豐富ならずと雖も、アカシア屬（Acasia）を主とし Terminalia 屬等を主となせる如し。印度は熱帶なるを以て我邦及支那の如く甚しく缺乏はせざるも、濠洲とは比較すべからず。アカシア屬と云ふも濠洲に比すれば貧弱なり。

カウンプール（Caunpur）は從來より鞣皮製革の中心として今日まで有名なり。この地は輕工業は一般に發達せる地なり。蓋し土地中心に近く、人口も稠密にして勞働力も不足なきに由るならん。

搾油業も相當に多し。印度は油料頗る多く、農産の下に記せし油菜の如きはその主要なるものなり。是の以外にも落花生あり、胡麻あり、蓖麻あり、皆優良なる油料なり。之に加ふるに棉花の脫實より來れる棉子實あり、皆適當なる原料なりとす。印度人の最も嗜好せるは牛酪（ギと稱す）なれ共、一般に植物油を嗜好品とす。コプラは他の南洋地方の如く盛に使用せられざるも亦シーロン島にては搾油せり。茶實の如き、搾油は未だなさざるが如く統計上に出でず。糠油の如きは是れを知らざるが如し。

採油は全く壓搾のみにして、ベンヂン、アルコール、蒸氣、四鹽化水素等の化學抽出は未だ之を聞かず。油滓は飲料、肥料となせり。一般の農民の採油は機械すら用ひざるを以て滓中に油分を殘留せるもの多く、船舶運送中に失火をなせしもの少なからず。將來は必ず大機械の完全なる搾油を行はしむる必要あり。

米穀精白及麥粉等は農産加工にして工業と目すべき程度に非らず。製糖工業も亦然り。蔗糖を製せんと欲せば必ず行はざるべからざる工程にして上の米穀の精白に同じ。是に類するは製茶なり。茶葉のまゝにて是を飲食し能はざるに非らずと雖も、一般は必ず製茶による。ビルマのレプチャ族は茶葉のまゝを別の方法を以て之を飲食すと雖も、如此きは論の外なり。以上の數件の工場は殆ど工業と目すべき範圍外なり。

農産加工のうち烟艸工業あり。この種は多少の工業化にして、上の如く農産加工とのみ目すべからず。別にラック製造業あり、ビルマに在り。これラック蟲蠟の製造なり。（此の製造に就ては拙著「臺灣島之現在」五四七―五五〇頁を見よ）是れ簡易加工なれども輕工業と目すべき範圍に入れり。

毛絲、絹絲製造工業

上に記せし綿布、麻布と平行すべき毛絲、絹絲の製造工業あり。

羊毛は印度に於ては最良なるもの無しと雖も、パンジャブ及北西國境カシュミル等の羊は二千萬頭以上なれば、そ

の良好なるもののみを採取するも相當量の羊毛を得べし。

絹絲は家蠶の外に野蠶の産出に關しては世界第一なりとす。大唐西域記によるに、其所服者謂憍奢耶衣及氈布皆憍奢耶者野蠶絲也と云くり。憍奢耶とは Kançeya 絹布を指せる字なり。文非三藏の特に野の字を蠶の上に加へたるは、支那に於ては上古より皆家蠶のみにして、野蠶を以て絹布を作らず。故に是が混同を防がん爲め野の字を加ふ。印度にては上代は殆ど家蠶なく、全く野蠶なり。野蠶は Antheraea Paphia, A. assama, Attacus ricini の三種は現今にても盛に使用せられ、第三は不有數年前臺灣總督府と諮り印度より蠶種を輸入し、臺灣にて飼育し極めて良好なる成績を擧げ、爾來朝鮮にても本邦各地にても是の飼育をなし、その製品家蠶絹に異らず。

如此く印度は野蠶に於ては全世界に冠絕せり。家蠶はカシュミルに最も多し。この氣候風土は我國及北中支那に酷似するを以て、從て家蠶の飼育は極めて佳良なり。現在の絹絲製造工業は野、家兩種なるべしと信ず。

製紙業、製材業

製紙業も無きに非ずと雖も、パルプ製造のみの大工業は是を見ず。蓋し製紙と云ふも恐くは大部分は輸入パルプ以後の工程なるべし。

ヒマラヤ山下の各地特にネパール、シッキム等に於ては、我邦の所謂和紙と名くる物に類する紙を製せり。この原料はヒマラヤ山中の Daphne 屬の樹皮を用ふ。ヒマラヤの針葉樹は相當あり、恐くパルプ資源たるべしと信ずれども、現在にては印度に於て使用するに至らず。印度に於けるパルプ資源は幾多あるも濶葉樹及灌木なり。

サー・ジョルヂ・ワット（印度有用物產誌、八六八頁）によるに、印度に於て製紙原料の最高なるものは Ischaemum, Saccharum, Crotalalia, Hibiscus, Daphne, Edgeworihia 等なりと云くり。

第一の Ischaemum は臺灣に於ては十二種を擧ぐ。何れも皆矮小にして、その用をなさしむるに足らず。印度に於ける I. Angustifolium は臺灣に存在せず。故に是れが實用の試驗は不肖未だ行はず。印度に於ては北部の山間、平原を問はず、又中央印度に及び、最高は二千メートル以上にて繁茂せり。是の艸は禾本科にして、臺灣にてはカモノハシと名く。

第二は甘蔗の類なり。第三は纖維にして、サンと名くる豆科植物なり。一般に綠肥植物とし、臺灣に多く使用せり。これが纖維は優良なるを以てパルプとなす能はざるも、纖維として使用に適せざる廢棄等をパルプとなさば極めて良好なり。岡出臺灣糖業試驗所長は甘蔗の搾殘と合してパルプを作れり。品質極めて良好なり。卽ち第二、第三を合して製作せるものなり。

第四は外皮なり。これが外皮は皆優良纖維なり。その剝皮以後の廢棄のパルプとしての效果は不肖之を知らずと雖も、恐くはその用あるべし。第四の類は極めて成沉なりと雖も盡くこの外皮は纖維として適當ならざるものなし。第五、第六は上に云ふネパール等のヒマラヤ諸國の和紙に類する紙の原料なり。

如此く是を見れば、印度に於けるパルプ資源は廣大にして、現在使用以外にも本邦にて研究し經驗を以てせば、北歐、カナダとその量を爭ふも亦困難ならざるべし。但し濶葉樹は一般にその纖維短きを以て、針葉樹パルプに比し劣れるは皆人の知る所なり。

製材所はその森林の所在地に皆之を存せり。小工業なれども印刷製本工場は到處に存せり。

窯　業

耐火粘土及一般粘土より生ぜる窯業あり。但し純正の硬質陶器は未だ之を見ず。粗陶の外、やゝ火度の高き物に釉藥を施せるが如き程度に及べりと雖も、支那景德鎭產と比肩すべき良品は未だ是を聞かず。然れども粘土を十分に產出せる地方に於ては將來は必ず產出すべきを疑はず。

元來長烟を尙ぶと雖も、最近の製窯術はガスにても重油にても電氣にても、之を長烟を利用せる窯と異らざるまでの技術を進步せしむ。而して製陶術の最高は本邦の技術によりその頂點を極むるに至る。

製　鐵　業

重工業は製鐵を第一とす。ベンガル、ビハルの間に石炭と鐵と相交はれる產地あり。この產地の附近に數所の製鐵所あり。年產二、三百萬トンを出す。是れ印度第一の重工業なり。然れ共この地方の石炭及鐵は決して如此き少額にて足るものに非らず。印度の需要は歐洲（主として英國）よりの輸入により之を充せり。特に機械類の如きは皆輸入品にして印度製品は少なし。從て製鐵產額も少しと雖も猶餘りあり。

我帝國にても事變前は印度より銑鐵を輸入せり。是れ國內需用を滿したる以後の餘剩品に非らず、國內需用は歐米輸入によりその需用を充し、印度の銑鐵の輸出は別箇の採算より來れる結果なり。是れ印度內に於ける機械工業の未發達より生ぜる結果なりとす。

造船、石油精製、機械工業其他

造船もボムベイ、カルカッタ等の大商港の附近にては之を行ふと雖も、その規模極めて小にして云ふに足らず。却て香港、昭南の如き地方に發達せるを見る。石工場あるも重工業と目すべきものに非らず。建築及裝飾品程度を出でず。自動車工場も製造に非らずして修理及組立なり。石油精製工業あり。石油精製工業は油田に附隨せるものなり。油井あらば原油より各精製し分類せらるべきは當然にして、鑛物の加工に過ぎず。鐵道工場あるも、印度の如き長大鐵道に工場の附屬せるは當然にして、別に重工業として特記すべきものなし。一般機械工業も數多の工場（三六九工場）ありと雖も廣大ならず、歐米と比肩すべき程度に非らず。此の外陸軍用の兵工廠あるも今の所論に非らず。

各種手工業

以上は全般的に印度の工業を記せるも、家庭工業の如きは之が統計なきを以て知り難し。印度人の手工に巧みなるは大和民族も是と拮抗するは非常の努力を要す。特に絹織物（キンコブと稱す）に金銀の纖絲を混織せるが如きは我邦京都の織工と雖も之に及ばざるが如き感あり。其他木彫の如きは精巧なるものあり。

石工も亦然り。アグラの大理石に嵌填せる工品の如き、イタリアのフロレンスとその左右を疑ふ。磨石は上古より特殊の技術を有せるが如し。無憂大王の石柱は二千二百有餘年の今日猶光輝ある面を存せり。王室の技術者なるが故に特に最高の技術を有せるものとなすも、如此き技術の二千二百餘年以前に存在せしは印度人の手工に長ぜる例證なり。其他金屬加工の裝飾品も極めて精巧なり。化學も上古は冶金術の如きは相當に進步せしを知るべし。其他一般に

知識と技術は共に優良なりと知るべしと雖も、最近三百餘年衰亡と共に一切の技術も頽廃堕落し、昔日の繁榮を繩に殘星の如く之を止むるに過ぎず。而して歐米の最新の重工業は未だ之を吸收し利用するに至らず、古を捨てゝ今を取らず、正にその中間に彷徨す。是れ今日の現狀なり。明日以後溫故知新せば必ず光輝を放たんこと期して待つべし。此に關しても、大義に依り是れを指導すべきは我帝國國民の任務なりとす。

動　力　源

現在大工業の起らざるはその動力源の利用の不十分なるを主要なる原因なりとす。動力源とは一は熱源なり。一は電源なり。熱源は石炭、石油なり。電源は火力、水力なり。火力電氣は熱源と同一なり。故に今之を論ずるに當りては石炭、石油、水力電の三種を以てす。

而も此中石油源はビルマ中部の如き石油地帶にのみ用ひらると雖も、他は高價なるを以て一般用としては石炭に及ばず。石炭源はベンガル、ビハル、オリッサ、中央印度ゴダヴァリ流域等の大炭田の附近は勿論なれ共、これが運輸をなし、低廉なる賃金を以てすべき地方用となし難きに非らず。故に鐵道と海運と兩ながら是を用ふべし。唯西部印度のみはやゝ不足を免れず。この區域はパンジャブに於ける少面積の炭田の外はベルチスタンに於ける局量の石炭にすぎず。

將來に大發電をなすべきは水力なり。現在にてはカシュミルとマイソルとボムベイの三者を最大の既設發電なりとす。今少しく印度水力源につき是を論ずべし。

水　力　源

印度の水力源は極めて豐富なり。上の氣候の下の雨量を見るに、カシュミル一帶の高地は雨量は一千五百ミリに過ぎざるも、冬季の降雪は一種の溜水池に等しき作用をなし、周年にその水分を分布せり。中部より東方に赴くに從ひ雨量を增加し、ヒマラヤは二千五百ミリ以上の雨量を出す。特にシッキムの如きは三千ミリを超ゆ。マラバル一帶の西ガート山は五千ミリより二千五百ミリの間にあり。アッサムのスルマ流域は又五千ミリに達し、ビルマの西部アラカン一帶も之に同じ。下ビルマも亦然り。

高度はヒマラヤの如きは二千メートルは不可能ならず。（一回の落差ならざるも數回を以てせばこの高さを用ふべし）。中央部は少雨にして而も高度を有せざるにより之に適せざるべしと雖も、この地方は石炭田隨處に在りて熱源に乏しからず。マラバル、アラカン、下ビルマの如きは一千メートルの落差は之を求むるに困難ならず。アッサム、スルマ河流域は源流短きにより、雨量の莫大なるに拘はらず之を利用するに特殊の工夫を用ひざるべからず。今西ヒマラヤを始とし順次是れが說明をなすべし。

西ヒマラヤのうちカシュミルは既設なりと雖も、ジェルム河は決して一箇所にて是を終らしむべからず。カシュミル平原の水位を一千五百メートルとなさば、その差は一千メートルなり。是れが半數を用ひば落差は五百メートルなり。ジェルムは相當なる河川なりと雖も上流はからず。インヅス河も亦スカルド（Skard）よりブンジ（Bunji）に至る峽間は二千五百メートルより一千二百メートルに至る。一千三百メートルの處を用ひば少なくも七百メートルは使用し得べし。インヅスは大河なりと雖も上流は

水量少なくジェルムと大差なし。この兩川はカシュミルに於ける水力源なり。

次はサトレジなり。同じくシムラの北方にて適當の地域を以てせば、三千メートルより一千メートルに至るの間に少なくも一千メートルは之を用ふるに足る。ネパール領内は現在にては未測量の爲に斷言し得ずと雖も、ガンダク(Gandak)の如きは必ず相當量あるべし。シッキム及ブータンは雨量多しと雖も源流短き爲め用ひ難し。アッサム東北隅はブラマプトラを第一とす。チベットの三千メートルよりサデア平原の一百五十メートルに至る二千八百メートルは完全なる落差なり。その半を用ふるも一千五百メートルに及ぶ。これに會せる北方及東方の諸川は皆一千メートルの落差を利用すべし。就中東方より來れるもの最も利用し易し。此の附近は上に云ふが如く支那、印度の連絡上將來に十分探求すべき地方なれば、これが道路又は鐵道と共に十分調査をなすべき必要あり。

次にマラバル一帶の西ガートの西面なり。この面は絶好の落差を有し殆ど絶壁をなせども、その源流なるもの全く之を缺き如何ともすべからず。現にボムベイに送致せる水力電も降雨を一度山の東面の潴水池に貯へ、更に絶壁に放下し動力となせり。從て工費極めて大なり。加ふるに雨は夏時四箇月以外は殆ど之を缺き、その周年利用に困難なき能はず。然れ共その南端クルグ以南は十分に利用すべし。卽ちクルグにては東面に流るゝカウヴェリ川(Cauvery)の上流を潴へ、是を自然の貯水池となし、隧道にて之を西南に放下せしむ。更に南方のトラヴァンコールに入らばペリヤル川(Periyar)の谿谷を堰堤を以て勒し、その全量を少なくも五百メートルに放下し、二千五百ミリの降雨を全く捕捉し得べし。

マイソル高原より流下せるカウヴェリ川は今日既に之を利用せりと雖も、更に數箇所に十分發電せしむべき餘地あり。キストナ、ゴダヴァリは大河なり。水量も極めて大なれども落差極めて小なり。然れども流量大なるを以て、巧

に是を利用せば十數萬キロワットの發電は困難ならず。マハナデも亦然り。スルマの流域は雨量絶大なりと雖も地形は上に云ふが如く極めて不可なり。普通の方法にてはシルチャル(Silchar)の東方マニプルより來れる水を勒し是を發電せしむるを可とす。落差は明かならざるも五百メートル以下なるは必然なり。チェラプンジ(Cherrapunjee)の世界第一の雨量は拱手傍觀して嘆息するの外なし。

アラカン沿岸は海岸山脈屢々相連なり、凡そ兩三重をなしてイラワヂ河と分水、この谿間は狹小にして山高し。從て適當の地には堰堤を設け是を貯へ、その高度に應じ隧道にて是を西面海岸に達せしめ落差を利用す。山も亦狹高にして隧道は皆長大ならず。工費も從て大ならず。此地方は雨期のみの雨なれ共、五千ミリより二千五百ミリに及ぶを以て、河川全部を潴水せば周年均等の落水を利用し得べし。唯落差は大ならざるべく、利用價値は恐くは三、四百メートルならんと信ず。

下ビルマ沿岸も亦此と同じき地勢なり。ビルマの東部シャン地方は雨量は少なきも落差は大なり。適當の地に之を引かば數十箇所の如き少數に非らず。凡そ一、二百箇所は容易なるべし。

シーロンはマハヴェリ大河を勒するを第一とす。この河は西南降雨地帶の山脈に源を發し、北に紆り更に南に折れ東に向ひ、而して再び北に直行し海に入る。これが最後に北折せる地點までは皆適宜發電し得べし。最後の北折地點の高度は明かならざれ共、恐くは四百メートル前後なるべし。源流は二千メートルなれ共、有效なる落差を通算すれば五百メートルは十分利用すべく、北折地點より以下も一百メートルまでは更に是を利用すべく、要は高落差と大水流量と其の河程に從ひ宜しきを用ふべし。其他の小流も適宜の地に於てせば、西南面は常に降雨あるを以て、小流短小なりと雖も小發電に適せざるなし。シーロンの如きは一百萬キロ以上の動力は當分は必要なきを以て、上に記する

範圍にて十分にして、島内需要の爲には如上の地點を適當なりとす。

以上の如く印度各地の水力は豐富なり。決して缺乏をなさず。英人は元來水力發電に長ぜざる民族なり。小本國に於てすらその發すべき電力を今日猶發生せしめず放任せり。カナダの如き、濠洲の如き、南阿の如きも皆然り。是れ本國の從來石炭豐富なりしにより、別に水力を顧みざるも不可なかりしならん。故に印度の如きも水力發電は著しく遲れて起工せられ、今日猶極めて少數なり。是れを支那と比較するに、支那の揚子江の大發電の如きは望むべからずと雖も、隨處に發電し得るを以て、却て支那に於けるよりはその利用に於ては長距離の送電線を必要となさず。パンジャブ、ガンジス等の大平原と北方にヒマラヤ山脈の大電源を有するを以て、揣爾の如き河川は皆大小となくこの目的に利用すべき便あり。唯シンド一帶は如何ともすべからず。ベルチスタン高原は極めて良好なる高原と斷崖を有するも雨至くなく、水力と目すべきものを缺乏せり。

熱源、電源より見たる印度工業の將來

是の熱源、電源により將來を考ふるに、印度の工業地はビハルを第一とし、カンデッシュ（Khandesh）是に次ぎ、極南のカウヴェリ下流又是に次ぐ。アウグ（Oudah）、パンジャブ、東部ロヒルカンド（Rohilkhand）はカウヴェリ下流と等し。唯シンド一帶は全く工業地としてその目的を達せず。現在ガンジスの三角洲一帶はカルカッタを中心として發達すれども、此附近は決して良好なる地に非らず。暴風洪水の害免れ難し。而も原料は皆ビハルより來れり。ビハルを以て直ちに工業地となすを簡捷なりとす。英人久しくカルカッタに蟠居せし爲め是を中心となせりと雖も、然らずば決して如此き不適當の地を發達せしむべき要素なし。

この三角洲は孰れの地方も皆不良なり。强て云へ、アラカンの沿岸に近きチタゴン（Chittagong）より北方に向ひ北緯二十三度三十分に至るの邊を稍佳なりとす。暴風洪水は免れ難しと雖も東側に丘陵を負ふを以て稍可なると、アッサムの物資を海上に送致するは此一帶なるを以て、工業地となすに不可ならず。

ビハルは印度第一の良地域なり。農產に礦產に人口に一の缺點とするもの無し。加ふるに極度の人口稠密は勞働力にも缺乏を生ぜず。却て之を見るに印度農民の窮乏はこの稠密人口の爲なり。農產の增收は決して無限なるものに非らず。況や年に豐凶あり。人の生產は無限にして、窮せざらんと欲するも能はず。

今假りにパトナを以て工業首都と定め、この附近に重輕工業を大に起ずとし之を考へば、十年を出ずして五百萬の大都市は出現すべく、若夫れ是に加ふるに政治的の努力を以てせば六、七百萬に達するも決して難事に非らず。往昔より二千五百年、マガダ國の全印度第一の隆盛なりしは實に其地形による。今北緯二十五度四十分、東經八十五度の線の交叉せる點より全印度を見るに、西北ラワルピンデ、西ボムベイ、南マドラス皆殆ど等距離なり。卽ち約九百三十英里（一千四百八十八キロメートル）なり。東せばアッサム北東の山岳まで八百英里（一千二百八十キロメートル）なり。殆ど全印度の中心に近し。地全印の中心にして物多く人多く水に富み、熱源、電源亦十分なり。是れを工業中心となさずして何處にか中心を求めんや。

パトナは上の經緯の交叉點は東僅か十英里（十六キロメートル）なり。故にパトナとして之を考ふるに不可なしと雖も、不肖は此地方を熟知せり。パトナの東方よりも西方に大都市を築くを便なりとす。然れ共、東方を以て是れに充つるも決して不可なりと云はず。この附近は無憂大王（アッカ）の國都たりし華子城の遺趾なり。故蹟は今に殘れり。大王の雄圖を髣髴すること今日にても難からず。

機械類輸入高表（單位十萬留比）

品別	一九三五―三六年	一九三六―三七年	一九三七―三八年
發動機	一四七	一五五	一七〇
電氣關係	一九二	二四六	二六九
ボイラー	六七	八〇	一一七
金屬作業用（主として工作品）	一七	二八	三六
礦業用	九	一〇	一七
搾油竝精油用	二〇	二〇	二三
製紙用	八	八	四五
冷藏用	一四	一四	二八
精米竝製粉用	七	六	九
製材用	四	三	四
裁縫竝編物用	六五	五四	八二
製糖用	六五	九四	七〇
製茶用	一三	一五	二一
棉花工場用	二〇〇	一八〇	二九二
黃麻繊維工場用	一一五	七四	一〇六
羊毛工場用	四	三	三
タイプライター（部分品及附屬品を含む）	一八	一九	二二
印刷機類	一六	一八	二三
機械用調革裝置	四九	四二	六〇

カンデッシュ一帶は西部に於けるビハルなり。これより西方グゼラット（Guzerat）に至る地方は西部に於て第一の豐饒地方なり。この一帶は中央印度の物資を工業化せしむるにスラットを中心となさざるべからず。今日の如き最姑息の工業にして既にボムベイは飽和して其餘地なし。加ふるに工業は水を用ふ。ボムベイは水に缺乏せること全印度中その比を見ず。而して更に此地に工業を起さんとするは印度を知らざるの盲者なり。スラットは地廣く、加ふるにクプチ（Tapti）の河を以て之を貫流す。而して動力は缺乏せりと雖も、中央印度の熱源たる石炭を運輸せば必しも困難ならず。

中央印度の石炭地帶は五百英里（八百キロメートル）の間隔にあり。水力は附近に無し。少くもボムベイの東側の西ガート山より送致

州別工場統計（一九三九年）

州	工場數	雇傭勞働者日別平均數 男子	女子	青年子	供	總計
マドラス	一、五八四	二三、八四四	四四、一二五	七、五八四	五、二五七	一七〇、八〇〇
ボムベイ	一、八二二	三、一四、〇七七	六三、六五三	四、一七〇	九三一	三九一、七二一
シンド	二八三	二、〇〇七	四、五五三	四九八	一六一	三五、六九一
ベンガル	一、六六七	四四、〇七四	五九、二七一	四九〇	九、三六〇	九三、三〇〇
聯合州	五三七	四〇、二〇九	五、六四一	一、八八	一、二八八	四八、一二九
パンジヤブ	七四七	五三、三九九	八、一五五	一、四一六	八六七	六五、三二七
ビルマ	九八五	七六、八三一	二、四四七	八六七	二〇八	八一、三二九
ビハルオリツサ	二七四	八〇、五七一	五、五五五	一、三三三	三五五	八七、三五五
中央州及ベラル	六四	二、四一一	九一八	二四五	一五五	二、七九四
アツサム	七八	四三、四九二	三〇、二九四	二四五	一、六〇三	七六、二四四
西北邊境州	七一〇	三三、〇六六	九、五八三	七三	一六	四三、九八八
ベルチスタン	二七	一、〇六一	一、六九六	一	一	一、六九八
アジメル―メルワラ	一〇	一、四五五	一、一四	一	一	一、四五七
デリ	四〇	二、一四三	三四三	四	一	二、四九二
バンガロア及クルグ	六〇	一、三一四	三四〇	三三	三	二、一九七
總計	九、三三	一、三七六、一八五	三四四、二〇六	二九、六九四	一、七五二、一四七	三、二一〇、六二二

州別工場統計（一九三九年）

入容易なり。唯海港としては極めて不利にして、ボムベイと比較だもなす能はず。既に製造せられたる商品をボムベイに送らざるべからず。その距離は一百五十英里（二百四十キロメートル）なり。送電線を要す。この地方の工業は主力を附近の太生産なる棉に注がざるべからず。棉に關して此の一帶は印度第一なり。全印度の三分二以上この地方に集まれり。

今日は何等の研究だもなさざるも、將來はこの地方は鹽を基礎とせる各種工業（例せば曹達工業）を行ひ得べし。上來數々云ふ所のランの製鹽も極めて容易に送致すべく、外方ペルシャ灣の岩鹽も亦輸

イに逐致するか、海外輸入の原料をボムベイより將來せば可なり。その距離は僅か一百五十英里（二百四十キロメートル）に過ぎず。貨車を以てするも半日程に過ぎず。海岸線なるを以て平坦なり。

以上は東西の兩工業地たるべき地點につき述を論せり。其他は煩なるを以て省く。要するに印度の將來は纖りて工業增進にあり。工業興らずば農民の富は決して今日より增加するものに非らず。今日の窮乏は決して天然の罪に非らず、全く工業を缺きし罪なり。

職業別工業勞働者賃銀調べ

職業	給料の區別	標準賃銀 市部 地方	標準賃銀 小都會 地方
大工	月給	五〇	四〇
指物師	〃	一二五〇	一〇〇
火夫	〃	一四〇〇	一三五〇
氣罐工	〃	一二五〇	一〇〇
蒸汽機關士	〃	一三五〇	一二五〇
工場總監督	〃	一二五〇	一〇〇
機場長	〃	一二五〇	一〇〇
鍛冶場坂夫	〃	一二五〇	一〇〇
三等印歐混血	〃	一二五〇	一〇〇
等外印度人	〃	一二五〇	一〇〇
〃	日給	四七五〇	四五〇
〃	〃	一一一	一〇一
〃	〃	一一一	一〇一
〃	〃	一一一	一〇一

地方別重要職業勞働者月平均收入調べ（一九三四年）

地方別	機械製作工		鍛冶工		機械組立工		機械工		大工		瓦工	
	歐亞人	印度人	歐亞人	印度人	歐亞人	印度人	歐亞人	印度人	歐亞人	印度人	歐亞人	印度人
直轄ビベシヨラ、シルガヤン、プラダナシ、ポムベイ及附近、ベトナー	四四、一三、一〇、三	四七、一一、九、四	五〇、一一、〇、五	五三、一三、四、九	五二、一一、九、四	四九、一一、六、四	五四、一一、七、四	四四、一一、五、四	五一、一一、九、四	四九、一一、七、四	五〇、一一、八、四	四七、一一、六、四
糖蜜ルダル及サルブナシ、カワタ市ナル、ラル及ユートスラ市リ・ハカイ・ドギナ・市	四一、一〇、三、四	四七、一一、九、四	五〇、一一、〇、五	五三、一三、四、五	五二、一一、九、四	四九、一一、六、四	五四、一一、七、四	四四、一一、五、四	五一、一一、九、四	四九、一一、七、四	五〇、一一、八、四	四七、一一、六、四
煉瓦工												
歐亞人	五〇、一三、八、四											
印度人	四七、一一、六、四											

印度物産表

〔品名〕　〔用途〕

A

Abroma Augusta, Linn.	纖維，藥材
Abrus precatorius, Linn.	分銅，食用
Abutilon Avicennæ, Gærth.	纖維，藥材
Acacia, Willd.	樹脂，藥用，鞣劑，染料，繩用，生垣用，飼料，用材，燃料，楊子，バスケット其他，農具
A. arabica, Willd.	飼料，燃料，齒磨粉，インク，食品，染料
A. catechu, Willd.	木炭，染料，黃繪具，用材，藥材
A. concinna, Dc.	銀板磨料，鞣用（魚絲）
A. jacquemontii, Benth.	藥材，キヤラコプリント，製紙
A. Leucophlœa, Willd.	樹脂，魚網用纖維
A. modesta, Wall.	藥材
A. pennata, Willd.	鞣劑
A. Senegal, Willd.	藥用ゴム

A. Suma, Buch-Ham.	(A. catechu の下を見よ)
Aconitum, (monk's-hood)	
A. Heterophyllum, Wall.	藥材
A. Palnatum, D. Don.	
A. rotundifolium, Kar.	
A. Spicatum, Stapf.	
A. Falconeri, Stapf.	
A. Laciniatum, Stapf.	
A. Lethale, Griffith.	
A. nagarum. Stapf.	
A. deinorrhizum, Stapf.	藥用
A. Balforii, Stapf.	藥用
A. Soongaricum, Stapf.	
A. Chasmanthum, Stapf.	
Acorus Calamus, Linn.	藥劑, 香油, 調味料
Adenanthera Pavonina, Linn.	染料, 建築用材, 樹脂
Adhatoda Vasica, Nees.	藥材, 染料, 家材, 肥料

Ægle Marmelos, corr.	接着劑, 代用石鹼, 精油, ピツクル, シヤーベツト, ヴアニシユ, 膠, エナメルペイント, 香料, シロツプ, 其他食用, 用材
Æschynomene Aspera, Linn.	コルク, 藥材, 食用, 油
Agathis Loranthifolia, Salisb.	ヴアニシユ, 樹脂
Agave, Linn.	接合劑, 代用石鹼, 砂糖, 酢, 研華, 藥材, 食用, 飼料, 酒造料, 纖維
Albizzia, Durazz.	ゼリー, 並樹, 茶・コーヒーの日陰樹, ゴム, 染料, 藥材, 飼料, 用材
Aleurites Fordii, Hemsl.	油, 朱色ペイント, ヴアニシユ
A. triloba, Forst.	蠟燭, 塗料
Alkalis, Alkaline, Earths.	染料, 石鹼, 製糖用劑, 藥材, 帽子塗料, ガラス用ソーダ, 製紙用
Alkaloids.	(Aconitum, Cinchona, Papaver 等の下を見よ)
Allium, Linn.	食用, 藥用
Aloe, Linn.	接合劑
Alpinia, Linn.	藥材, 纖維
Alstnïa Scholaris, R. Bx.	藥材, 用材
Altingia excelsa, Noronha.	藥材, 香水, 樹脂
Alum.	媒染劑, 藥材
Alminium.	製紙用劑其他工業用, 苛性ソーダ, 臺所用品
Amarantus. Linn.	食用

A. caudatus, Linn.	食用
A. paniculatus, Linn.	種子食用
Amber.	藥材，ビーズ，パイプロ
Ambergris.	香料
Amomum Subulatum.	藥材，食用
Amorphophallus Campanulalus, Blume.	藥用，食用
Anacardium Occidentale, Linn.	ゴム，油，藥材，食用，用材
Ananas Sativa, Skult.	食用，纖維製品，藥用，飲料
Andrographis Paniculilala, Nees.	藥材
Andropogon, Linn.	精油
Aniline and Alizarine.	(Coaltar の下を見よ)
Anogeissus Latifolia, Wall.	ゴム，用材．染料，鞣劑
Anona Squamosa, Linn.	纖維，藥材，食用
Antiaris Toxicaria, Lesch.	纖維，樹脂
Antimonium or Antimony.	活字用，頭髮油
Aiump Graveolens, Linn.	藥材，食用
Aquilaria Agallocha, Roxb.	製紙用，纖維，用材，香樹脂，藥材
Arachis Hypogæa, Linn.	油性塗料，食料，藥用，其他
Areca Catechu, Linn.	食料，藥材
Arenga Saccharifera, Labill.	サゴ米，纖維，食料，酒，砂糖製造用
Arsenic (Oxide)	染料
Artemisia, Linn.	香油，藥材，飼料
Artocarpus integrifolia, Linn.	藥材，用材．飲料，ゴム，セメント，染料，ラツク，ファイバー
Asbestos.	防火材料
Astragalus Heratensis, Bunge.	ゴム
Atropa Belladonna, Linn.	藥材
Avena Sativa, Linn.	飼料，食料（オーツ）
Averrhoa Bilimbi, Linn.	藥材，用材
Avicennia Officioralis, Linn.	鞣劑，用材

B

Bamboos.	生垣，履物，其他家具等，釣竿，バスケツト，食用(若菜)，假小屋用材
Barilla or Sajjikhar.	石鹼，ガラス
Basket and Wicker-work.	バスケツト，マツト，木桶，椅子

Bassia Butyracea, Roxb.	人造バター，石鹼原料
B. latifolia, Roxb.	酒精，食用
B. longifolia, Linn.	酒精，食用
B. Malabarica, Bedd.	オイルケーキ，食油，石鹼，食用，ゴム，藥材，用材，染料
Bauhinia, Linn.	用材，油，染料，鞣劑，纖維，藥用，食用，飼料
Beads.	Vegetable（花，果物，種等）Meneral（ガラス，石等）Animal（骨，眞珠等）
Beche-De-Mer.	食用
Bees.	食用蜜，蠟燭，藥用，樹脂
Benincasa Cerifera, Savi.	油，藥材
Berberis, Linn.	染料，鞣劑，油，器具材
Betulautilis, Done.	紙，飼料，食料，用材
Bezoar.	蛇石
Birds.	食用，觀賞用・愛玩用其他
Bixa orellana, Linn.	染料，チーズ色付，纖維，藥材
Bœhmeria Nivea.	紙，織物原料
Bombax Malabaricum, Dc.	ゴム，纖維，食用，藥材
Bones and Bone-crushing Mills.	骨粉

Borassus Flabellifer, Linn.	パルム酒，砂糖，酢，バスケツト，藥材，用材，接合劑，ジユース
Borax or Sodium Bi-Borate.	蠟燭芯，媒染劑，藥材，ガラスビーズ，ヴアニシユ
Boswellia, Roxb.	ゴム，藥材，食用，白蠟
Brassica, Linn.	食用，油，飼料
Broussonetia Papgrifera, Vent.	纖維，製紙用
Brushes and Brooms.	ブラシ
Buchanania Latifolia.	ゴム，ヴアニシユ，油，ナツツ，飼料，用材
Butea Frondooa, Roxb.	纖維，油，ゴム，藥材，ラツク，染料，鞣劑
Buxus Sempervirens, Linn.	藥材，用材

C

Cæsalpinia Bonducella, Flem.	藥材，
C. coriaria, Willd.	染料，鞣劑
C. digyna, Rottl.	鞣劑，油，藥劑
C. Sappar, Linn.	食用，藥材
Cajanus indicus, Spreng.	木炭，食用，飼料，火藥
Calamus, Linn.	綱，バスケツト，マツト，ステツキ

Calophyllum Inophyllum, Linn.	マスト用材，ゴム，用材，樹脂，藥材
Calotropis Gigantea, R.	魚網，絨毯，藥用，製紙用材，織物原料，釣糸
Camelia, Linn.	飲料（茶）
Camphor.	樟腦油
Canarium, Linn.	ヴアニシユ，エナメルペイント，松明
Canavalia Ensiformis, De.	食用
Cannabis Sativa, Linn.	纖維，石鹼，油
Capparis Spinosa, Linn.	油，藥材，食用，用材
Capaicum, Linn.	食用（Red pepper），藥用，酢
Careya Arborea, Roxb.	用材，ゴム，纖維，鞣用，染料，藥材，食料，飼料
Carica Papaya, Linn.	藥材，食用
Carissa Carandas, Linn.	染料，鞣用，食用，藥品，用材
Carpets and Rugs.	綿製，毛製，羽製品
Carthamus Oxyacantl a, Bieb.	グラスセメント
C. Tinctorius, Linn.	染料，下劑，塗料，リノリウム，菓子
Carum Bulbocastanum, Koch.	飲料
C. Carui, Linn.	藥材，油，食料

C. Copticum, Benth.	藥用油，飼料
C. Roxburghianum, Benth.	食料，藥用
Caryota urens, Linn.	食料，用材，ビーズ，纖維，釣糸，網，サゴ砂糖
Cassia, Linn.	藥用，烟艸混用，コーヒー
C. angustifolia, Vahl.	藥用
C. auriculata, Linn.	藥用，齒磨，鞣用
Cedrela toona.	飼料，用材，シカルボツクス，藥材，染料
Cedrus Libani, Barrel.	用材，錘，ヴアニシユ，藥用
Celastrus Paniculata, Willd.	油，藥用
Cement and Materials uaed, Agri.	接着劑
Cericps Candolleana, Arn.	鞣用，染料，藥用，用材
Chenopodium Album, Linn.	食用，藥用
Chickrassia Tabularis, Adt.	用材，ゴム，染料
Chloroxylon Swietenia, Dc.	油，飼料，用材，ブラシ背木，ゴム，染料
Chrysanthemum Coronarium, Linn.	食用，藥用
Cicer Arietinum, Linn.	香料，酢，食用，飼料，ビスケツト
Cinchona, Linn.	藥用

Cinnamomum, Blune.	藥用，油，用材，食用，石鹼材料
Citrullus Colocynthis, Schrad.	藥用，油
C. vulgaris, Schrad.	食用，藥用，油
Citrus, Linn.	食用
C. aurantium, Linn.	食用
C. decumana, Linn.	食用
C. medica, Linn.	食用
Clays, Bricks, Pottery, etc.	陶器，煉瓦，タイル，機械製用，パイプ
Coal.	燃料其他，工業用
Coccus Cacti, Linn.	洋紅染料，ペイント，インク
Cocos Nucifera, Linn. (Coconut)	ココナツツ，コプラ，食品，藥材，其他
Coffea Arabica, Linn. (Coffee)	飲料
Coix, Linn.	食料，藥用
Colchicum Luteum, Baker.	藥用（神經藥）
Colocasia Antiquorum, Schott.	食用，飼料
Commiphora, Jacq.	藥材
Copper and Brass.	機械，器具其他

Coptis Teeta, Wall.	藥用
Corchorus, Linn. (Jute)	撚絲，織布，袋，其他
Coriandrum Sativum, Linn.	食用，藥用，油
Corundum, Ball. (Emery)	工業用
Corylus Colurna, Linn.	食用，用材
Corypha Unbraculiféra, Linn	代用象牙，扇，バスケツト，紙，サゴ，纖維
Cralæva Religiosa, Forst.	藥材，セメント，用材
Crocus Sativus, Linn.	染料，食用，藥用
Crotalaria Juncea, Linn.	綱，絲，纖維材，魚網，綠肥，其他
Croton Tiglium, Linn.	藥材（發泡劑）
Cucumis, Linn. (Melon)	食用
C. Melo, Linn.	食用，油，藥用
C. Sativus, Linn.	食用
C. trigonus, Roxb.	食用，種，燈油
Cucurbita, Linn. (Pumpkin)	食用
C. Maxima, Duckesne.	油，食用
C. Moschata, Duckesne. (Musk melon)	食用

C. Pepo, Linn.	食用，油
Cuminum cyminum, Linn.	藥用
Curcuma, Linn.	食用
C. angustifolia, Roxb.	食用
C. Longa, Linn.	藥用，食用（カレー粉），染料
Cyamopsis Psoralioides, D. C.	飼料，綠肥
Cymbopogon, Spreng.	香油
C. Martini, Stamf.	香油，パラ油混用
C. Nardus, Rendle.	レモングラス（レモンテー，食用），ジンジヤーグラス（油，藥用），藥用，香油，食用
Cynodon Dactylon, Pess.	飼料，藥材
Cyperus, Linn.	藥材，食用，纖維（マツト）

D

Dairy Farming and D. produce.	ミルク，クリーム，練乳，バター，其他
Dalbergia, Linn.	車輛其他用材
D. latifolia, Roxb.	用材，油
D. Sissoo, Roxb.	銃臺孹
Daphne, Linn.	製紙用
Datisca cannabina, Linn.	絹絲黃色染料
Datura, Linn.	藥用（犯罪檢出用）
Datura fastuosa, Linn.	藥材
D. stramonium, Linn.	藥用
Daucus Carota, Linn.	食用，藥用
Delphinium Denudatum, Wall.	藥用
Dioscorea, Linn. (Yam)	食用
Diospyros, Linn.	用材，パルプ，ゴム，染料，其他
Dipterocarpus, Gaertn.	油
D. tuberculatus, Roxb.	木油，用材，藥材
Dolichos, Linn.	飼料，食料，藥用，油
D. biflorus, Linn.	食料
D. Lablab, Linn.	食用
Durio Zibethinus, De. (Duriar)	

E

Elæocarpus Ganitrus, Roxb.	食用油
Elettaria cardamomus, Maton.	食用
Eleusine coracana, Gartn.	飲料
Eriobotrya japonica, Lindle. (Loqust)	食用
Eriodendron Anfractuosum, Dc. (Kapok)	ゴム，鞣，纖維，油，フエルト，救命袋等
Erythrina, Linn.	肥料
Eryihroxylon, Linn.	
E. Coca, Lam.	藥材
E. monogynum, Roxb.	油，藥材，食料（不足時）
Eugenia, Linn.	酒，藥用，用材
E. Gambos, Linn.	食用
E. (jambosa) Malaccensis, Linn.	食用
E. (Zyzygium) Operculata, Roxb.	食用
Eugenia Caryophyllata, Thunb. (Clove)	油
Euphorbia, Linn.	生垣用，藥用，絕緣體，其他
Excæaria Agallocha, Linn.	樹脂，用材，ゴム

F

Fagopyrum, Gaertn. (Buck wheat)	パン，其他食用
Ferula, Linn.	藥用
Ficus, Linn.	ゴム
F. bengalensis, Linn.	ラツク，鳥黐，ゴム，纖維，藥用，食用，飼料，用材
F. Carica, Linn.	藥用，ラツク，纖維，食用
F. glomerata, Roxb.	樹脂，食用，用材，染料
F. infectoria, Roxb.	纖維，食用，木炭
F. religiosa, Linn.	藥材，飼料，用材，樹脂，ラツク，纖維，紙，鞣劑，染料
Fish and Fesheriss.	食用，製油，藥用，其他
Fœniculum Vulgare, Gasrtin. (Fennel)	藥用

G

Garcinia, Linn.	樹脂，ヴアニシユ油，食用果，用材，染料
G. indica, Chois.	種，油，食用果

G. Mangostana Linn.	食用，鞣劑
G. Morella, Dest.	樹脂，藥用，油，黃色染料，食用
Gem-Stones.	ダイヤモンド其他寶石
Glass and Glassware.	ガラス製品
Glycine Soja, Benth.	食用，飼料
Gold.	工業用其他
Gossypium (Cotton)	織布其他
Graphite.	鉛筆用，工業用
Grewia, Linn.	纖維，用材，食果
Guizotia Abyssinica, Cass.	油菓子
Gutta-Percha.	樹脂，酸化劑

H

Hemidesmus indicus, Br.	藥材
Hibiscus, Medik.	纖維，染料，ゼリー，紙，用材
H. cannabinus, Linn.	纖維，綱，カンバス，油
H. esculentus, Linn.	纖維，綱，索，藥材，食用
Hédes, Skins, Leather, etc.	靴，ベルト，鞄其他
Holarrhena Antidysenteréca, Wall.	藥品，木油
Hordeum Vulgare, Linn. (Barley)	食用，ビール，飼料，藥材
Horns, Antlers, and Horn-work.	角製品
Hydrocotyle Asiatiea, Linn.	藥品

I

India-Rubber.	ゴム工業一般
Indigofera (Indigo)	藍色染料
Insects (Insecta)	養蠶，野蠶，養蜂，ラツク蟲，五倍子，蟲蠟其他
Ipomœa, Linn. (Jalap)	下劑
I. Batatas, Lamk.	食用，アルコール
Iron and Iron manufactures.	機械，藥材，其他
Ischæmum Angustifolium. Hock.	マツト，パルプ，紙
Isinglass, Gelatine, Glue and Gelose.	食用
Ivory and the M nufactures Theréfrom.	工藝品其他

J

Jatropha, Linn.	ジユース，油，染料，藥用
Juglans Regia, Linn.	用材，染料，藥材，食用，油

L

Lagenaria Valgaris, Seringe.	食用，油．油入れ
Lagerslrœmia, Linn.	用材，纖維．樹脂
Lard and Tallow.	Lard（油，塗藥），Tallow（石鹼，蠟燭）
Lathyrus Sativus, Linn.	食料，飼料
Lawsania Alba, Lam.	染料，コスメテイツク，油
Lead and its Salts and Manuf.	藥用
Lens Esculenta, Noench.	食用，藥用
Lime, Marble, Chalk, etc.	土木建築用材，藥品其他
Linum usitatissimum, Linn. (Flaxplant)	亞麻仁油，纖維，紙，飼料，食料
Live Stock of India.	牛，水牛，羊其他，食用，其他
Live Stock.	
1. Oxen and Buffaloes.	飲用，食用
2. Goats and Sheep.	羊毛，食用
3. Horses, Asses, Mules.	耕作，食用，其他
4. Pigs, wild Boars.	食用
Luffa, Cov.	バススポンジ，ボートシヨツクス

M

Malachra Capitata, Linn.	織布，其他
Mallotus Philippenensis, Muell.	染料，藥用，油，用材
Melt Liquors and Indian Brewing.	ビール釀造用
Manganese.	工業用
Mangifera indica, Linn. (Mango)	食用，藥用，用材，樹脂，染料
Manihot Utilissima, Pohl. (Tapioca)	食用，藥用（青酸）
Manures and Fertilisers.	肥料（家畜，魚，骨粉，艸木其他）
Maranta Arundinacea, Linn. (Arriouroot)	食用
Marsdenia, Br.	纖維，青色染料
Mats and Matting Materials.	毛製，艸木皮製其他

Medicago Sativa, Linn.	綠肥
Melanrrhœa, Usitata, Wall. (Varnish)	ラツカー他塗料
Melia, Linn. (Neem)	樹脂, 油, 菓子, 楊子, 飲用
Mica.	ランタングラス, 其他工業用
Morinda, Linn.	染料
Moringa Pterygosperma, Gaertn.	樹脂, 油
Morus, Linn. (Mulberry)	食用 (實), 用材, 養蠶用
Moschus Moschiferus, Linn.	麝香, 香料
Musa, Linn. (Banana)	藥用, 食用, 纖維 (紙, 絲其他), 飼料
M. textilis.	紙, 纖維
Myristica, Linn.	蠟燭, バター, 香料, 藥材

N

Nardostachys jatamansi, Dc.	香料, 香水
Nephelium Lit-chi, Camb.	食用
Nicotiana, Linn. (Tobacco)	吸烟用, 藥用
Nigella Sativa, Linn.	油, 藥品, 酢

O

Oils, Oil-seeds, Fats, etc.	バター, リノリユーム. 香料, ペイント, 石鹼, 蠟燭, 燈用, 食用, 其他
Oldenlandia umbellata, Linn.	染料
Operculina Turpethum, Manso.	藥用
Opuntia, Mill.	食用, 飼料, 生垣用, 纖維
Oryza, Linn. (Rice)	食用, 飼料
O. Sativa, Linn.	食用, 飼料, 藥用, 酢, 染料, 其他

P

Panicum, Linn.	飼料, 食料
P. Miliaceum, Linn.	食料, 飼料
P. Miliare, Lamk.	食料, 飼料
Papaver and Opium.	藥用, 食用 (種), 油
Paper and Paper Materials.	印刷其他
Paspalum Scrobiculatum, Linn.	食用
Penniaetum Tykhoideum, Rich.	食用, パン, 飼料

Petroleum.	燈用，機械用，其他
Peucedanum Graveolens, Benth.	香油，藥用
Phasolus, Linn. (Kidnoy Beans)	食用
P. aconitifolius, jaog. (Aconite leoved)	藥用，食用
P. Lunatus, Linn. (Lima)	食用
P. Mungo, Linn.	食用，飼料，藥用
P. radiatus, Linn. (Mungo)	食用
Phœnix, Linn. (Date palms)	食用
P. dactylifera, Linn.	砂糖，飼料，藥用ゴム，マツト，ステツキ，食用
P. Sylnestris, Roxb.	酢，樹脂，バスケツト，マツト，砂糖，烟艸用糖蜜
Phyllanthus, Linn.	用材，藥用，樹脂，染料，鞣用，パルプ
Pimpinella Anisum, Linn.	アニシード油（芳香劑）
Pinus, Linn.	松明，マナ蜜，用材，テレビン油
P. longifolia, Roxb.	石鹼，香油，松精脂，コロフオニユーム
Piper, Linn.	香油，藥用
P. Betle, Linn.	庭園用，屋根用，肥料
P. Nigrum, Linn.	肥料，胡椒
Pistacia, Linn.	テレビン油，食用（ナツツ），五倍子，飼料，用材
Pisum, Linn.	飼料，食料
Podophyllum Emodi, Wall.	染料，樹脂
Pogostemon Heyneanus, Benth.	香料
Prunus, Linn.	
P. Amygdalus, Stokes. (Almond)	樹脂，香油，藥用，食用，固形油
P. armeniaca, Linn. (Apricot)	樹脂，油，食用，用材，燃料
P. cerasus, Linn. (Dwarf cherry)	樹脂，食用（果），家具，什器，パイプ材
P. communis, Huds. (Plum)	樹脂，油，食用（果），紙細工（箱）
P. padus, Linn. (Bird cherry)	樹脂，器具材，藥用油，食用（果）
P. persiea, Stockes. (Peach and Nectarine)	樹脂，油
P. Puddum, Roxb. (Willd Himalayan cherry)	樹脂，油，酒，用材
Psidium Guyava, Linn.	食用（果），グアバチーズ，染料，用材
Pterocarpus, Linn.	
P. dalbergioides, Roxb.	用材
P. indicus, Willd.	用材
P. marsupium, Roxb.	鞣劑，染料，飼料，肥料，用材

P. santalinus, Linn.	染料, 用材
Punica Gronatum, Linn.	藥材, 赤色染料, 鞣劑, 箱材
Pyrus, Linn.	
P. communis, Linn. (Pear)	食用 (果), 用材 (木)
P. malus, Linn. (Appls)	食用

Q

Quercus, Linn. (Oaks)	
Q. dilatata, Lindl. (Green oak)	用材, 木炭
Q. incana, Roxb. (Grey oak)	用材, 木炭, 鞣劑
Q. lamellosa, Smith.	用材
Q. lusitanica, Lam.	染料, 藥劑
Q. semecarpifolia, Smith. (Broun oak)	用材, 木炭, 野蠶

R

Raphanus Sativus, Linn. (Radioh)	食用, 油
Rheum Emodi, Wall. (Rhubarb)	藥材
Rhizophora Mucronata, Lamk. (Mangrove)	ジュース, 酒, 用材, 染料, 鞣劑, 藥材
Rhus, Linn.	
R. coriaria, Linn.	製革, モロツコレザー
R. cotinus, Linn.	染料, 鞣劑, 用材, バスケツト
R. succedansa, Linn. (Wild Varnish)	ワツクス
R. vernicifera, Dc. (Jupanese Varnish)	ラツカー
Ricinus. Communis, Linn. (Castor)	野蠶飼料, 藥材, 肥料, ガス, 家畜用藥
Ropes and Cordage.	綿絲, 毛製, 樹皮製其他
Rosa, Linn. (Rose)	
R. centifolia, Linn. (Cabbage Rose)	バラ油, バラ水
R. damascena, Mill.	香料, バラ油
Rubia, Linn.	
R. cordifolia, Linn. (Indian madder)	茜色染料
R. sikkimensis, Kurz.	髮染劑
R. tinctorum, Linn.	染料, 飼料

S

Saccharum, Linn. (Sugars)	食用其他，砂糖
Betavulgaris, Linn. (Best)	
Caryota urens. (Indian Sago-palm)	
Cocos nucifera. (Cocoanut)	
Sacchsrum officinarum. (Sugar cone)	
Manna (Manna)	
Phœnix Syluestris. (Dote)	
Vitis vinifera (Vine)	
Zea Mays (Maiye)	
Saccharum Arundinaceum, Retz. (Sara and Munji)	バスケット，織物原料，製紙，マット
S. spontaneum, Linn.	屋根葺材料，飼料
S. officinarum, Linn. (Sugar cane)	菓子其他食用，飼料
Salep.	藥用
Salt, Sodium Chloride.	食用，工業用其他
Saltpetre, Nitre or Potassium Nitrate.	火藥，染料，藥用，肥料

Sansevieria Roxourghiana, Schult.	纖維
Santalum Alaum, Linn.	藥用，染料，香料
Sapindus Mukorossi, Gaertn.	石鹼用，藥用
Sapium Sebiferum, Roxb.	菓子，染料，用材，蠟燭，石鹼，藥用油，傘油
Saussurea Lappa, C. B. Clarke.	香料，藥用，染髮料
Schleichera Trijuga, Wild.	ヘヤーオイル，藥用，ラツク，用材
Semecarpus Anacardium, Linn.	食用，ヴアニシユ，インク，染料
Sesamum Indicum, Dc.	石鹼，ランプ油，香油，食用，飼料
Sesbania Aculeata, Pers.	纖維（魚網），肥料，屋根葺用
Setaria Italica, Beauv.	食用，ビール用，飼料
Shells.	食用，美術用等
Shores Robusta, Gaertn.	染料，鞣劑，食用，枕木，造船材
Sida carpinifolia, Linn.	
S. rhombifolia, Linn.	纖維
Silk,	織物用其他
Bombyx (Sericaris) mori, Linn.	
Antheræa paphia, Linn.	

Anlheræa assama, Westw.	
Attacus ricini, Boisd.	
Solanum, Linn.	
S. melongena, Linn.	食用
S. tuberosum, Linn. (Potetoes)	食用，スターチ，アルコール
Sorghum, Pers.	飼料
S. Vulgare, Pers.	食用，飼料
Soymida Febrifuga, Adr-juss.	樹脂，繊維．鞣劑，藥材，用材
Spirits and Indian Distlling.	飲料，酒
Squills.	藥用
Steatite or Talc.	磨用，ガスバーナー，白インキ，鉛筆
Sterculia, Linn.	食油，藥材，樹脂，繊維，用材
Strobelanthes Flaccidifolius, Nees.	インヂゴ染料
Strychnos Nux-Vomica, Linn.	染料，藥用油，用材
Styrax Benzoin, Dryand.	藥材，香料
Swertia chirata, Ham.	藥材
Symplocos Racemosa, Roxb.	染料，藥材，用材

T

Tachardia (certeria) Lacca, Kerr.	染料，ラツク
Tamarindus Indica, Linn.	接着劑，家具・農具用材，樹脂，染料，油，藥材，食料油
Taraktogenos Kurzü, King.	各種（家具，造船，車體其他）用材，鞣劑，油，藥材
Tectona Grandis, Linn. (Teak)	
Terminalia, Linn.	樹脂，染料，鞣劑，造船其他用材
T. Arjuna, Bedd.	樹脂，染料，食用，用材
T. belerica, Roxb.	油，藥材，食用
T. catappa, Linn.	香水，コスメチツク，染料，鞣劑，用材，ラツク
T. tomentosa, W. & A.	樹脂，用材，染料，鞣劑
T. chebula, Rety.	オイル，バター，チヨコレート等食用
Theobroma cacao, Linn.	工業用，造船，器具其他
Tin.	工藝品，食用
Tortoise and Turtle Etc.	食用，用材
Trapa Bispinosa, Roxb.	食用．藥材
Trichosanthes, Linn.	

Trionella, Linn.	食用，飼料
Triticum Vulgare, Villars.	マカロニ，パン，ビスケツト其他食用

V

Vateria indica, Linn.	ヴアニシユ，蠟燭，油，バター，用材
Vetiveria Zizanioides, Stapf.	扇，バスケツト，繪具，香料，藥用，飼料
Vicia Fava, Linn. (Broad Beon)	食用
Vigna catjang, Walp. (Cowpea)	食用，飼料，染料
Vinegar (Acetum)	工業用，調味料
Vitis, Linn.	
V. vinifera, Linn.	食用，藥用，酒，酢

W

Withania, Pauq.	
W. coagulans, Dunal.	藥用，凝乳劑（チーズ用）
W. sommfera, Dunal.	藥用
Woodfordia Floribunda, Salisb.	燃料，樹脂，染料，鞣劑，藥用，食用
Wool, Goat's-Hair and Pashm.	ショール，カーペツト，其他織物用
Wrightia, Br.	
W. tinctoria, R. Br.	ゴム，顏料，用材
W. tomentosa, Roem.	染料，藥用油．食用，櫛其他用材

Z

Zea Mays, Linn.	食料，飼料，油，紙材，肥料，其他
Zingiber Officinale, Rovcoe.	藥用，油，飲料
Zizyphus, Juss.	
Z. jujuba, Lamk.	木炭，鞣劑，藥用，食用（實），飼料，用材
Z. Vulgaris, Lamk.	シロツプ，食用，家畜飼料

【サー・ジオルヂ・ワツト「印度物產誌」に依る】

印度貿易總額（單位千留比）

年度	輸入	輸出	再輸出	輸出總計
一九三六―三七年	一、三五二、四〇五	一、九六二、二四六	六二、四〇七	二、〇二三、六五三
一九三七―三八年	一、五七七、八二六	一、八〇九、二四二	八二、八一三	一、八九二、〇五五
一九三八―三九年	一、五三三、七二一	一、六二七、七七〇	六四、二三三	一、六九一、九五〇

重要相手國別輸出入合計（單位千留比）

	總額	英帝國	日本	北米合衆國	獨逸	白耳義	伊太利	佛蘭西	埃及	和蘭
輸出										
一九三六―三七年	三、二三、六五三	一、五二一、三九	九〇、七七三	八八、一九五	四三、四七八	三六、三八一	一、七〇三、三四四	五八、四四五	三六六、五七一	三一、六三三
一九三七―三八年	三、五四七、〇六八	一、八七八、一七	一、〇六、六〇四	三四二、〇二六	六九、四六五	六二、五八三	四七、八九三	四八、四〇三	四三、九五七	三五、三五九
一九三八―三九年	三、三五一、一三八	一、七三一、六八八	一、〇六、六〇四	三四二、〇二六	六二、六九〇	六一、四六一	五三、二五一	五三、四八〇	四八、一四三	三四、〇一三
輸入										
一九三六―三七年	一、三五二、四〇五	六二、四〇七	二、〇二三、六五三							
一九三七―三八年	一、五七七、八二六	八二、八一三	一、八九二、〇五五							
一九三八―三九年	一、五三三、七二一	六四、二三三	一、六九一、九五〇							
輸入合計										
一九三六―三七年	三、二七五、四四五	一二四、一四七	二、九二六、二四六							
一九三七―三八年	三、四五五、八四三	一四七、九三六	三、七八二、一三一							
一九三八―三九年	三、四八五、七四一	一三四、一四六	三、六九二、九五〇							

	諸外國	總額	英帝國	日本	錫蘭	海峽植民地	濠洲	ニヤ	ケ
輸出									
一九三六―三七年	一、三三、六五三	一、五二一、三九	九〇、七七三	八八、一九五	四三、四七八	三六、三八一			
一九三七―三八年	一、八七八、一七	一、〇六、六〇四	三四二、〇二六	六九、四六五	六二、五八三	四七、八九三			
一九三八―三九年	一、七三一、六八八	一、〇六、六〇四	三四二、〇二六	六二、六九〇	六一、四六一	五三、二五一			
輸入									
一九三六―三七年	六二、四〇七	二、〇二三、六五三							
一九三七―三八年	八二、八一三	一、八九二、〇五五							
一九三八―三九年	六四、二三三	一、六九一、九五〇							
輸入合計									
一九三六―三七年	一二四、一四七	二、九二六、二四六							
一九三七―三八年	一四七、九三六	三、七八二、一三一							
一九三八―三九年	一三四、一四六	三、六九二、九五〇							

品目別輸出表（單位千留比）

品目	一九三五―三六年	一九三六―三七年	一九三七―三八年	一九三七―三八年輸出金高の輸出總額に對する百分比
黃麻纖維	一三七、〇七八	一四七、七一〇	一四七、九一〇	八・一四
黃麻纖維製品	二四八、四一八	二九四、〇四〇	二九〇、七七六	一六・〇七
棉花（屑棉共）	三三四、五三〇	四三九、三三五	二九七、七二六	一六・四六
棉花製品	五六、四二三	七〇、三三〇	九二、九三〇	五・一四
茶	一九九、六八二	二〇二、一八三	二四三、八九九	一三・四八
種子類	一〇四、九三三	一八五、九五四	一四一、八六五	七・八四
穀物（粒及粉）	三七、四二七	六五、六九七	九四、八八九	五・二四
皮革	五六、九四七	七四、四三七	七三、五四二	四・〇二

（註）英帝國及諸外國小計には其他の屬領、諸外國をも含む

| | | |

機械類及工作物	一三六、三五〇	一三六、三五〇	九・八七
金屬及礦石	一三三、八一八	一四一、九九一	七・七一
穀物、豆類及製粉	一四一、九九一	六五、七三	七・〇〇
諸乘	六五、七三	四九、七二九	五・三三
機械（學術用）及器械用具	四九、七二九	三〇、一六〇	二・一六
人造絹絲	三〇、一六〇	二四、九七二	一・九二
羊毛（製品竝未加工）	二四、九七二	二七、四〇〇	二・〇五
紙及厚紙	二七、四〇〇	三三、五三九	二・三四
染色竝皮鞣し材料	三三、五三九	二九、三四一	二・一九
化學製品	二九、三四一	二四、七九九	一・七九
金物類	二四、七九九	二四、八三七	一・七九
木材類	二四、八三七	二七、〇八八	一・九五
生絲（製品竝未加工）	二七、〇八八	一三、五八三	一・〇一
食料及製油原料	一三、五八三	二〇、三六	一・四五
藥品類	二〇、三六	二三、〇六	一・六五
諸飲料	二三、〇六	一九、三九	一・三九
ゴム製品	一九、三九	六、四六一	〇・四六
香料	六、四六一	一三、八五三	〇・九二
果實及野菜	一三、八五三	四、一〇六	〇・二九
硝子及硝子製品	四、一〇六	四、一二九	〇・二九
武器、彈藥其他軍需品	四、一二九	九、五五三	〇・六四
寶石及眞珠（臺なし）	九、五五三	一七、八四〇	一・二二
塗料及塗裝原料、烟草	一七、八四〇	九一、〇五四	六・五一
肥料	九一、〇五四	一四一、八六三	九・九一
茶	一四一、八六三	六二、一三八	四・三五
建築竝工事材料	六二、一三八	三七、〇五三	二・五一
化粧品類	三七、〇五三	二六、〇五五	一・八四
法衣裝飾刺繍	二六、〇五五	二、〇〇三	〇・一四
小間物及婦人裝身具類	二、〇〇三	五、九九七	〇・三五
書籍、印刷物其他	五、九九七	一九、〇五三	一・三二
機械調革裝置	一九、〇五三	一五、四四九	一・〇三
鹽	一五、四四九	一二、〇〇三	〇・八四
時計（柱掛用及小形）及部分品	一二、〇〇三	五、九九七	〇・三五
陶器及磁器	五、九九七	八、〇〇八	〇・五六
玩具及遊戲用品	八、〇〇八	九、一二八	〇・六四
捲框類	九、一二八	八、三一二	〇・五五
牛脂及ステアリン	八、三一二	一七、一五六	一・一九
動物（生けるもの）類	一七、一五六	一三、九三一	〇・九二
羽毛	一三、九三一	一二、六八五	〇・八四
洋傘及附屬品	一二、六八五	八、五四八	〇・五八
樹脂	八、五四八	一〇、一九六	〇・七一
石鹼	一〇、一九六	四、一二九	〇・二九
亞麻（製品及未加工）	四、一二九	九、五五三	〇・六四
靴	九、五五三	一七、八四〇	一・二二
家具類	一七、八四〇	九一、〇五四	六・五一

文房具	六、〇六三	六、九三八	八、一〇三
肥料	七、〇八三	七、九二六	七、九七〇
茶	五、八一七	五、六二六	七、一〇〇
建築竝工事材料	六、一七四	五、五五八	六、九一六
化粧品類	五、八五七	五、九〇九	六、七六五
法衣裝飾刺繍	六、四九三	五、六六四	六、七六四
小間物及婦人裝身具類	四、八六七	五、三三三	六、三三一
書籍、印刷物其他	五、一〇六	四、四九六	六、一一八
機械調革裝置	四、九一四	四、四九八	五、五七七
鹽	四、五一六	三、七二四	四、七八一
時計（柱掛用及小形）及部分品	一、七七五	三、九七三	四、二七〇
陶器及磁器	三、六五八	三、二四四	四、二七四
玩具及遊戲用品	四、二四七	三、二四四	四、二七四
捲框類	三、一〇三	三、四四九	四、二七四
牛脂及ステアリン	二、七五三	一、五一五	三、八四三
動物（生けるもの）類	二、六二一	二、六六八	三、〇五九
羽毛	二、六六五	一、五五三	二、八〇六
洋傘及附屬品	二、五四〇	二、三四四	二、七四三
樹脂	二、六四六	二、三四四	二、四四七
石鹼	三、二〇五	一、六二七	二、二四〇
亞麻（製品及未加工）	一、六五三	一、五二七	二、二三五
靴	二、二七	二、〇四	二、一三
家具類	一、二一七	一、五二七	二、二四〇

州別輸出額（單位千留比）

州名	輸出			再輸出			總輸出額		
	一九三六—三七年	一九三七—三八年	一九三八—三九年	一九三六—三七年	一九三七—三八年	一九三八—三九年	一九三六—三七年	一九三七—三八年	一九三八—三九年
ビマシボオベ	一四、九〇六	一六、六四〇	一五、四七六	四、三七一	五、〇一四	四、三五六	一八、二七七	二一、六五四	一九、八三二
ルラドンムリンガ	一、一〇〇	一、二〇〇	一、一〇〇				一、一〇〇	一、二〇〇	一、一〇〇
マスドイサル	一、三五六	一、四〇〇	一、四〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二、三五六	二、四〇〇	二、四〇〇
計	一七、三六二	一九、二四〇	一八、九七六	五、三七一	六、〇一四	五、三五六	二二、七三三	二五、二五四	二四、三三二

州別輸出額（單位千留比）

品目	數量（單位千トン）			價格（單位十萬留比）		
	一九三五—三六年	一九三六—三七年	一九三七—三八年	一九三五—三六年	一九三六—三七年	一九三七—三八年
鋼鐵	六、六	四、四	四、三	二、七	二、五	二、六
鐵棒、（鑄造鋼鐵とは異る）	四、九	四、六	四、二	二、五	二、四	二、四
角鋼及丁字管	二、七	二、六	二、四	一、二	一、二	一、二
梁、漂、柱、桁、構及橋梁工事材料	三、七	三、四	三、四	一、六	一、六	一、六
レール及大ソート	一、二	一、〇	一、〇	一、〇	一、〇	一、〇
ボイラー材料（鍍亜鉛針金を含む）	一、七	一、六	一、六	一、〇	一、〇	一、〇
計	一九、三	一七、三	一七、一	八、四	八、二	八、三

鐵類輸入高表

州名	一九三五—三六年	一九三六—三七年	一九三七—三八年
ビマシボオベ	五三、七〇六	一四九、三〇八	一三七、一四八
ルラドンムリンガ	一、一〇〇	一、二〇〇	一、一〇〇
マスドイサル	二、三五六	二、四〇〇	二、四〇〇
計	五七、一六二	一五二、九一八	一四一、六五四

州別輸入額（單位千留比）

州名	一九三五—三六年	一九三六—三七年	一九三七—三八年
ビマシボオベ	一四、九三五、一一四	一七、三七一、五一六	一九、三五八、六〇四
ルラドンムリンガ	一、四三〇、三〇五	二、一九五、八〇〇	二、四六〇、〇〇〇
マスドイサル	一、四一四、六五五	二、四六二、七三七	二、五一三、八九八
計	一七、八八二、〇四六	二一、六二〇、一五四	二四、三三七、五〇二

印度貿易表

鐵類輸入高表

品目	數量（單位千トン）			價格（單位十萬留比）		
	一九三五—三六年	一九三六—三七年	一九三七—三八年	一九三五—三六年	一九三六—三七年	一九三七—三八年
鋼鐵	六、六	四、四	四、三	二、七	二、五	二、六
鐵棒、（鑄造鋼鐵とは異る）	四、九	四、六	四、二	二、五	二、四	二、四
角鋼及丁字管	二、七	二、六	二、四	一、二	一、二	一、二
梁、漂、柱、桁、構及橋梁工事材料	三、七	三、四	三、四	一、六	一、六	一、六
レール及大ソート	一、二	一、〇	一、〇	一、〇	一、〇	一、〇
ボイラー材料（鍍亜鉛針金を含む）	一、七	一、六	一、六	一、〇	一、〇	一、〇
計	一九、三	一七、三	一七、一	八、四	八、二	八、三

| | | |

有史以前より動かすべからざるの鐵則なりと斷ずべからず。

加ふるにイスラム教徒の西方より來侵するや、是れが士卒は全印度に彌覆し、戰勝の餘威は清濁を一洗し姻婣を通じ、特にイスラム教は一夫四妻を敎則上よりも之を認可するを以て、一層その種族を混同せしむるに至れり。然れ共イスラム教徒の侵入はその人數少數なりしを以て、スレイマン山脈は依然是れが障壁をなし、甚しき混同を印度全部に行はしむるに至らず。今日に於てイスラム教を崇拜せる者は皆外來民族にして印度人に非らずと云ふべからず、却てその大部分は純印度人なるを見るべし。

人種の三大別

今歐人にして人種學に通ぜる人士及印度歷史を研究せる人士の云ふ所を綜合するに、やゝ宿霧を披き天日を見るが如き感あり。サー・トマス・ホルデッチ（印度、二〇〇―二二七頁）の云ふ所を抄錄して之を記すべし。

アリヤン人種

有史以前にアリヤンと名くる人種は、サンスクリット語（我邦にては梵語と該稱せり）を語れる者は中央アジアよりインヅス河流域及パンジャブに遷移移住せり。この年月は西曆紀元前二千年（我皇曆紀元前一千三百四十年）の頃にして、アヨダ（Ayodha）を建設せり。多くの學者の云ふ所によれば、此時代にラマヤナ（Ramayana）の詩を述作せしが如し。ラマヤナはこの神話を以てアリヤン人のシーロンを征伐せし事を諷諭せるものと信ぜらる。此の當時は

ブラマン敎（婆羅門敎）は南印度一帶に流布せられしが如し。

是より遙に後代にて恐くは八百年以後（西曆紀元前一千二百年頃）ならんか、第二の中央アジアより移住民あり。この種族は先住のアリヤン族よりは純粹ならざるが如く、多少のタタル（Tatar）の混血なるべしと信ぜらる。先住のアリヤン族を日種と名け、後來者は月種と呼べり。而してこの兩者の爭鬪を神話の如く記載せるはマハバラク（Mahabharata）なり。これより日種――今日のラジュプト（Rajput）――の一部は印度平原よりヒマラヤ及インヅス河の丘陵地に移れり。

更に後代西曆紀元前七百年の頃にはブラマン族はグシャトレヤ族（刹帝利、Kshatrya）とその勢力を分ち、上古より來れる淨行（宗敎的行爲）より別に兵武の方にも進出せるが如し。而して西曆紀元前六百二十三年に釋迦族に大聖世尊の降誕を見るに至れりと云へり。（西人の歷史家はこの年月を以て佛の誕生の年となせるが如し。數年の相異は免れざるも概ねこの邊の年月に一致せり。卽ち我皇曆の紀元以後四十三年なり。大體を以て云ふに我皇曆の紀元と大差なきものと信ぜらる。）釋迦種は日種のクシャトレヤなるは經典に明かにして疑を容れず。而もこの日種のクシャトレヤは、上に云ふマハバラク以後にヒマラヤ山下に移住せる一種族と認定せらる。

ドラヴィヂアン人種

アリヤンの史乘のみを以て印度の種族を論ずべからず。ツラニアン（Turanian）も、ドラヴィヂアン（Dravidian）も皆印度民族の元素にして、現にその住民の二割以上は是に屬せり。この兩種は人種としてはアリヤンに劣れるも、その民族の純粹にして混雜せざる點に於ては却てアリヤンに勝れり。